

靈界物語 第二六卷 海洋萬里 丑の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二六卷』愛善世界社

1998(平成10)年06月19日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序歌 じよか

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇 伊都寶珠 いづほつしゆ

第一章 麻邇の玉〔七六六〕 まにたま

第二章

真心まごころの花はな (一) (七六七)

第三章

真心まごころの花はな (二) (七六八)

第四章

真心まごころの花はな (三) (七六九)

第五章

真心まごころの花はな (四) (七七〇)

第二篇

蓮華れんげ臺上だいじやう

第六章

大神おほみ宣のり (七七二)

第七章

鈴すずの音おと (七七三)

第八章

虎とらの嘯うそぶき (七七四)

第九章

生言いくこと靈たま (七七五)

第三篇

神都しんとの秋あき

第一〇章 船歌ふなうた〔七七五〕
第一章 言ことばの波なみ〔七七六〕
第二章 秋あきの色いろ〔七七七〕

第四篇 波瀾重疊はらんちようでふ

第一三章 三みつ巴どもゑ〔七七八〕
第一四章 大變歌だいへんか〔七七九〕
第一五章 諭詩さとしの歌うた〔七八〇〕
第一六章 三五玉さんごだま〔七八一〕
第一七章 歸かへり路みち〔七八二〕

跋ばつ

〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕

序歌 じよか

雲霧四方に吹晴らし

現はれ給ふ日の神の

御影待ちつつ竹下氏

寫眞機械を装置して

手具脛引いて待つて居る

待ち倦みたる瑞月が

退屈紛れにスパスパと

熏らす敷島二本まで

灰にしたれど未だ照らぬ

横に寝たまま頬杖を

つくづくレンズを眺めつつ

待つ間の長き鶴の首

教主館の奥の間で

痺れを切らし待ち倦む

時しも思はず斯藝琉氏が

パチンと音をたてシヤツター

用意の爲に今一度

寫して見ようと二つ玉

敷島煙草が又一つ

灰になるまでじらされる

嗚呼惟神々々

御靈幸はへましまして

此この有あり様さまをハツキリと　カメラに收をさめ給たまへかし

現げん幽い神しんの三さん界かいの　第十だいじつ卷わんの物もの語がたり

口くち繪ゑの種た子ねを造つくらむと　心こころ配くばるぞ床ゆかしけれ

朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも　神かみの守まもりのある限かぎり

寫うつらざらめや此この寫しや真しん　三さん角かく形けいのコンパスを

眺ながめやりつつ瑞ずい月げつが　三みツの御み靈たまの幸さちを得えて

言こと葉ばを寫うつす筆ふでの先さき　頻しきりに走はしらず執しつ筆びつの

姿すがたを寫うつす竹たけ下した氏し　曇くもりはてたる現うつ世しよの

教のりの鏡かがみと教をし子へこが　漏もれ落おちもなく書かき留とめる

『海洋かいやう萬ばん里り』丑うしの卷まき　序じよ歌かの代かはりに述のべておく

此この世よを造つくりし神かむ直なほ日ひ　心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

只ただ何なに事ごとも人ひとの世よは　直なほ日ひに見み直なほせ聞き直なほせ

ハツキリ寫うつらぬ其その時ときは　神かみの仕し組ぐみの宣のり直なほし

よく見み直なほせよ諸もろ人びとよ　天あま津つ御み空そらはモヤモヤと

まだ霽れやらぬ五月空
晴れ行く時を松村氏
眞澄の空を憧れつ
三人の筆者と向き合ひて
晴れよ晴れよと氣をいらつ
嗚呼惟神々々
今日は五月の十九日
月の光も宵暗の
明り待つ間のもどかしく
根氣が盡きて口車
待ぼけ坂に留め置く。

大正十一年七月十三日

舊閏五月十九日

於龍宮館

凡例

一、本書は殆どすべて歌より成つてをります。讀者は微妙な旋律の中に巻き込まれつつ轉迷開悟の誠を悟り得ることが出來ませう。

一、本書は『海洋萬里』（丑の巻）ですが、『靈界物語』として數へる時は、第一

二に十六じふろく卷くわんに相さう當たうします。

大正十二年五月

編者誌

總說歌そうせつか

(一)

【ひ】の神國かみくにの中心地ちうしんち

【ふ】うふの神かみが現あらはれて

【み】ろくの神かみ世よを開ひらかむと

【よ】つ尾をの山やまの山裾やますそに

【い】つきの神かみの口くちをかり

【む】かしの神代かみよの有様ありさまを

【な】になから何なにまで説とき諭さとし

【や】まと魂たましひの養成やうせいに

【こ】ころを盡つくし身みをつくし

【と】きは堅磐かきはの言ことの葉はを

【百も】の神等かみたち諸人もろびとに

【千ち】から限かぎりに宣のりたまふ

【萬よろ】代變よかはらぬ神かみの愛あい

嬉うれしみ悦よろこび奉たてまつる。

【か】みが表おもてに現あらはれて

【む】かしの神代かみよに立たて直なほし

【な】らくの底そこに落おち込こみし

【が】き畜生ちくしやうの身魂みたままで

【ら】く土どの園そのに手てを曳ひきて

【た】すけむものあななひと三五あななひの

【ま】こと心こころを振ふり起おこし

【ち】しほ吐はきつつ雲霧くもきりを
【は】らはせ給たまふありがたさ
【へ】だてなき世よの神かみの國くに
【ま】つの五み六ろ七くのうまし世よを
【せ】かいに照てらし給たまふこそ
實げに尊たふとさの極きはみなれ。

(二)

【か】みが表おもてに現あらはれて
【み】ろくの神み世よを開ひらかむと
【か】らの身みたま魂もろともも諸もろとも共に
【を】さめて救すくふ神かみの國くに
【も】も八十やそくに國はての果はてまでも

【て】らす靈界物語れいかいものがたり
 【に】しや東ひがしや北南きたみなみ
 【あ】まつ日嗣ひつぎの御稜威みみいづに
 【ら】く土どと變かはる四方よもの國くに
 【は】らし助たすくる皇神すめかみは
 【れ】ん華臺げだいじやう上に鎮しづまりて
 【て】ん地ちを清きよめ世よを淨きよめ
 【せ】かい一度いちどにかむばしく
 【む】めの蒼つばみのここかしこ
 【と】えうの紋もんの忽たちまちに
 【あ】らはれ出いでて開ひらくなる
 【く】に常立とこたちの大御神おほみかみ
 【と】きは堅磐かきはに五み六ろ七くの世よ
 【を】さめ給たまふぞ有難ありがたき

【た】か天原あまはらに隈くまもなく
 【て】り輝かがやきし御光みひかりに
 【わ】が身みの雲くもを晴はらしつつ
 【け】しき卑いやしき心鏡しんきやうを
 【る】り光如來くわうじよらいに研みがかれて
 【こ】こにいよいよ神かみの道みち
 【の】どかに進すすむ春はるの空そら
 【よ】は紫陽花あぢさいの七變化ななかはり
 【お】にも惡魔あくまも忽たちまちに
 【つ】きの光ひかりに照てらされて
 【く】に常立とこたちや豐雲野とよくもぬの
 【り】やう神魂かむたまに神習かむならひ
 【し】仁至愛じんしあいの魂たまとなり
 【か】みの教をしへに叶かなひつつ

【む】 つび親したしみみ五ろ六く七のの世よ
 【な】 が鳴鳥なきどりの鳴なき初そめて
 【ほ】 のかひらに開ひらく岩戸いはとぐち口
 【ひ】 の大神おほかみは美うるはしく
 【こ】 ころの儘ままに出いでまして
 【こ】 こに岩戸いはとは開あけにける
 【ろ】 西し亞あ亞あ弗ふ利り加か大たい洋やう洲しう
 【も】 ろこし山やまの果はてまでも
 【ひ】 かり輝かがく神かみの國くに
 【ろ】 く地ちは水みづに包つつまれて
 【き】 たなき曲津まがつの影かげもなく
 【を】 さまり居ゐたる磯輪垣しわがきの
 【ほ】 妻づまの國くにもいつしかに
 【な】 みを渡わたりて進すすみ來こし

【ほ】とけの教のりを誤解ごかいして
 【ひ】に夜よに汚けがれし現世うつしよを
 【た】て直なほさむと現あらはれし
 【た】てと緯よことの二柱ふたはしら
 【な】みに漂ただよふ民草たみぐさを
 【に】本ほんの元もとの大おほ神かみの
 【こ】ころの儘ままに救すくひ上あげ
 【と】しも豊ゆたかに賑にぎはひつ
 【も】も千ち萬よろづの神かみ等たちに
 【ひ】かれて遊あそぶパラダイス
 【と】みたる人ひとも貧まじしきも
 【の】どかな園そのに睦むつび合あひ
 【よ】しとあしとの岩垣いはがきを
 【は】らして暮くらす神かみの御世みよ

【な】 がき命いのちを保ちたもつつ
【ほ】 まれ目め出度でたき神人しんじんの
【ひ】 かり天地てんちにさえ渡わたる
【に】 しきの機はたの御仕組おんしぐみ
【み】 づの御魂みたまや嚴御魂いづみたま
【な】 らびて爰こゝに現世うつしよに
【ほ】 ろびを救すくひ助けむと
【せ】 き込みこ給たまふ大御聲おほみこゑ
【き】 く人ひとさへもあら風かぜや
【き】 ぎのもまるる有様ありさまは
【な】 みなみならぬ風情ふぜいなり
【ほ】 妻づまの國くにと謳うたはれて
【せ】 界かいに轟とどろく葦原あしはらの
【み】 づほの國くにの民草たみぐさよ

【の】にも山やまにも神かみの徳とく
 【あ】きの稔みのりのいちじるく
 【や】百ひゃく穎ち千ち穎ちの稻いねの波なみ
 【ま】もり給たまへる尊たふとさよ
 【ち】しほに染そむる紅もみぢば葉ばや
 【は】ちすの花はなのいと清きよく
 【の】山やまに沼ぬまにさえ渡わたる
 【り】うりう昇のぼる旭きよくわつ光くわうに
 【な】らひて照てらす神かみの道みち
 【ほ】づまの國くにの精せい神しんを
 【せ】かいの果はてまで輝かがやかし
 五み六ろく七しちの神かみ世よを樂たのまむ。

大正十一年七月十三日

舊閏五月十九日

於龍宮館

第一篇 伊都寶珠

第一章 麻邇の玉〔七六六〕

三千世界の梅の花

一度に開く五大洲

豊葦原の瑞穂國

中にも分けて神恩の

恵み治き中津國

メソポタミヤの樂園と

竝びて清き自轉倒の

大和島根は磯輪垣の

秀妻國と稱へられ

七五三の波清く

風穩かな神守の

島に名高き眞秀良場や

青垣山を繞らせる

靈山會場の蓮華臺

此世を清むる三つ御魂

四尾の峰の山麓に

くにはるたちのおほかみ
國治立大神は
嚴いづの御靈みたまを分わかけ給たまひ

くにたけひこ
國武彦と現あらはれて
五み六ろく七しちの神みよ世よの來きたる迄まで

むげん
無限の力ちからを隱かくしつづ
花はな咲さく春はるを松まつの世よの

いしずゑた
磯固いしづゑく築つきかため
空そら澄すみ渡わたる玉照彦たまてるひこの

かみ
神の命みことや玉照姫たまてるひめの
神かみの命みことを日月じつげつの

かみ
神の使つかひになぞらへて
金剛こんがう不壞ふゑの如意寶珠にょいほつしゆ

こがね
黄金の玉たまや紫むらさきの
稀代きだいの寶玉ほうぎよく集あつめまし

とよくにぬし
豐國主とよくにぬしの分靈わけみたま
言靈別ことたまわけの魂たまの裔すえ

ことよりわけ
言依別ことよりわけを教主けうしゆとし
錦にしきの宮みやに千木ちぎ高たかく

したついはね
下津岩根したついはねに宮柱みやばしら
太知ふとしり建たてて伊都いづ能賣のめの

いづげんびめう
幽玄微妙いづげんびめうの神策しんさくを
仕組しぐみ給たまひし雄々ををしさよ

ことよりわけ
言依別ことよりわけや玉能姫たまのひめ
初稚はつわか姫ひめの三みつ御魂みたま

ひそかに神かみの宣勅みことのり
頸うなじに受うけて永とこ久しへに

たま
玉の在處ありかを祕ひめかくし
三みつの御玉みたまの出現しゆつげんを

遠き未来に待ち給ふ

神素盞鳴大神の

深遠微妙の御經綸

梅子の姫を龍宮の

寶の島に遣はして

黄龍姫を楯となし

天火水地と結びたる

青赤白黄紫の

五つの玉を諏訪湖の

玉依姫の御手より

初稚姫や玉能姫

玉治別を始めとし

久助お民の五つ身魂

研き澄まして水晶の

輝き渡る寶玉を

授け給へば五柱

心を清め身を淨め

押戴いて梅子姫

黄龍姫や蜈蚣姫

テールス姫や友彦の

研き澄ました神司

無言の儘に手に渡し

玉依姫の御前を

しづしづ立ちて三つの門

くぐりて歸る諏訪湖の

金波漂ふ磯端に

歸りて湖面に合掌し

感謝の折柄中空を

照らして下る八咫鳥

黄金の翼を打擴げ

十曜の紋の十人連

背に乗せつつ久方の

天津御空を勇ましく

雲霧分けて下り來る

自轉倒島の中心地

綾の高天の空近く

歸り來るぞ目出度けれ

言依別は神界の

知らせに依りて空助や

其他數多の神司

八尋の殿に招き寄せ

五つの玉の中空を

翔りて下る瑞祥を

祝ぎ奉り歡迎の

準備をなさむと遠近に

派遣し置きたる神司

使を馳せて一所に

集めて事の詳細を

包み隠さず示しける

一つ島より中空を

掠めて聖地に降り來る

十の身魂を迎へむと

數多の人々引きつれて

由良の港へすくすくと

列を正して出で向ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

言依別命は空助を始め、音彦、國依別、秋彦、波留彦、佐田彦、夏彦、常彦其他の面々を引きつれ、東助に留守を頼み、聖地を立つて舟に乗り、由良川を下りて由良の港の秋山別が館に立向ひ、梅子姫一行の八咫鳥に乗りて歸り来るを待受ける事となつた。

八咫鳥は梅子姫、初稚姫、玉能姫、玉治別、黄龍姫、蜈蚣姫、友彦、テールス姫、久助、お民といふ順に、秋山彦の館に羽撃き勇ましく、廣き庭前に降つて來た。歡呼拍手の聲は天地も揺ぐ許りであつた。館の主人秋山彦、紅葉姫は恭しく無言の儘目禮しながら、言依別命を先頭に、空助以下の神司と共に、梅子姫の一行を奥の間に案内し、一同の勞苦を謝した。豫て用意の五個の柳筥に、一々玉を納められ、神前に安置され、一同打揃うて感謝祈願の祝詞を奏上し、終つて直會の宴は開かれた。次の間より襖押し開け、しづしづと、五十子姫を先頭に立て、神素盞鳴大神、國武彦命と共に一同の前に現はれ給ひ、愈神政成就の基礎確立せ

る事を喜び給ひ、且つ一同の至誠至實の活動を感賞し給ひ、別室に於てゆるゆる
休息せよと宣示し、又もや一間の内に姿を隠し給うた。言依別命、秋山彦夫婦は
後に残り、一同は別館に於て再び慰勞の宴に列し、歡聲湧くが如く四邊に聞えて
來た。

素盞鳴尊は四邊に人無きを見すまし、國武彦命と何事か謀し合せ給ひ、五十子
姫を此場に招き、無言の儘、言依別、秋山彦、紅葉姫と共に、柳筥を次の間に運
ばせ、更めて同じ形の柳筥を元の神前に飾らせ給うた。

此御經綸は國武彦命を始め梅子姫、五十子姫、言依別命、秋山彦夫婦より外に
絶対に知る者はなかつたのである。

(大正一一・七・一七 舊閏五・二三 松村眞澄録)

第二章 眞心の花 (一) (七七六七)

天火水地結の龍宮の麻邇の玉の無事、秋山彦館に安着せし歡喜と、感謝を兼ねたる莊嚴なる祭典は無事終了し、直會の宴は盛に開かれ、いよいよ五個の神寶は聖地を指して賑々しく由良川を遡り送らるる事となつた。それに就ては一同由良の港の川口に出て御襖袂を修し、再び神前に立歸り祭典を行ひ、美はしき神輿を造り、これに納めて聖地へ、水に逆らひ、金銀色の帆に風を孕ませ上る事となつた。

茲に一同は玉の安着を祝する爲、各立つて歌をうたひ舞ふ事となつた。先づ第一に秋山彦は立つて、神素盞鳴尊、國武彦命に一禮し、許可をえて、金扇を兩手に擴げ、宣傳使服を身に纏ひ、悠悠として座敷の中央に歌ひ舞ひ始めた。

年てふ年は多けれど 月てふ月は多けれど
生日足日は澤なれど 今日は何なる吉日ぞや
九月八日の秋の空 四方の山々紅葉して
錦織りなす佐保姫の 機の仕組も目のあたり

綾あやの高たか天まに宮みや柱はしら 太ふとしり建たてて永とこ久しに
 鎮しづまりいます國くに治は立るの 嚴いづの命みことや豊とよ國くに姫ひめの
 瑞みづの命みことの生いく御み魂たま 國くに武たけ彦ひこや言こと依より別わけの
 貴うづの命みことと現あらはれて 裏うらと表おもての神しん界かいの
 仕しく組みも茲ここに仄ほ見みえて 天てん火くわ水すゐ地ちと結むすびたる
 龍りう宮くう島じまの麻ま邇にの玉たま 己おのが館やかたにいりましぬ
 あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら 御み靈たま幸さちはへましまして
 一ひと度たびならずも二ふた度たびも 三みつの御み靈たまの神かむ柱はしら
 神かむ素す盞さん鳴なる大おほ神みめぐの 大おほ御み惠めぐのいや深ふかく
 吾わが館やにとまりましまして 深しん遠えん無む量りやうの御ご經けい綸りん
 心こころの色いろは紅もみぢ葉ひめ姫め 唐から紅くれなゐのや大まと和た魂ま
 輝かがき初そめし今け日ふの空そら あゝ有あり難がたし有あり難がたし
 惠めぐは深ふかき由ゆ良らの海うみ 清きよき流ながれの川かは口ぐちに
 百ももの罪つみ咎とが淨きよめつつ 貴うづの玉たま筥ばこいや清きよく

五つの御玉を納めたる

新つの御船に身を任せ

心も涼しき神風に

黄金の眞帆を掲げつつ

聖地に送る尊さよ

三千世界の梅の花

一度に開く常磐木の

松の神世も近づきて

海の内外の極みなく

瑞の御霊の御恵の

堅磐常磐に照り渡る

瑞祥は思ひ知られけり

あゝ惟神々々

御霊幸はへましまして

波斯の國より遙々と

降り來ませる素盞鳴の

瑞の御霊の大御神

四尾の山に奥深く

隠れて時を待ち給ふ

國武彦の御前に

心の幕も秋山彦の

賤の男が眞心を

こめて祝ぎ奉る

あゝ惟神々々

御霊幸はへましましてよ

紅葉姫は又もや立上り、

月日の駒はいと早く
思ひ返せば満三年

辛酉の菊月の
八日に吾館に出でましし

神素盞鳴大神の
尊き御影を拜してゆ

心も赤き紅葉姫
誠の限り身を盡し

仕へ奉りし甲斐ありて
天地に充つる喜びは

又もや廻り甲子の
九月八日の今日の空

嬉しき便り菊月の
薫り床しき此祭典

金剛不壊の如意寶珠
古き神代の昔より

波に漂ふ沓島の
巖の中に秘めおける

神祕の鍵を預りし
秋山彦の表口

黄金の鍵を高姫に
まんまと盗み出されて

一同心を焦ちしが
漸く島に馳せついで

危き所を發見し

高姫さまを伴ひて

吾館に歸り來る折

忽ち腹に呑み込みて

雲を霞と逃げられし

其古事を思ひ出し

又もや麻邇の此寶珠

無事に聖地に御安着

遊ばす迄は村肝の

心を配り氣をくばり

送らせ給へよ人々よ

朝な夕なに高姫が

玉に心を抜かれつつ

隙ゆく駒の隙あらば

又もや腹に呑み込みて

如何なる事を仕出かすか

計り知られぬ一大事

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

神素盞鳴大神が

天地を救ひ助けむと

配らせ給ふ眞心を

よく汲み取りて仕へませ

初稚姫や玉能姫

玉治別や其外の

百の司の御前に

紅葉の姫が老婆心

僅に披瀝し奉る

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はへましませよみたまさち

と歌ひ終り舞ひ納めた。初稚姫は又もや立ちあがつて金扇を擴げ、歌ひ且自ら舞ふ。

遠き神代の其昔とほかみよそのむかし

日の大神の御水火よりひのおほかみのみいき

生れ出でませる稚姫君の神の命は天が下あいにしへのかみのみことあめした

四方の國々安國といと平けく治めむとよもくにやすくにたひら

心を盡し身を盡し神の御業に朝夕にこころつくみをつくかみみわざあさゆふ

仕へ給ひし折もあれ八十の曲津の醜魂につかたまをりせやそまがつしこたま

取り挫がれて妹と背の道を誤り大神のとひしひし妹とせみちあやまおほかみ

御教に觸れて底の國身魂を隠し給ひつつみのりふふそこくにみたまかくたま

天より高く咲く花も地獄の釜のこげ起してんたかたはなぢごくかまおこ

百の悩みを身に受けていよいよ心を立直しももなやみみうつたてなほ

時を待ちつつ時置師の

神の化身の空助が

妻のお杉が腹を借り

初稚姫と現はれて

國武彦と現れませる

國治立大神の

尊き神業に仕へむと

心を配る幼年の

年端も行かぬ身ながらも

言依別命より

尊き神業命ぜられ

三千世界の神寶

金剛不壞の如意寶珠

千代に八千代に永久に

動かぬ松の幹の根に

隠し奉りて開け渡る

天の岩戸も五六七の世

開かむ爲の御經綸

深き心を白浪の

高姫司や黒姫が

玉の在處を探らむと

現界幽界の瀬戸の海

太平洋の荒浪を

乗り越え乗り越え龍宮の

一つの島に上陸し

隠せし場所を探らむと

焦ち給ふぞ悲しけれ

玉治別や玉能姫

神かみの司つかさと諸もろ共ともに

高たか姫ひめさまを氣遣きづかひて

荒浪あらなみ猛たける海原うなばらを

見みえつ隠かくれつ漕こぎ渡わたり

御身おんみの上うへを守まもりつつ

妾わらはも同おなじ龍宮りうぐうの

一ひとつの島しまへ上陸じやうりくし

人跡じんせき絶たえし荒野あらの原はら

山やまを踏ふみ越こえ谷たに涉わたり

黄金こがねの波なみを湛たへたる

玉依たまより姫ひめの隠かくれ場所ばしよ

諏訪すはの湖こ水すゐに辿たどり着つき

神かみの御旨みむねをあななひて

三五あななひけう教みをしへの御教みをしへを

彼方あなた此方こなたと布しき擴ひろめ

弘ひろめ終をはつて八咫やあたらす鳥と

黄金こがねの翼つばさに乗のせられて

朝日あさひ輝かがやき夕日ゆふひ照てる

龍たつの宮居みやゐにいまします

玉依たまより姫命ひめのみことより

天火てんくわ水地すゐちを統すべ結むすぶ

紫色むらさきいろの麻ま邇にの玉たま

無言むごんの儘ままに拜受はいじゆして

梅子うめこの姫ひめの御前おんまへに

捧ささげ奉まつりし嬉うれしさよ

仰あふげば高たかし天あまの原はら

雲霧くもぎり分わけて自轉おのころじま倒島たふしまの

秀妻ほづまの國くにの中心地ちうしんち

外の圍ひと聞えたる 由良の港の人子の司

秋山彦が御館 降り來りし嬉しさよ

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

十曜の紋の十人連れ 空前絶後の神業に

仕へ奉りし嬉しさを 吾等一人の物とせず

高姫司や黒姫の 神の使の御前に

此喜びをかき分けて 手を携へて天地の

尊き道に仕へなば 三五教の大空は

月日も清く明かに 嚴と瑞との神界の

機織り上げて綾錦 輝く宮に永久に

仕へて互に歡ぎつつ 教の榮えを見るならむ

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

初稚姫が眞心を 【うまら】に【つばら】に聞き召せ

神素盞鳴大御神 國治立大神の

分の御霊の御前に
畏み畏み祈ぎまつる
畏み畏み願ぎまつる

梅子姫は立上り歌ひ舞ひ始めた。

父大神の神言もて
顯恩城に現れませる

バラモン教の神司
鬼雲彦や其外の

捻け曲れる人々を
誠の神の大道に

言向け和す神業に
八人乙女は身をやつし

エデンの河を打渡り
種々雑多と氣を配り

あらむ限りのベストをば
盡せし事も水の泡

太玉命の神司
顯恩城を主宰して

教を開き給ひつつ
吾等姉妹各自は

顯恩城を後にして
彼方此方と三五の

道を傳ふる折柄に
バラモン教の醜人に

情容赦も荒浪の
寄る邊渚の捨小舟

波に漂ひ龍宮の
寶の島に上陸し

小絲の姫を守立てて
五十子の姫や今子姫

宇豆姫伴ひ地恩郷
光を隠し黄龍姫の

貴の命を表とし
影身に添ひて大神の

尊き御教を説き示し
心配りし甲斐ありて

身魂も清き小絲姫
バラモン教の醜道を

弊履の如く脱ぎ棄てて
誠の道に服従ひし

其嬉しさは如何ばかり
高山彦や黒姫も

心を盡し身を盡し
三五教の御教に

盡し給へど村肝の
心にかかる執着の

雲晴れやらす黄金の
玉の在處に魂抜かれ

教の道を外にして
朝な夕なに氣を焦つ

其御心の憐れさよ

時しもあれや三五の

神の教の宣傳使

初稚姫や玉能姫

玉治別と諸共に

浪路を分けて來ります

神の柱の高姫が

地恩の城に來りまし

高山彦や黒姫を

密かに誘ひ一つ島

後に見棄てて波の上

南洋諸島を隈もなく

探し索めて瀬戸海の

淡路の島の司神

東助館に出でまして

玉の在處を疑ひつ

再度山の山麓に

國依別を訪ねつつ

執着心はまだ晴れず

彼方此方と彷徨ひて

玉の在處を索めます

その御心ぞ可憐らしき

地恩の城を後にして

黄龍姫や蜈蚣姫

テールス姫や友彦を

伴ひ山の尾打涉り

深き谷間を潛り抜け

ネルソン山を後にして

ジャンナの郷やイールの郷 玉野ヶ原を踏み越えて

金砂銀砂の輝きし 諏訪の湖水の手前まで

漸う進む折柄に 紺青の波を湛へたる

波上を驅る金銀の 八咫烏やアンボリー

取りつく島もなき折に 黄龍姫を先頭に

初めて悟る神の道 心の空は忽ちに

轉迷開悟の花咲きて 朱欄碧瓦の龍宮城

玉依姫の御館 奥の一間に参入し

一行五人の五つ身魂 初稚姫の一行と

ものをも言はずしづしづと 玉依姫の御前に

月の形の座を占めて 月光輝く麻邇の玉

心も色も紫の色 映え渡る初稚姫の

貴の命はしとやかに 吾手に渡し給ひけり

初稚姫の眞心は 雪より清く紅葉の

いろにも優る御姿 妾は忽ち感じ入り
 むごんの儘に受取りて 黄金の翼を擴げたる
 やあたらす 八咫烏に助けられ 漸くここに着きにけり
 かむながらかむながら 神の御心汲み取りて
 あななひけつ 三五教に仕へたる 神の司の高姫や
 たかやまひこ 高山彦や黒姫や 龍國別や鷹依姫の
 うづ 貴の命と諸共に 玉依姫の賜はりし
 まに 麻邇の寶珠の神業に 仕へまほしき吾願ひ
 【うまら】に【つばら】に聞き召せ 三五教を守ります
 くにはるたちのおほみかみ 豊國姫大神の
 みまへ 御前に畏み願ぎまつる あゝ惟神々々
 みたまさち 御靈幸はへましませよ

と歌ひ終り、悠々として吾席に歸り給うた。

第三章 眞心の花(二) (七六八)

玉治別は立上り銀扇を擴げて歌ひ舞ひ始めた。

吾は玉治別司 天と地との三五の

誠を諭す神使 宇都山郷に現はれて

樵の業や野良仕事 名も田吾作の賤の男が

天の眞浦の宣傳使 松鷹彦に三五の

誠の道を教へられ 國依別と諸共に

三國ヶ嶽にバラモンの 教の館を構へたる

此處に在れます蜈蚣姫 三五教の大道に

救はむものと老木の
茂る山路を打ち渉り

岩窟の中に乗り込みて
お玉の方に廻り會ひ

蜈蚣の姫の祕藏せる
黄金の玉を發見し

綾の高天原へ持ち歸り
意氣揚々と宣傳の

使となりて遠近を
彷徨ひ歩く其中に

バラモン教の其一派
鷹依姫の神司

高春山に居を構へ
體主靈從の御教を

四方に開くと聞きしより
國依別や龍國別の

貴の命と諸共に
心の駒に鞭鞭ちて

進む折しも津田の湖
敵の捕手に圍まれて

生命危き折柄に
空助司や初稚姫の

貴の命に助けられ
高春山に立ち向ひ

廻り會うたる天の森
龍國別と鬼娘

ヤツサモツサの問答も
神の恵みの御光に

煙と消えて潔く

神の御稜威を伏し拜み

鷹依姫の割據せる

岩窟の中に立ち入りて

高姫、黒姫兩人を

救ひ出して鷹依の

姫の命は忽ちに

アルプス教を解散し

三五教の大道に

仕へまつりて綾錦

高天原に連れ歸り

黄金の玉の紛失に

思はぬ濡衣被せられ

泣く泣く立つて和田の原

遙々越えて何處となく

黄金の玉の在處をば

探らむ爲に親と子が

海の彼方に出でましぬ

あゝ惟神々々

神の恵みの幸はひて

一日も早く片時も

疾く速けく親と子が

在處を知らせ給へよと

玉治別の朝宵に

祈る心ぞ悲しけれ

金剛不壞の如意寶珠

紫色の寶玉の

在處探ねて高姫が

又もや神都を後にして 海の内外の區別なく
 探ねて廻る氣の毒さ 神の仕組を打ち明けて
 當所も知らぬ玉探し 諦めさせむと玉能姫
 初稚姫と諸共に 屋根無し小舟に身を任せ
 遠き浪路を打ち渡り 高姫一行の危難をば
 救ひ守りつ龍宮島 到りてみれば高姫は
 高山彦や黒姫と 暗に紛れて逸早く
 後白浪となり果てぬ あゝ惟神々々
 御靈幸はへましまして 高姫一行が執着の
 心の雲を晴らせかし 一日も早く眞心に
 かへらせ給へと太祝詞 となふる聲も濕り勝ち
 玉治別は是非もなく 初稚姫と諸共に
 ネルソン山の高嶺をば 西に涉りて山深み
 谷底潛り種々と 百の艱難に出會ひつつ

神の恵を力とし 誠の道を杖として

石の枕に星の夜具 猛獸哮ける大野原

夜を日に次いで進みつつ 虎狼や大蛇まで

吾三五の言靈に 言向け和し玉野原

一眸千里の草分けて 諏訪の湖邊に辿り着き

社の前に額きて 善言美詞の太祝詞

汗に穢れし身體を 清き湖水に楔ぎつつ

拍手の聲は中天に 轟き渡る折柄に

浪を十字に引き分けて 現はれ給ふ百の神

天火水地と結びつつ 五づの身魂の御寶

携へ来る女神等 吾等一行に立ち向ひ

龍宮海の麻邇の玉 汝等五人に授けむと

いと嚴かに宣らせつつ 身魂を研けと言ひ捨てて

後白浪と消え給ふ 初稚姫や玉能姫

たまはるわけ
玉治別は伏し拜み
誼訪の湖あとにして

せいほくさ
西北指して進みつつ
幾度となく皇神の

ふか
深き試練に遇ひながら
さしもに廣き龍宮島

かみ
神の使の靈鳥に
救はれ無事に國人を

ことむ
言向け和し神業を
略了へまつる折柄に

かみ
神の使の八咫鳥
黄金の翼揚げつつ

われら
吾等一行五つ身魂
其背に乗せて玉依姫の

うつつ
貴の命の在れませる
龍の宮居に送りけり

あゝ
あゝ惟神々々
御靈の幸を蒙りて

われら
吾等五人は皇神の
教の道に盡すより

ほか
外に一つの望みなし
執着心の雲晴れて

かがや
輝き渡る日月は
心の空に永久に

しづ
鎮まりいます心地して
不言實行の神の業

たつ
龍の館に仕へつつ
時の到るを待つ間に

梅子の姫を始めとし

黄龍姫や蜈蚣姫

テールス姫や友彦が

黄金の舟に浮びつつ

黄金の門を潜りぬけ

現はれ來ます嬉しさに

互に見合はす顔と顔

嬉し涙はせきあへず

言葉を掛くる術もなく

無言の儘に奥殿に

進む折柄玉依姫の

神の命は悠々と

青人草を救へよと

露の滴る青の玉

ものをも言はず玉治別の

神の司の掌に

授け給ひし嬉しさを

喜び畏み村肝の

心の魂の照るままに

黄龍姫の雙の手に

漸く渡し胸を撫で

不言實行の一端に

仕へまつりし折柄に

玉依姫は奥深く

御神姿隠し給ひけり

吾等一同勇み立ち

三つの御門を潜りぬけ

黄金の浪の漂へる

諏訪の湖邊に來て見れば 忽ち飛び來る八咫鳥

吾等を乗せて白雲の 御空を高く翔上り

翼の音も勇ましく 漸く當館に歸りけり

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

三五教の御教は 堅磐常磐に松の世の

ミロク神政の基礎と 仕へまつりて天地の

百の神等百人を 浦安國の心安く

守らせ給へ惟神 神の命の御前に

玉治別が眞心を 開いて細さに願ぎまつる

神素盞鳴大神や 國治立の御分魂

國武彦大神よ 三五教は言ふも更

島の八十島八十の國 青雲棚引く其限り

天地百の生物に 平安と榮光と歡喜を

與へ給へと願ぎまつる あゝ惟神々々

御靈幸はへましてせよ』

と歌ひ終つて自席に着いた。

次に黄龍姫は立ち上り歌ひ始めた。

大國彦の神靈 堅磐常磐に祀りたる

バラモン教は常世國 大國別の神司

開き給ひし貴の道 萬里の波濤を乗り越えて

イホの都に來りまし 教の園を開く折

三五教の宣傳使 夏山彦や祝姫

行平別の言靈に 鬼雲彦の大棟梁

根城を抜かれ是非もなく 數多の部下を引き率れて

天恵洽きエチプトを 見捨てて來る中津國

メソポタミヤの顯恩郷 漸く此處に落ち付いて

堅磐常磐に根城をば 固めて道を四方の國

布き弘めたる折柄に 神素盞鳴大神の

肉の宮より生れませる 神姿優しき八乙女が

心の色もいと清く 誠の花を開かせて

教の園を作らむと 忍び忍びに出で給ふ

鬼雲彦を始めとし 鬼熊別や蜈蚣姫

吾足乳根はバラモンの 教の道に勤しみて

心のたけを盡しつつ 仕へ給へる折柄に

功績も太玉宣傳使 現はれ況して言靈の

珍の劍を抜き放ち 誠の鋒を振廻し

薙立て斬り立てバラモンの 教の疵を正さむと

眞心籠めて出で給ふ その御心を白雲の

煙に巻かれて大棟梁 鬼雲彦を始めとし

従ひ給ふ神司 顯恩郷を後にして

波斯の御國へ出で給ふ
さはさりながら其以前

顯恩郷の神司
幹部一同を従へて

花見の宴を開きまし
饗應の酒に酔ひしれて

エデンの川を渡る折
御舟の傍に立ち居たる

十五の春の吾姿
酔ひたる人に撥ねられて

ザンブとばかりエデン川
流れて底に白浪の

生命絶えむとする折に
従僕の司の友彦は

身を躍らして川中を
潜り潜りて漸くに

妾を抱きて救ひ上げ
背に負ひつつ吾父の

館を指して歸りましぬ
あゝ惟神々々

神の恵みの浅からず
二つなき身の生命をば

神の恵みと言ひながら
助け呉れたる友彦に

心は移る戀の闇
吾垂乳根の目を忍び

闇に紛れて顯恩郷を
ソツト脱け出で友彦と

手に手を取つて錫蘭の島
深山の奥に身を潛め

一年ばかり経る中に
妾が心機一轉し

何の情もあら男
後に残して逃げて行く

錫蘭の濱邊の里人の
チャンキー、モンキーの兩人に

艚を操らせ限りなき
大海原を打ち渡り

九死一生の苦みを
五十子の姫や梅子姫

御供の神に助けられ
長き浪路を渡りつつ

晝は終日終夜
三五教の御教を

心の底の奥庭に
植付けられてバラモンの

迷ひの夢も醒めにけり
五十子の姫の一行に

推戴されて龍宮の
黄金花咲く一つ島

地恩の郷に顯現し
オーストラリヤの新女王

三五教の神司
あらゆる名譽を身に負ひて

本末顛倒の境遇を
知らず識らずに日を送る

心こころの中なかの浅間あさましさ

高山彦たかやまひこや黒姫くろひめに

政務せいむ教務けうむを打ち任まかせ

ブランジー、クロンバー相あひなら並び

政教せいけう一致いつちの神業かむわざを

開ひらいて國くにを守まもる折をり

三あな五な教ひけうの高姫たかひめと

共ともに來きませし蜈蚣むかで姫ひめ

母ははの命みことに廻めぐり會あひ

嬉うれし涙なみだにせきあへず

心こころを協あはせ身みを盡つくし

教をしへは四よ方に輝かがやきて

朝日あさひの豊とよ榮さか昇のぼる如ごと

歡よろこぎ樂たのしむ折柄をりからに

現あらはれ來きたる友彦ともひこが

夫婦ふうふの神かみの來訪らいほうに

喜よろこび驚おどろき一時ひとときは

心こころの海うみに荒浪あらなみの

立たつ瀨せなき迄まで狼狽らうばいし

互たがひに過くわ去こを語かたり合あひ

ヤツと解とけたる胸むねの裡うち

園遊會えんいっくわいになぞらへて

昔むかしの交まじり温あたためつ

東ひがしと西にしと相あひ應おうじ

寶たからの島しまを治をさめむと

心こころも勇いさむ時ときもあれ

ネルソン山ざんの空そら高たかく

現あらはれ出いでし屋氣樓しんきろう

如何なる事の天啓か

よくよく仰ぎ眺むれば

紛ふ方なき諏訪の湖

地恩の城に仕へたる

左守神の清公が

チャンキー、モンキー其外の

二人の供と諸共に

莊嚴美麗の玉の宮

玉依姫の御前に

近く仕ふる有様は

手に取る如く見えにけり

ネルソン山の西の空

尊き神の坐しますと

思ひ定めて梅子姫

蜈蚣の姫やテールスの

姫の命と諸共に

友彦さまを先頭に

旅の枕も數重ね

漸く来る玉野原

金砂銀砂を敷きし如

漸く道を進みつつ

諏訪の湖畔に建てられし

祠の前に辿り着き

湖面に向つて再拜し

天津祝詞を奏上し

愈此處に村肝の

心の帳も開け初め

梅子の姫の御前に

知らず識らずに犯したる 百の罪咎詫びぬれば

木花姫の懸らせて 天火水地の大道を

諭し給へば小絲姫 蜈蚣の姫や一同は

轉迷開悟の蓮花 一度に開く梅子姫

尊き神の御教を 心の底より正覺し

感謝祈願の折柄に 諏訪の湖面に浮びたる

浮島影を悠々と 黄金の船に眞帆を上げ

此方に向つて進み來る その氣高さに驚きて

湖上を看守る折もあれ 左守神の清公が

四人の供と諸共に ものを言はず手を擧げて

乗らせ給へと靡く 妾一行五人連れ

直に船に打ち乗りて 黄金の浪を迂りつつ

西北指して進み行く 天國淨土か樂園か

青赤白黄紫の 花は梢に咲き亂れ

大小無数の島嶼は

彼方此方に永久に

浮べる中を心地よく

勇み進んで玉依の

姫命の在れませる

龍の宮居に行き見れば

月雪花の御姿に

擬ふべらなる姫神の

十二の神姿立ち並び

玉治別や初稚姫の

神の命や玉能姫

久助お民も諸共に

吾等一行を迎へつつ

奥殿深く進み入る

梅子の姫は奥の間の

寶座に靜に座を占めて

暗祈黙禱なし給ふ

時しもあれや高御座

扉を開き悠々と

現はれ給ふ貴姿

玉依姫の御神は

數多の侍女を従へて

貴の玉器携へつ

十曜の紋の十人連れ

ものをも言はず目禮し

微笑を浮べてそれぞれに

五色の玉を手づからに

渡し給へば玉治の

別の命の神司 青き玉をば授かりて

直に吾手に微笑みつ 渡させ給ふ尊さよ

天火水地と結びたる 麻邇の御玉の其一つ

授かり給ひし喜びを 私せずに妾の手に

渡し給ひし功績を 建てよと示す玉治別の

神の命の志 玉を争ふ世の中に

執着心の影もなく 月日の如く明けき

其の御身魂々々々 感謝の涙せきあへず

感謝は忽ち村肝の 心の海に浪起り

進みかねたる戀の海 玉治別の眞心は

天地の神も嘉すらむ 妾は賤しき小絲姫

恵の露に潤ひて 今は嬉しき宣傳使

神の司となりぬれど 心汚き人の身の

いかで誠を盡し得む 斯る身魂も省みず

尊たふとき玉たまの神業かむわざを

惜をしまわらず妾めかけに譲ゆづりてし

清きよき心こころは又またと世よに

何處いづくの果はてを探たづぬとも

いかで例ためしのあら涙なみだ

漂ただよひ浮うかぶ一ひとつ島しま

夫をつとなき身みの獨ひとり身もの者

玉たま治はる別わけの神み司つかさよ

妾わらはは切せつなき戀こひの闇やみ

玉たまの光ひかりの現あらはれて

照てらさせ給たまへ妹いもと背せの

尊たふとき道みちの誓ちかひごと言

神かむすさ素すさ盞のを鳴のおほ大神かみや

國くに武たけ彦ひこの大神おほかみの

尊たふとき御前みまへを顧かへりみず

心こころのたけを打うち明あけて

幾重いくへに願ねがひ奉たてまつる

黄龍わうりゆう姫ひめが授さづかりし

麻邇まにの御玉みたまを妾わらはのみ

私わたくしなさず三五あななひの

教司をしへつかさの高たか姫ひめや

高たか山やま彦ひこや黒くろ姫ひめの

神かみの司つかさも諸もろ共ともに

空前くうぜん絶ぜつ後の此度このたびの

尊たふとき神業かむわざに参さん加かさせ

心こころの隔へだてをのぞ除さき去さり

三五あななひ教けうの御教みをしへを

月日つきひ輝かがやく地上つちのへに

照させ給へ嚴魂

瑞の魂の御前に

黄龍姫が眞心を

捧げて謹み願ぎ申す

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

神伊奘諾大御神

神伊奘册大神の

撞の御柱右左

廻り給ひて千代八千代

誓ひ給ひし其如く

妹背の契を結ばせて

神の教を四方の國

夫婦の息を合せつつ

身もたなしらに仕ふべし

許させ給へ玉治別の

神の司の宣傳使

心の底を打ち明けて

完全に詳細に願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

神の御前に誓ひたる

妹背の道は永久に

變らざらまし松の世の

尊き神の御心に

八千代を籠めて願ぎ奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ』

と祝賀と喜悅と戀慕とゴツチャにして心のたけを歌ひ終り座に着いた。玉治別は聊か當惑し直に立つて黃龍姫の歌に答ふべく、再び銀扇を開いて言葉靜かに歌ひ始めた。

神の恵に助けられ 玉治別と名を負ひて

今は尊き宣傳使 三五教の御教を

天地四方に開かむと 山の尾涉り川を越え

潮の八百路も厭ひなく 進み進みて龍宮の

一つの島に上陸し 心も清き諏訪の湖

玉依姫の御神に 麻邇の御玉を賜はりて

地恩の城を治めます 黃龍姫の玉の手に

渡して神の功績を 高き低きの隔てなく

神かみの御前みまへに現あらはして 教をしへの道みちを照てらさむと

心こころを盡つくす玉治たまはるが 清きよき身魂みたまを戀みそなはし

妹背いもせの道みちを結むすばむと 語かたらひ給たまふ尊たふとさよ

さはさりながら玉治たまはるの 別わけの命みことは其昔そのむかし

宇都山郷うづやまがうに現あらはれし 國くに依別よりわけが妹いもとなる

お勝かつの姫ひめを妻つまとなし 夫婦ふうふ揃そろひて睦むつまじく

神かみの神業みわざに仕つかふ身みぞ 黄龍わうりゅう姫ひめの眞心まごころは

己玉治おのれたまはるわけ別わけとして 無むげん限げんの感かん謝しゃに充みちぬれど

皇大神すめおほかみの定さだめたる 一いつ夫ぶ一いつ婦ぶの御規おんみ則のり

破やぶらむ由よしもないじやくり 國くにに殘のこせし若草わかぐさの

妻つまの命みことの心根こころねを 思おもへばいとど哀あはれなり

宇都山郷うづやまがうの田吾作たごさくと 蔑さげすまれたる時ときも時とき

卑いやしき身みをも顧かへりみず 尊たふとき神かみの御裔みすゑもて

吾われに仕つかへし貴うづの妻つま 吾わが身みに一人ひとりある事ことを

完全つまらに詳細つばらに聞きこし召めし 此事このことのみは今日けふ限り
 心こころに放はなさせ給たまへかし 汝なが身みを思おもひ妻つまの身みを
 思おもふ玉治たまはる別神わけのかみ 清きよき心こころを汲くみとりて
 必かならず怒おこらせ給たまふまじ 汝なれをも娶めとり又またもとの
 生命いのち二つとあるならば 仕つかへむものと吾心わがこころ
 お勝かつの方かたと睦むつまじく 神素かむす蓋さ鳴の大御神おほみかみ
 汲くませ給たまへよ黄龍わうりゅう姫ひめ 眞心まごころ明あかし汝なれが身みの
 國武彦くにたけひこの御前おんまへに 科戸しなどの風かぜに打うち拂はらふ
 思おもひを此處ここに情つれなくも 汝なれが切せつなる心根こころねを
 黄龍わうりゅう姫ひめの神司かむつかさ 仇あだに思おもはぬ眞心まごころを
 仇あだには捨すてぬ玉治たまはる別神わけのかみ 彌いや永久とこしへに宣のり直なほし
 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし 夫つまの命みことを持もたせまし
 吾われに勝まさりていと清きよき 神かみの御前みまへに玉治たまはるが
 あゝ惟かむながら神々々かむながら 神かみの御前みまへに玉治たまはるが

眞心明かし奉る^{まごころあ たてまつ}』

と妻のお勝の宇都山郷にありて神業に奉仕し居れば、貴嬢の御心は察すれども、
到底夫婦たる事を得ずとの旨を神の前に表白したのである。黄龍姫は愈戀の雲晴
れて熱心に神業に奉仕する事となつた。

(大正一一・七・一七 舊閏五・二三 北村隆光録)

第四章 眞心の花 (三) (七六九)

玉能姫は立上りて玉の無事到着を祝する爲めに歌ひ舞ひ始めた。

埴安彦や埴安姫
三五教の神の教

神の命の開かれし
四方に傳ふる宣傳使

玉能たまのの姫ひめの名なを負おひて
綾あやの聖せい地ちに仕つかへつつ

言こと依より別わけの神みこと言こともて
三みつたからの寶たからの神かむわざ業わざに

仕つかへ奉まつりて朝あさ夕ゆふに
心こころを配くばる吾わが身み魂たま

豊とよ國くに姫ひめの常とこ久ちはに
鎮しづまりひぬまいます比ひ沼ぬま眞ま奈な井い

神かみの靈れい地いちに程ほど近ちかき
丹あか波なみ村むらの平へい助すけが

娘むすめのお節せつの身みの果はては
三あな五な教ひけうの神かむつかさ司さ

青あを葉ば繁しげれる若わか彦ひこの
妻つまの命みことと選えらまれて

袂たもとを別わかつ北きた南みなみ
生いく田たの森もりの神かむやかた館た

謹つしみ守まもる折をり柄からに
高たか姫ひめさまの玉たま探さがし

瀬せ戸との荒あ浪なみ打うち渡わたり
家え島じまの山やまの奥おく深ふかく

迷まよひ入いります心こころ根ねを
思おもひ参まゐらせ樟くすぶ船ふねを

新あらたに造つくりて磯いそ端はたに
繫つなぎて歸かへる其その後あとに

懸からせ給たまふ木この花はな姫ひめの
神かみの御み言ことを畏かしこみて

又またもや船ふねに身みを任まかせ
初はつ稚わか姫ひめや玉たま治はる別わけの

神かみの司つかさと諸もろ共ともに

心こころの闇やみを明あかし石しがた瀉た

波なみも高たかさ砂さ浦うら近ちかく

飾し磨かまの海うみを乗のり越こえて

小豆せうどヶ島がしまや大島おほしまや

馬關ばくわんの瀬戸せとを後あとにして

大島おほしま越こえてアンボイナ

南洋なんやういち一の龍宮りうぐうに

高たか姫ひめさまや蜈蚣むかで姫ひめ

そたの他たの人ひと々びと救すくひつ

波なみを隔へたてて歸かへり來くる

又またもや吾身わがみに神懸かむがり

御言みことの儘ままに樟船くすぶねを

大海おほうなばら原はらに浮うかべつ

大海おほわだ中なかに漂ただよへる

魔島ましまに近ちかく漕こぎ寄よせて

高たか姫ひめ一行いっかう救すくひ上あげ

夜よを日ひに次ついで限かぎりなき

島しまを縫ぬひつ

ニユージールの玉たまの森もり

此處こゝに一ひと先まづ息休いきやすめ

數多あまたの土人どじんに送おくられて

波なみに漂ただよふ海わた中なかの

龍宮りうぐう島の夕力港みなと

目出度めでたく船ふねを乗のり棄すてて

初稚はつわか姫ひめや玉治たまはる別わけの

神かみの命みことと諸もろ共ともに

蜈蚣むかでの姫ひめを送おくりつ

地恩の郷の傍に
袂を別ち峰傳ひ

ネルソン山を後にして
ジャンナの郷に友彦が

館を訪ね西北を
目當に行方も白雲の

玉野ヶ原に着きにける
酷暑の空に焼きつかれ

椰子樹の蔭に一夜を
憩ふ折しも羽撃きの

激しき音に目を覺まし
諏訪の湖邊に佇みて

尊き神の神勅を
畏み仕へ奉りつつ

百の試練に遭ひながら
神の助けの八咫烏

背に跨りて悠々と
再び歸る諏訪の湖

眼下に眺めて玉依姫の
神の命の隠れます

龍の宮居に參上り
常世の春を楽しみつ

心を洗ふ折柄に
梅子の姫を始めとし

黄龍姫や蜈蚣姫
テールス姫や友彦の

五つの御魂の悠々と
訪ね來りし嬉しさに

胸轟かし出で迎へ

玉依姫の神言もて

奥殿近く導きつ

三日月形に座を占めて

暫く時を待つ程に

玉依姫の現れまして

賤しき妾の前に立ち

心も赤き麻邇の玉

ものをも言はずわが御手に

授け給ひし尊さを

私せじと心付き

年波高き蜈蚣姫

神の司の玉の手に

渡して歸る三つの門

濱邊に出でし時も時

空照り渡る金翼の

八咫鳥に乗せられて

世も久方の天の原

雲霧分けて自轉倒の

神の鎮まる龍の島

綾の聖地の外圍ひ

由良の港に名も高き

人子の司秋山彦の

貴の命の庭先に

悠々降り來りけり

あゝ惟神々々

神の御稜威の彌高く

恵の露の霑ひて

瑞の御魂の御神業
 仕へ給ひし玉能姫
 吾身に餘る光榮を
 擔ひて又も龍宮の
 麻邇の玉まで拜戴し
 五六七神政の一端に
 仕へ奉りし嬉しさよ
 バラモン教に身を委ね
 大江の山に現れませし
 鬼雲彦の副棟梁
 鬼熊別の妻神と
 現はれまして鬼ヶ城
 嚴の砦を構へつつ
 神の教を遠近に
 傳へ給ひし女丈夫も
 三五教の皇神の
 教の水に清められ
 今は尊き宣傳使
 蜈蚣の姫の御光
 普く四方に輝きぬ
 心も赤き赤玉の
 光ますます照りはえて
 神の御稜威は四方の國
 伊照り透らひ隈もなく
 蜈蚣の姫の功績は
 自轉倒島は言ふも更
 國の悉雷の
 轟く如く鳴り渡り

神の御楯と常久に 仕へ奉らせ給ふらむ

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

千代も八千代も變りなく 誠の道に仕へませ

拙き身魂の玉能姫 心を籠めて皇神の

貴の御前に願ぎ奉る あゝ惟神々々

御靈幸はへましましてよ

と歌ひ終つて座に着いた。

蜈蚣姫は「く」の字に曲つた腰を揺りながら、
へ、中央の席に現はれて自ら歌ひ自ら舞うた。
銀扇を開き満面に喜びの色を湛

メソポタミヤの樂園地 顯恩郷を立ち出でて

鬼雲彦と諸共に 自轉倒島の中心地

大江の山にバラモンの 教の庭を開きつつ

三嶽の山や鬼ヶ城
山の尾の上や川の瀬の

數多の神を寄せ集へ
神の教を開きつつ

大國彦大神に
百の犠牲奉り

大神慮を慰めつ
教の花を遠近に

世に芳ばしく傳へむと
心を焦つ折柄に

瑞の御魂と現れませる
神素盞鳴大神に

仕へ奉れる神司
心も清き大丈夫に

大江の城や鬼ヶ城
追ひ拂はれて鬼雲の

彦の命と鬼熊別は
伊吹の山を乗り越えて

再び波斯の野を横ぎり
埃及指して歸りまし

後に残りし蜈蚣姫
此類勢を何處迄も

翻さむと近江路や
丹波若狭の境なる

三國ヶ嶽に立て籠り
體主靈従と知りながら

時の勢已むを得ず
醜の御業を繼續し

國依別や玉治別の

神の司に退はれて

再び開く魔谷ヶ嶽

小豆ヶ島に名も高き

國城山に身を轉じ

教を開き黄金の

玉の在處を探ねつつ

月日を送る山の上

思ひがけなき三五の

神の司の高姫や

友彦其他に廻り會ひ

小絲の姫の行末を

探ねがてらの玉探し

名は太平の洋なれど

荒浪猛る和田の原

生死の境に浮沈して

數多の島を横ざりつつ

高姫一行と諸共に

一つ島なる地恩城

黄龍姫に面會し

始めて覺る吾娘

ヤツと一息つく間に

現はれ來る蜃氣樓

梅子の姫を始めとし

黄龍姫や友彦や

テールス姫と諸共に

遠き山野を打渉り

神の經綸の祕密郷

波も輝く諏訪の湖

梅子の姫の神勅に

初めて開く胸の中

君と臣とに麻柱の

誠を悟り勇ましく

天津祝詞を奏上し

歡ぎ喜ぶ一行は

黄金の船に迎へられ

龍の宮居に參上り

四邊眩き神社

光り輝き出で給ふ

玉依姫の御前に

進みし時の嬉しさよ

玉依姫の御手より

麻邇の赤玉受取りし

玉能の姫の眞心は

玉と光を争ひつ

顔色黒く腹黒き

厭しき蜈蚣の姫の前

玉の御手をさし伸べて

麻邇珠の玉を吾が御手に

渡し給ひし健氣さよ

思へば思へば恥しき

執着心の曲鬼に

取りひしがれし老の身の

開悟の花は咲き出でぬ

梅子の姫に従ひて

一同館を立ち出づる

莊嚴無比の三つの門 潜るや間もなく金翼の

八咫鳥に助けられ 一鴻千里の勢に

心の色も秋山彦の 神の命の庭先に

紅葉彩る今日の空 悠悠降り着きにけり

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

今迄犯せし親と子が 深き罪咎宣り直し

見直しまして三五の 神の司の片端に

列ね給へよ瑞御魂 神素盞鳴大御神

國治立大神の 御分靈の御前に

靈魂を洗ひ身を清め 心の色も赤玉の

曇り晴らして願ぎ奉る 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

教の君の御前に 汚き心二心

孫子の末に至るまで 夢にも持たじと皇神の

御前みまへに誓ちかひ奉たてまつる
あゝ惟かむながらかむながら神々々
御靈みたま幸さちはへ給たまへかし」

と歌うたひ終をはつた。

久助きうすけは數多あまたの人々ひとびとを憚はばかりながら、聲密こゑひそかに歌うたひ始はじめた。

バラモン教けうの神司かむつかさ

蜈蚣むかでの姫ひめの御教みをしへを

此上こよなく尊たふとみ敬うやまひて

妻つまのお民たみと諸もろとも共に

大國彦大神おほくにひこのおほかみに

仕つかへ奉まつりて村肝むらきもの

心こころの雲くもを明石あかし潟がた

浪なみを渡わたりて瀬戸せとの海うみ

堅磐かきはと常磐ときはに浮うかびたる

小豆せうどヶ島がしまに名なも高たかき

國城山くにしろやまの岩窟がんくつに

心こころを清きよめ身みを潔きよめ

教をしへの道みちを歩あゆむ折をり

三五あななひけう教の宣傳せんでん使し

高姫たかひめさまや貫州くわんしうの

教司をしへつかさの出いでまして

神の大道を宣り給ふ

時しもあれや其昔

吾等夫婦を虐げし

バラモン教の友彦が

此場に現はれ来るより

ハツと見合はす顔と顔

心の曇晴れやらぬ

吾等夫婦は友彦に

掴み掛つて恨み言

口を極めて罵りし

己が心の恥しさ

蜈蚣の姫や高姫の

後に従ひ瀬戸の海

國城山を後に見て

馬關の海峡打渡り

神の恵みの大島や

南洋一の龍宮島

波のまにまに漂ひて

ニユージーランドの沓島に 月日を重ねて辿り着き

又もや龍宮の一つ島

夕力の港に船繋ぎ

焦付く様な炎天を

蜈蚣の姫に従ひて

全島一の高原地

青垣山を廻らせる

風さへ清き地恩城

廣き馬場に立向ひ

群集ぐんしふに紛まぎれて城しろの側わき峰みねをつたひてネルソンの

山やまの絶頂ぜつちやうに登のぼりつめ四方よもを見晴みはらす折柄をりからに

空前くうぜん絶後ぜつごの旋風つむじかぜ吹ふき散ちらされて谷たにの底そこ

名なも恐おそろしき曲津神まがつかみ大蛇をろちにまかれて玉たまの緒をの

息いきも絶たえむとする時ときに神かみの恵めぐみの著いちじるく

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし玉治別たまはるわけの神司かむつかさ

其場そのばに現あらはれましまして吾等われら夫婦ふうふを救すくひまし

初稚姫はつわかひめや玉能姫たまのひめ愈いよいよ揃そろふ五いつ御靈みたま

人跡じんせき絶たえし谷道たにみちを辿たどり辿たどりて日ひを重かさね

虎狼とらほかみや鬼大蛇おにをろち醜しこの曲津まがつの猛たけび聲こゑ

胸むねを躍をどらせ肝冷きもひやし神かみの恵めぐみを力ちからとし

誠まことの道みちを杖つゑとして一望いちばう千里せんりの玉野原たまのほら

金銀輝きんぎんかがやく砂道すなみちを汗あせをダラダラたきつせ瀧たきつせの

落おつるが如ごとく搾しぼりつつ神かみの經綸しぐみの秘ひみ密つき郷やう

諏訪の湖邊に着きにける 初稚姫を始めとし

一行五人は玉依姫の 神の命の神勅を

畏み麻柱ひ奉りつつ 教司に従ひて

龍宮島を廻り終へ 神の救ひの八咫鳥

黄金の翼に助けられ 金波銀波の漂へる

諏訪の湖水に翔け戻り 黄金の門をかい潜り

玉依姫の潜みます 龍の宮居の奥深く

仕へ奉りて時を待つ 時しもあれや瑞御靈

神素盞鳴大神の 貴の御子と生れませる

梅子の姫を初めとし 黄龍姫や蜈蚣姫

テールス姫や友彦の 神の使の宣傳使

面に笑を浮べつつ 徐々進み來ります

其御姿を拜してゆ 心の駒は勇み立ち

嬉し涙はあふれける 奥殿深く進み入り

奥おくの一ひと間まに座ざを占しめて 月つきの形かたちの簾みすの内うち
 十と曜えうの紋もんの十と人たり連づれ 三み日かづ月き形がたに竝ならび居ある
 高かう座ざの扉とびらを押お開あけて 四あ邊たり眩まばゆき玉たま依よりの
 姫ひめの命みことの御おん姿すがた 玉たまの肌はだも細こやか
 雪ゆきより白しろき白しら玉たまを 明あ石かしの郷さとの久きう助すけが
 兩り手やうに授さづけ給たまひつづ 笑ゑませ給たまへる崇けだ高かさよ
 押お戴しいいて久きう助すけは 神かみの教をしの友とも彦ひこの
 玉たまの御おん手てに差さし渡わたし ヤツと胸むねをば撫なで下おろし
 感かん謝んしゃの涙なみだに咽むせぶ折をり 玉たま依より姫ひめ大神おほかみは
 吾われ等ら一いち同どうに目も禮れいし ものを言いはず元もとの座ざに
 玉たまの戸と閉とぢて入いり給たまふ あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら
 夢ゆめではないかと勇いさみ立たち 心こころも輝かがく折をり柄からに
 梅うめ子の姫ひめは悠い々うと 御み首くびに寶ほう珠しゆをかけながら
 早はやくも此この場ばを立たち給たまふ 一いち同どう御み後あとに從したがひて

光り眩き三つの門
潜り出づれば諏訪の湖

朝日に照りて金銀の
波も殊更爽かに

天國淨土の有様も
かくやあらむと思ふ折

御空を照らして降り來る
八咫鳥の一行に

梅子の姫を初めとし
吾等十人の生身魂

列を正して中空を
夢の如くに翔け廻り

名さへ目出度き磯輪垣の
秀妻國の中心地

由良の港に名も高き
秋山彦の庭先に

黄金の鳩の降る如
天降り來りし嬉しさよ

あゝ惟神々々
御靈幸はへましまして

三五教の御教を
四方の國々隈もなく

教へ導き皇神の
尊き經綸の萬分一

盡させ給へ天津神
國津神等八百萬

別けて尊き三五の
神の教の司神

くにはるたちのおほかみ
國治立大神や
豊國姫の御前に
あかし
明石の郷の久助が
心も清く願ぎ奉る
あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ』

と歌ひ終つて元の席に着いた。

（大正一一・七・一七 舊閏五・二三 谷村眞友録）

第五章 眞心の花（四）「七七〇」

友彦宣傳使は立ち上つて銀扇を開き、自ら歌ひ自ら踊り狂うた。その歌、

バラモン教の神司
鬼熊別の家の子と
鬼雲彦の副柱
仕へ奉りし友彦は

花見の宴の歸りがけ
エデンの川を渡らむと

宴會の酒に酔ひ潰れ
諸人騒ぎ立ち廻る

頃しも主の愛娘
小絲の姫は過ちて

ザンブとばかり川の瀬に
落ち込み給ふと見るよりも

身を躍らして川中に
生命を的にもぐり込み

溺れながらも救ひ上げ
鬼熊別の御夫婦に

此上なきものと愛せられ
拔擢されてバラモンの

珍の教の神司
仕へ奉るを幸ひに

深窓に育ちし小絲姫
隙間の風にもあてられぬ

一人の乙女を友彦が
舌の劍にチヨロまかし

手に手を取つてエデン川
流れ流れて錫蘭の

島に漸う辿りつき
山奥深く身を潜め

小絲の姫を女王とし
吾は僕の神となり

此世を誑かり居たりしが
持つて生れた酒好の

らんばうろつぜきすゑつひ
亂暴狼藉末遂に
小糸の姫に棄てられて

うら 怨みは深き錫蘭の海
土人の船に身を任せ

つ 印度の國まで漕ぎ渡り
難行苦行の數盡し

また 又もや流れて自轉倒の
敦賀の海に上陸し

よ 夜を日についで丹波路の
宇都山郷に身をひそめ

とり 鳥なき郷の蝙蝠を
氣取りて茲にバラモンの

をしへつかさ 教司となりすまし
郷の老若男女をば

ことばたくみ 言葉巧に説きつけて
教を開く折柄に

あめ 天の眞浦の宣傳使
現はれ來りいと清き

ことたま その言靈にまくられて
雲を霞と逃げて行く

やましろ 山城、大和、紀伊、和泉
浪速の里に舞ひ込みて

あまた 數多の男女を誑らかし
心も暗き身ながらも

かみ 神を表に標榜し
明石の里の久助が

いへ 家に到りて曲事の
限りを盡し磯端に

繋ぎし船を横奪し

力限りに漕ぎ渡る

浪の淡路の一つ島

残る隈なく遍歴し

そのいやはてに東助が

不在を嗅ぎつけうまうまと

館に招き入れられて

お百合の方を前に置き

憑依もせない神がかり

うまうまやつて九分九厘

忽ち尻尾を掴まれて

進退谷まる折柄に

死んだと思つた東助が

清、武、鶴の三人を

伴ひ此處に歸り來る

南無三寶と氣を焦ち

少時の猶豫と暇どらせ

廁の中に忍び入り

思案の果は跨げ穴

潜りて此家を逃れ出で

沖に繋ぎし屋根無し

小舟に身をば任せつつ

生命からがら瀬戸の海

力限りに漕ぎ出せば

如何なる風の吹き廻し

小豆ヶ島へつけられて

風凧ぎ渡るその間

此の浮島をめぐらむと

脚あしに任まかせて國城くにしろの

山やまの砦とりでに行いて見みれば

思おもひがけなき蜈蚣むかでひめ姫

三あな五な教ひけうの高たか姫ひめや

明石あかしの里さとの久助きうすけに

出で會あつた時ときの苦くるしさは

此この地ちの底そこに穴あなあらば

消きえも入いりたき心地こころして

心こころ惱なやます折柄をりからに

又またもや來きたる東助とうすけが

捕手とりての男をとこに縛しばられて

一いつ旦たん淡路あはぢの洲本すもとまで

連つれ歸かへられし苦くるしさよ

地獄ぢごくで佛ほとけの東助とうすけが

情なさけの言葉ことばにほだされて

ヤツと胸むねをば撫なで下おろし

清きよ、鶴つる、武たけの三さん人と

船ふねを操あやつり高たか姫ひめが

危あやふき身みの上守うへまもらむと

南なん洋やう大だい小せうの島嶼しまじまに

後あとを探たづねて周航しうかうし

蜈蚣むかの姫ひめや初はつ稚わか姫ひめの

神かみの命みことにめぐりあひ

海かい洋やう萬里ばんりの浪なみの上うへ

月つき日を重かさねて漸やうやうに

一ひとつの島しまに安あん着ちやくし

タカみの港みなとを後あとに見みて

地恩ちおんの郷さとに行ゆき見みれば

女王と名乗る黄龍姫の

神の命は小絲姫

過ぎし昔を懐ひ出し

心を悩ます折柄に

地恩の城の下人に

追ひまくられて城外の

林の中に放棄され

百の艱難を忍びつつ

山の尾傳ひ峰越えて

百里二百里何時しかに

果實に飢をしのぎつつ

ネルソン山の頂上に

登りて息を休めつつ

四邊の景色を打眺め

心を養ふ折もあれ

忽ち起る山腹の

黒白もわかぬ黒雲に

包まれ咫尺も辨へず

心痛むる折柄に

レコード破りの烈風に

吹き捲られて中天に

空中飛行を演じつつ

數多の峰の彼方なる

ジャンナの郷に顛落し

息も絶えなむ其時に

ジャンナイ教の人々に

ヤツと生命を助けられ

鼻の赤きを幸ひに

數多あまたの人ひとにオーレンス
サーチライスと敬うやまはれ

テールス姫ひめに思おもはれて
茲ここにメシヤとなりすまし

言葉ことばも通かよはぬ郷人さとびとに
出でまか任せ言葉ことばを列ならべつつ

崇拜すうはいさせて居あたりしが
妻つまの命みことに實情じつじやうを

残のこる隈くまなく打明うちあけて
夫婦ふうふは茲ここに氣きを合あはせ

地恩ちおんの城しろに立たち向むかひ
黄龍わうりゆう姫ひめに昔日せきじつの

無禮ぶれいを謝しゃせば快こころよく
昔むかしの怨うらみを打忘うちわすれ

東ひがしと西にしと携たづさへて
龍宮りうぐう島しまを治をさめむと

宣のらせ給たまひし嬉うれしさよ
黄龍わうりゆう姫ひめの計はからひに

地恩ちおんの城しろの馬場ばんばにて
園遊會えんいうくわいを開ひらかれし

時ときしもあれやネルソンの
山やまの尾を高たかく屋氣樓しんきろう

現あらはれ來きたり友彦ともひこは
猿田彦さだひこ司がみと相成あひなりて

一行いっかう五人ごにん蓑笠みのかさの
輕かるき身装みなりを装よそほひつつ

ジャンナの郷さとに立寄たちよりて
教をしへの御子みこに送おくられつ

山川渡り漸々に

玉野ヶ原に安着し

茲に身魂を清めつつ

梅子の姫に罪科を

宣り直されて潔く

喜び勇む折柄に

湖を迂つて駆け来る

黄金の船を眺むれば

地恩の城に現はれて

左守神と仕へたる

清公さまを始めとし

チャンキー、モンキー外二人

無言の儘に船の上へ

此方に向つて磨く

梅子の姫を始めとし

一行船に飛び乗りて

眞帆を孕みし浪の上へ

風に吹かれて迂り行く

妙音菩薩の音楽や

浪の鼓に送られて

玉依姫の在れませる

龍の宮居の側近く

御船を横たへ十柱の

教の御子は悠々と

黄金の門を潜りつつ

心いそいそ進む折

初稚姫や玉能姫

玉治別の一行に

思はぬ處ところに迎むかへられ
 又も十二じふにの姫神ひめがみに
 前後ぜんご左右さいうを守まもられて
 玉依姫たまよりひめの常久とことほに
 鎮まりしづいます水館みづやかた
 奥おくの廣間ひろまに招せうぜられ
 畏かしこみ仕つかへ奉まつる折をり
 上座じやうざの玉たまの扉と押開おしひらき
 近侍きんじの女神めがみに五色いついろの
 玉たまを持もたせて悠々いういうと
 現あらはれ給たまひし崇高けだかさよ
 心こころも清きよき白玉しらたまの
 麻邇まにの寶珠ほうしゆの其その光ひかり
 明石あかしの郷さとの久助きうすけに
 手てづから授さづけ給たまひつづ
 無言むごんの儘ままに微笑びせうして
 其その場ばに立たたせ給たまひける
 久助きうすけ玉たまを頂いたきて
 教をしへの道みちの友彦ともひこが
 手てに渡わたしつづ悠々いういうと
 元もとの座ざにつき畏かしこまる
 心穢こころけがれし友彦ともひこも
 案あんに相違さうゐの此始末このしまつ
 うら恥はづかしく思おもへども
 神かみの惠めぐみの露つゆの玉たま
 潤うるほふ顔かほに伏ふし拜をがみ
 侍女じぢよの賜たまひし錦欄きんらんの
 袋ふくろに深ふかく祕ひめながら

首くびに確しつと結むすびつけ

神かみの恵めぐみを感かん謝しゃしつ

涙なみだに暮くるる時ときもあれ

梅うめ子のこ姫ひめは座ざを立たちて

悠い々う此この場ばを出いで給たまふ

十と曜えうのもん紋もんにちな因ちなみたる

神かみの十と柱しら宣せん傳でん使し

龍たつの館やかたを立たち出いでて

八や咫あ鳥がの背せなに乘のり

雲くも霧きり分わけて浪なみの上うへ

渡わたりて漸やく秋あき山やま彦ひこの

貴うづの命みことの庭てい園えんに

降くだり来きたれる嬉うれしさよ

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ

仁じん慈じ無む限げんの大神おほかみの

御み靈たま幸さちはへましまして

罪つみ科とが深ふかき友とも彦ひこを

見み捨すて給たまはず龍りう宮ぐうの

麻ま邇にの玉たまをば授さづけられ

神しん政せい成じやう就じゆの神かむ業わざに

加くはへ給たまひし有あり難がたさ

これより心こころ取とり直なし

身み魂たまを淨きよめ夢ゆめの閒まも

神かみの恵めぐみを忘わすれずに

眞ま心こころ盡つくして仕つかへなむ

錦にしきの宮みやに常とこ久とはに

鎮しづまりいます天あめ地つちの

元もとの御み祖おやの大おほ御み神かみ

瑞の御魂の大御神

力なき身を憐れみて

三千世界の神業を

過ちなしにすくすくに

仕へさせませ友彦が

心の限り身の限り

力の限り眞心を

捧げて祈り奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はへましましてよ

お民は又もや立ち上つて祝意を表し、歌ひ舞ふ。

此世を造りし大神の

五六七の神世の御仕組

三つの御玉は永久に

自轉倒島に納まりて

神の御稜威も彌顯著に

輝く折しも龍宮の

五つの寶麻邇寶珠

神の御稜威に現はれて

大和島根に恙なく

寄らせ給ひし尊さよ

三と五との睦び合ひ

三五の月の御教は

八洲の國に隈もなく 照り渡るらむ皇神の

經綸の絲にあやつられ 誠あかしの郷人と

生れ出でたる久助が 妻のお民は如何にして

斯る尊き神業に 仕へ得たるか尊くも

皇大神の御恵み 有難涙に咽びつつ

神の仕組の永久に 未ひろびると開く世を

松の神世と仰ぎつつ 明石の濱の松原に

打寄せ來る清砂の 數限りなき神徳を

尊み畏み喜びて 皇大神の御前に

心の限り身の限り 御稜威を稱へ終へ奉る

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

玉依姫の賜ひたる 黄金色なす麻邇の珠

四方の國々テールス姫の 神の命の嚴身魂

輝き渡れ永久に あゝ惟神々々

御靈幸はへましてせよ』

と歌ひ終つた。

テールス姫は立ち上り、
又も祝歌をうたひ始めた。

大海原に漂へる

黄金花咲く龍宮の

一つ島にて名も高き
ネルソン山の山つづき

ジャンナの郷に現はれて
ジャンナイ教を開きたる

テールス姫は三五の
道の司の友彦に

尊き道を傳へられ
鬼をも欺く郷人に

誠の道を宣り了へて
地恩の城に名も高き

黄龍姫の御前に
夫の命と諸共に

現はれ出でて村肝の
心の底を語り合ひ

力を協せ龍宮の
一つの島を治めむと

語らふ折しも中天に

現はれ出でし窟氣樓

諏訪の湖水は龍宮の

麻邇の寶を取りもたし

數多の女神いそいと

いそしみ給ふ其姿

遙に拜み奉り

梅子の姫と諸共に

一行五人打揃ひ

虎狼や獅子大蛇

曲神猛ぶ山道を

神の御稜威に助けられ

月日を重ねて龍宮の

浪さへ清き諏訪の湖

龍の宮居に参上り

四邊眩ゆき金殿に

優しき侍女に導かれ

玉依姫の御前に

進みし時の嬉しさよ

玉依姫のお手づから

黄金の玉を取り出し

お民の方に授けられ

ほほゑみ給ふ折柄に

お民の方は慎みて

受取り直に吾前に

持出でまして快く

渡し給ひし美はしさ

あゝ惟神々々

神かみの教をしへを悟さとりたる

誠まことの人の心こころ根ねは

斯かくも美うるはしものなるか

恥はづかしさよと思おもひつつ

おしいただいて錦きんらん欄らんの

袋ふくろに納をさめ神しん恩おんを

感謝かんしゃし奉まつる折をり柄からに

神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみの

貴うづの御おん子こと生うまれたる

梅うめ子この姫ひめは悠い々うと

此この場ばを立たつて門もん外ぐわいに

歩あゆみを運はこばせ給たまふより

妾わらはも御み後あとに引ひ添きうて

黄こ金がねの海うみのほとりまで

歸かへり來きたれる折をりも折をり

はばたき高たかく黄わう金こんの

翼つばさひろげて飛とび下くだる

八や咫あ鳥たがらすに乗のせられて

自おの轉ころ倒じま島しまに恙つつ無がく

降くだり來きたりし尊たふさよ

あゝ惟かむ神な々が々ら

神かみの恵めぐみは目まの當あたり

仁じん慈じ無む限げんの大おほ神かみの

開ひらき給たまひし三あ五なの

教をしの道みちに身みを任まかせ

心こころの限かぎり永とこ久しへ

生いの命ちの限かぎり仕つかふべし

神かむ素す盞さ鳴の大おほ御み神かみ

國武彦大御神　お民の方を始めとし
此一行の神人の　御前に感謝し奉り
貴の御玉の恙なく　還りましたる祝言を
喜び歌ひ奉る　あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ

と歌ひ終つて座についた。

(大正一一・七・一七　舊閏五・二三　外山豊二録)

第二篇

蓮華臺上

第六章 大神宣（七七一）

素盞鳴尊は儼然として立上り、莊重なる口調を以て歌はせ給うた。

豐葦原の國中に 八岐大蛇や醜狐

曲鬼共のはびこりて 山の尾の上や川の瀬を

醜の魔風に汚しつ 天の下なる民草を

苦め悩ます此慘状を 見るに見兼ねて瑞御魂

神素盞鳴と現はれて 八十の猛の神司

八人乙女や貴の子を 四方に遣はし三五の

神の教を宣べ傳へ 山川草木鳥獸

蟲族までも言靈の 清き御水火に助けむと

ウブスナ山の齋苑館 後に残して八洲國

彷徨ふ折りしも自轉倒の 大和島根の中心地

綾あやの高天たかまの聖域せいゐきに 此世このよの根元もとと現あれませる

國く治立にはる大神たちのおほかみの 國武彦くにたけひこと世よを忍しのび

隠かくれいますずぞ尊たふとけれ 此世このよを救すくふいづ嚴み御靈みたま

瑞みづの御靈みたまと相あひ竝ならび 天地てんちの神かみに三五あななひの

教をしへを開ひらき天あめが下した 四方よもの木草きぐさにいた至までる迄

安息やすきと生命いのちを永とこ久しへに 賜たまはむため爲あさに朝夕あさゆふを

心こころ配くばらせ給たまひつつ 三みつの御玉みたまの神寶かむだから

高天原たかあまはらに永とこ久しへに 鎮しづまりまたまして又またもははや

現あらはれ給たまふ麻ま邇にの玉たま 五いづの御玉みたまと照てり映はえて

三五さんごの月つきの影かげ清きよく 埴安彦はにやすひこや埴安姫はにやすひめの

神かみの命みことと現あれませる 神かみの御靈みたまも今いま茲ここに

いよいよ清きよく玉照彦たまてるひこの 貴うづの命みことや玉照姫たまてるひめの

貴うづの命みことの御前おんまへに 納をさまる世よとはなりにけり

瑞みづの御靈みたまと現あれませる 三五あななひけう教かむづの神司かき

言靈幸はふ言依別の
神の命は皇神の

錦の機の經綸を
心の底に祕めおきて

松の神世の來る迄
浮きつ沈みつ世を忍び

深遠微妙の神策を
堅磐常磐にたてませよ

神素盞鳴の我が身魂
八洲の國に蟠まる

八岐大蛇を言向けて
高天原を治しめす

天照します大神の
御許に到り復命

仕へまつらむそれ迄は
蠖螟蚯蚓と身を潛め

木の葉の下をかいくぐり
花咲く春を待ちつつも

完全に委曲に松の世の
尊き仕組を成し遂げむ

國武彦大神よ
汝が命も今暫し

深山の奥の時鳥
姿隠して長年の

憂目を忍びやがて來む
松の神世の神政を

心靜かに待たせまし
龍宮城より現はれし

五つの麻邇の此玉は

綾の聖地に永久に

鎮まりまして桶伏の

山に匂へる蓮華臺

天火水地と結びたる

薰りも高き梅の花

木花姫の生御魂

三十三相に身を現じ

世人治く救はむと

流す涙は和知の川

流れ流れて由良の海

救ひの船に帆をあげて

盡す誠の一つ島

秋山彦の眞心や

言依別が犠牲の

清き心を永久に

五六七の神世の礎と

神の定めし嚴御魂

實に尊さの限りなり

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

國治立大神の

嚴の御靈は今暫し

四尾の山の奥深く

國武彦と現はれて

草の片葉に身を隠し

錦の宮にあれませる

玉照彦や姫神を

おもて 表に立たてて言依別ことよりわけの 神かみの命みことを司つかさとし
 しん 深遠微妙しん へん びめうの神界しん かいの 仕組しぐみの業わざに仕つかへませ
 あさひ 朝日は照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも
 たとへ 假令た と へ大地だ い ちは沈しづむとも 嚴いづと瑞みづとの此この仕組しぐみ
 ちよ 千代ち よも八千代や ち よも永久とこしへに 變かはらざらまし天地あめつちの
 なり 初發な り でし時ときゆ定さだまりし 萬古ばんこ不易ふえきの眞理しんりなり
 ばんこ 萬古ばんこ不易ふえきの眞理しんりなり 此この世よを造つくりし神直日かむなほひ
 こころ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 只何事ただなにことも神直日かむなほひ
 おほなほひ 大直日おほなほひにと見直みなほして 天地あめつち百ももの神人かみびとを
 すく 救すくはむ爲ための我あが聖苦なやみ 思おもひは同おなじ國治立くに はる たちの
 かみ 神かみの尊みことの御心おんこころ 深ふかくも察さつし奉たてまつる
 ふか 深ふかくも感謝かんしゃし奉たてまつる
 〆

と歌うたひ終をはり、一同いちどうに微笑びせうを與あたへて、奥おくの閒まに姿すがたをかくさせ給たまうた。

國武彦命は神素盞鳴尊の御後姿を見送り、手を合せ感謝の意を表し、終つて一同の前に立ち、稍悲調を帯びた聲音を張り上げ歌ひ給うた。

天の下なる國土を

汗と涙の瀧水に

造り固めて清めたる

豐葦原の國の祖

國治立の嚴御靈

御稜威も高き貴の宮

高天原に現はれて

百の神等人草の

守らむ道を宣り傳へ

神の祭を詳細に

布き擴めたる元津祖

天足の彦や胞場姫の

捻け曲れる身魂より

生れ出でたる曲身魂

八岐大蛇や醜狐

醜女探女や曲鬼の

怪しの雲に包まれて

さも美はしき國土も

汚れ果てたる泥水の

溢れ漂ふ世となりぬ

醜の曲靈に憑かれたる

常世の彦や常世姫

千五百萬の神々の

木花姫の守ります

身を躍らして荒金の

根底の國を隈もなく

心を盡し身を盡し

山の火口に再現し

あ眞似く國內を駆け巡り

野立の姫と現はれて

身を忍びつつ四方の國

世界隈なく検めて

其礎を固めむと

綾の高天と聞えたる

此世を洗ふ瑞御靈

五つの御靈の經綸を

罪や穢を身に負ひて

天教山の火口より

地の底迄身を忍び

さ迷ひ巡り村肝の

造り固めて天教の

野立の彦と名を變へて

豊國姫の神御靈

ヒマラヤ山を本據とし

夫婦の水火を合せつつ

再び來る松の世の

自轉倒島の中心地

桶伏山の片ほとり

四尾の山に身を忍び

仕へまつらむ其爲に

日の大神の神言もて 天の石座相放れ

下津磐根に降り来て 國武彦となりすまし

神素盞鳴大神の 御供の神と現はれぬ

此世を思ふ真心の 清き思ひは仇ならず

現幽神を照り透す 金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の 貴の寶は逸早く

自轉倒島に集まりて 三千世界を統べ守る

其礎はいや固く 國常立となりにけり

又もや嬉しき五つ御玉 波に漂ふ龍宮の

一つ島なる秘密郷 金波漂ふ諏訪の湖

底ひも深く秘めおきし 五つの御靈と稱へたる

青赤白黄紫の 光眩ゆき麻邇の玉

梅子の姫や黄龍姫 蜈蚣の姫や友彦や

テールス姫の御使に 持たせ給ひて遙々と

こがねつばさ やあたがらす
黄金翼の八咫鳥
あまつみそら
天津御空を輝かし

くもぢ
雲路を別けて自轉倒の
まつお
松生ひ茂る神の島

あや
綾の聖地に程近き
めぐみ
惠も深き由良の海

そのかはぐち
其川口に聳り立つ
あきやまひこ
秋山彦の神館

こころ
心の色は綾錦
そら
空照り渡る紅葉姫

ふうふ
夫婦の水火も相生の
まつばしげ
松葉茂れる庭先に

とえう
十曜の紋の十人連
かへ
しづしづ歸り降り来る

そのみすがた
其御姿の尊さよ
ここ
いよいよ茲に五つ御玉

くにたけひこ
國武彦も永久に
かく
隠れて此世を守り行く

たまよりひめ
玉依姫のおくりたる
まに
麻邇の寶珠は手に入りぬ

かむながらかむながら
あゝ惟神々々
とき
時は待たねばならぬもの

ときほどたふと
時程尊きものはなし
このよ
此世を造り固めたる

もと
元の誠の祖神も
とき
時を得ざれば世に落ちて

くろし
苦み深き丹波路の
くさば
草葉の影に身を凌ぎ

雨あめのあした晨あしたやゆき雪ゆきのよひ宵よひ 尾をのへ上ををわた渡る風かぜにさへさへ

心こころをくる苦くるしめ身みをいた痛いため 天てん地ちのため爲ににわがち吾から力ちから

盡つくさむ由よしもな泣なくばかり 胸むねもはりさ裂さく時ほと時と鳥とき

八は千っせん八や聲こゑのち血ちをは吐はきて 時ときのきた來きたるを待まつうち閒に

今け日ふはい如か何かなるよ吉よ日きぞひや 神かみ世よのすが姿た甲きの子えの

九く月ぐわつ八や日つかのあ秋あきのには庭に 御み空そらはた高かくか風かぜは澄澄すみ

人ひとのこころ心こころもす涼ずやかに 日に本っぽん晴ばれのおもわがおも思おもひ

瑞みづといづ嚴いづとのむつ睦むつびあ合あひ 八やし洲まのくに國くにをて照てらすてふ

三さん五ごのつき月つきのみ御を教しの 元もとをか固かむる瑞ず祥しやうは

此この世よのひら開ひらけはしはじめ初はじめより 今いまだあら新た玉たまのこころあがこころ心

あゝかむ惟ながら神かむ々ながら々ながら 天あま津つ御み空そらのわか若か宮みやに

鎮しづまりひいかますか日ひのか神かみの 御み前まへにつ慎つしみか畏かしこみて

國くに治は立たちのわけ御み分たま靈たま

國くに武たけ彦ひこのかく隱かくれが神かみ

遙はるかかんにしや感た謝たしま奉まつる 千ち座くらのお置き戸とをみ身みにお負おひて

此世を救ふ生神の
瑞の御霊と現れませる

神素盞鳴大神の
仁慈無限の御心を

喜び敬ひ奉り
言依別の神司

此行先の神業に
又もや千座の置戸負ひ

あれの身魂と諸共に
三柱揃ふ三つ身魂

濁り果てたる現世を
洗ひ清むる神業に

仕へまつらせ天地の
百の神たち人草の

救ひの爲に眞心を
千々に碎きて筑紫瀉

深き思ひは龍の海
忍び忍びに神業を

仕へまつりて松の世の
五六七の神の神政を

心を清め身を浄め
指折り數へ待ち暮す

あが三柱の神心
完全に委曲に聞し召し

天津御空の若宮に
堅磐常磐に現れませる

日の大神の御前に
重ねて敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々
かむながらかむながら

御靈幸はへましませよ
みたまさち

と歌ひ了り給ひ、一同に軽く目禮し、其儘御姿は白煙となりて其場に消えさせ給
うた。一同はハツと驚き、直に拍手し天津祝詞を奏上し、御神慮の尊さを思ひ浮
べて、感涙に咽ぶのであつた。

(大正一一・七・一八 舊閏五・二四 松村眞澄録)

第七章 鈴の音〔七七二〕

五十子姫はさも嬉し氣に満面に笑を湛へ、金扇を開いて満座の中に向つて祝歌
を歌ひ、長袖淑やかに舞はせ給うた。

嚴の御靈の大御神
いづ みたま おほみかみ

瑞の御靈の大御神
みづ みたま おほみかみ

八洲の國に蟠まる

八岐大蛇を言向けて

此世の曲を拂はむと

國治立大神は

心を千々に碎かせつ

雲井の空の彌高き

位を捨てて根の國に

尊き御身をしのばせつ

又もや此世を守らむと

天教山の火口より

水火の艱苦を凌ぎつつ

豐葦原の瑞穂國

隈なく廻り神人の

心を包む村雲を

科戸の風に吹き拂ひ

速川の瀬に淨めむと

百千萬に身を竄し

惡魔の猛ぶ世の中を

守らせたまふぞ尊けれ

ウブスナ山の頂上に

建ち並びたる齋苑館

五十子の姫は父神の

勅を畏み顯恩の

郷に下りて三五の

誠の道を楯となし

バラモン教の神柱

鬼雲彦や其外の

神の司に近寄りて

救ひの道を傳へむと 思ひし事も水の泡

是非なく此處を立ち出でて 梅子の姫と諸共に

エデンの流れを横ぎりつ 踏みも習はぬ旅枕

雨や霰に身を曝し 醜の魔風に梳り

彼方此方と神の道 開く折しもバラモンの

神の司に捕へられ 恨は深し海の原

半朽ちたる捨小船 主従四人は村肝の

心淋しく天地の 神の御前に太祝詞

涙と共に唱へつつ 果しも知らぬ浪の上

浮きつ沈みつ龍宮の 寶の島に辿りつく

神の御稜威もタカ港 御船を捨てて上陸し

鬼熊別の貴の子と 生れ出でませる小絲姫

教の道の司とし 地恩の郷に現はれて

大宮柱永久に 太知り立てて賑しく

をしへ
その
教の園の花薰り

實を結びたる秋の空

うめこ
ひめ
梅子の姫や小絲姫

そのた
つかさ
いとまご
其他の司に暇乞ひ

いまこ
ひめ
今子の姫と諸共に

かみ
めぐみ
いちじる
神の恵の著く

たな
ぶね
屋根無し船に身を任せ

なみ
たいへい
うなばら
浪太平の海原を

だいせう
むすつ
大小無数の島を縫ひ

やうや
ここ
おのころ
漸う此處に自轉倒の

ほづま
くに
秀妻の國の神島に

たど
つ
うれ
辿り着きたる嬉しさよ

おのころ
じま
自轉倒島を西東

きた
みなみ
かけめぐ
北や南と驅廻り

あなな
ひけつ
三五教の大道を

よも
つた
をり
四方に傳ふる折もあれ

おも
よ
思ひも寄らぬ龍宮の

ひと
じま
ひみつきやう
一つ島なる秘密郷

こが
うみ
黄金の湖の底深く

ひ
お
ま
た
祕め置かれたる麻邇の玉

こ
あら
此處に現はれ北の空

う
なが
あやしき
打ち眺めつつ綾錦

せい
ち
せ
ま
聖地を指して參下り

こと
より
わけ
もろとも
言依別と諸共に

あき
やま
ひこ
おん
やかた
秋山彦の御館

きた
み
い
か
來りて見ればこは如何に

こが
こが
わが
ちち
焦れ焦れし吾父の

か
む
す
さ
の
を
の
お
ほ
か
み
神素盞鳴大神や

くにたけひこのおほかみ
國武彦大神の
嚴の温顔伏し拜み

うれかな
嬉し悲しの胸の中
譬へむよしも泣くばかり

かむながらかむながら
あゝ惟神々々
御靈幸はへましまして

ちちおほかみ
父大神の大神業
國武彦の御經綸

うまら
完全に委曲に成り遂げて
堅磐常磐の松の世を

ちよ
千代に八千代に萬代に
築かせ給へ久方の

あまつみそら
天津御空の神國の
日の若宮に永久に

しづ
鎮まりいます日
御前を慎み畏みて

はるか
遙に願ひ奉る
瑞の御靈の麗しく

いづ
嚴の御靈の影清く
三五の月の何時迄も

て
照れよ光れよかくるなよ
あゝ惟神々々

かみ
神の御前に願ぎまつる

と歌ひ終つて舊の座に着き給うた。

音彦は立ち上つて銀扇を擴げ自ら歌ひ自ら舞ふ。

ウラルの彦やウラル姫の
開き給ひしウラル教

名さへ尊きアーメニヤ
教の館を後にして

ウラルの道を開かむと
波斯の海をば浮びつつ

僅に四五の神司
率ゐて進む一つ島

三歳四歳と身を盡し
心を盡し皇神の

教を開く甲斐もなく
わが信仰の仇花に

實りもせない山吹の
黄金花咲く此島も

何の効果も荒浪の上を
上を迂つて歸り來る

時しもあれや波斯の海
荒風すさび浪猛り

千尋の海に吾船は
早沈まむとする時に

同じ御船に乗りませる
三五教の神司

日の出別の神人に
危き所を助けられ

始めて悟る神の道
タルの港に上陸し

波斯の原野をトボトボと
神のまにまに宣傳歌

歌つて進む勇ましさを
彌次彦、與太彦兩人を

御供の司と定めつつ
小鹿峠にさしかかる

時しもあれやウラル教
目付の神に取圍れ

進退ここに谷まりて
千尋の谷間に身を投じ

人事不省の其儘に
三途の川や八衢の

淋しき光景探りつつ
日の出別の神人に

呼び生かされて甦り
深くも悟る神の道

皇大神の御心を
島の八十島八十國の

あらゆる限りに傳へむと
遠き近きの隔てなく

廻り廻りて自轉倒の
島に漸う辿り着き

大江の山や鬼ヶ城
バラモン教の神司

堅磐常磐の鐵城と
頼みて據れる眞最中

わがこたま
吾言靈に吹き拂ひ
心いそいそ五十子姫

みぎひだり
右と左に別れつつ
神の御爲道のため

よびと
世人の爲に赤心を
盡す折しも三五の

かみ
神の教の貴寶
三つの御玉は永久に

かみ
神のまにまに納まりて
天の御柱いや太く

したついはね
下津岩根に經緯の
機の仕組も近づきて

をしへ
教の花も遠近に
薫り初めたる秋の空

またきた
又もや來る五つ御玉
天火水地と結ぶなる

い
五つの御玉の麻邇寶珠
綾の聖地に恙なく

あつ
集まりますと聞きしより
心の駒も勇み立ち

にしぎ
錦の宮の御前に
感謝の涙流しつつ

あななひけつ
三五教の神司
言依別に從ひて

ゆら
由良の港に來て見れば
妻の命の御父と

あら
現はれませる瑞御靈
神素盞鳴大神は

聖顔殊に麗しく 身も健かに神業に
 盡させ給ふ嬉しさよ あゝ惟神々々
 御靈幸はへましまして 三つの御玉の麗しく
 五つの御玉の清らかに 心の空は日月の
 伊照り輝く其如く 雲霧もなく永久に
 神の光を世に照し ミロクの神世の礎を
 下津岩根に搗き凝らし 上津岩根に搗き固め
 三五の月の御教を 守る吾等の神業を
 守らせ給へ天津神 國津神等八百萬
 埴安彦や埴安姫の 伊都と美都との二柱
 清き御魂の御前に 慎み敬ひ願ぎまつる
 あゝ惟神々々 御靈幸はへましましてよ

(大正一一・七・一八 舊閏五・二四 加藤明子録)

第八章 虎の嘯（七七三）

空助は立ち上り銀扇を擴げて自ら歌ひ自ら舞うて見せた。

天教山に天降ります

神伊奘諾大神の

御裳の身魂と生れたる

魔神を攘ふ時置師

アルタイ嶺の山麓に

人子の司鐵彦が

僕の神の時公と

姿を窺し石凝姥の

伊都の命の宣傳使

三五教を開かむと

荒野ヶ原を打ち渉り

進み進みてコーカスの

深山を包む黒雲を

伊吹拂ひに吹き拂ひ

瑞の御靈の側近く

仕へまつりし吾身魂

神素盞鳴大神の

御言密かに蒙りて

自轉倒島に打ち渡り

心の色も丹波の

湯谷ヶ峠の山麓に

樵夫となりて身をひそめ

妻のお杉を娶りつつ

神の御水火の幸はひて

初稚姫の御誕生

蝶よ花よと育て上げ

五歳となりし秋の空

妻の命は世を去りて

後に残りし父と娘の

此世を果敢なむ折柄に

燈火を目當に訪ね来る

三五教の宣傳使

玉治別の神司

愈ここに空助は

神の大道に躍り入り

高春山にアルプスの

教を樹つる神柱

鷹依姫を言向けて

綾の聖地に参向し

再度山の山麓に

教の館を築き上げ

生田の森の側近く

稚姫君の生身魂

齋きまつりて御教を

遠き近きに開きつつ

神の教を聞きしより

再度山を立ち出でて

綾の聖地に参上り

父娘が盡す神の道

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

年端も行かぬ初稚の

姫の命は玉能姫

玉治別と諸共に

萬里の波濤を乗り越えて

龍宮島に打ち渡り

玉依姫の常久に

鎮まりいます諏訪の湖

龍の宮居に參詣で

麻邇の寶珠を賜はりて

梅子の姫に獻り

黄金の鳥に乗せられて

雲井の空を音高く

渡りて歸る由良港

人子の司秋山彦の

貴の命の庭園に

一行十人恙なく

降り來ませる尊さよ

梅子の姫の一行が

麻邇の寶珠を携へて

歸り來ますと聞きしより

心の駒は勇み立ち

言依別に從ひて

此處に漸く來て見れば

思ひ掛けなき瑞御靈

神素盞鳴大御神

國武彦大御神

聖顔殊に麗しく

現はれ給ふ嬉しさよ

そのみならず朝夕に

心に掛けて其無事を

祈りまつりし吾娘

初稚姫は殊更に

玉の顔にこやかに

勇み給へる嬉しさよ

あゝ惟神々々

三つの御玉は常久に

神のまにまに納まりて

神政成就の基礎を

築き給ひし其上に

嚴の御靈と稱ふべき

龍宮城の麻邇寶珠

又もや聖地に集まりて

光を放つ其上は

神の仕組は彌廣に

彌永久に動きなく

現はれ給ふ目のあたり

神が表に現はれて

善と惡とを立て別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す

三あななひけう五かみ教の神のの道みち
 深ふかき心こころを汲くみ取とりて
 三みつの御み玉たまに村むら肝きもの
 心こころの玉たまを抜ぬかれつつ
 憂うき身をやつ竄たます玉たま探さがし
 秋あきの御み空そらに天あま津つ日ひの
 光ひかり輝かがき給たまふ如ごとく
 榮さかえ進すすむは目まのあたり
 仁じん慈じ無む限げんの瑞みづ御み靈たま
 神かむ素す盞ざ鳴の大おほ御み神かみ
 國くに武たけ彦ひこの大おほ神かみの
 御み前まへに空もく助すけ惴ひれ伏ふして
 愼つしみ敬あやま願ねぎまつる
 あゝ惟かむ神な々ながら々ながら
 御み靈たま幸さちはへましませよ
 『』

と歌うたひ終をはつて舊もとの座ざについた。

（大正一一・七・一八 舊閏五・二四 北村隆光録）

第九章 生言靈〔七七四〕

ことよりわけのみこと
言依別命は立上り金扇を開いて自ら舞ひ自ら歌ひ給うた。

㌿

此世を造り固めたる
國治立大神と

御水火を合せ永久に
世界を守り給ひたる

豊國姫の御分靈
助け幸はひ生かすてふ

言靈別の天使
醜の猛びに是非もなく

根底の國に潛みまし
少彦名と現はれて

常世の國の天地を
守り給ひし勇ましさ

言靈別の御分靈
皇大神の御言もて

再び此世に出現し
三五教の神司

言依別神となり
天地の神の御教を

神のまにまに傳へ行く
四尾の山に隠れます

國武彦の御言もて
錦の宮に仕へます

玉照彦や玉照の
姫の命と諸共に

五六七神政の礎を

朝な夕なに村肝の

心を配り身を盡し

金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の

珍の神寶を永久に

神のまにまに埋め置き

三千世界の梅の花

一度に開く折を待つ

時しもあれや素盞鳴の

瑞の御魂の大御神

黄金の島の祕密郷

金波ひらめく諏訪の湖

玉依姫の常久に

守り給ひし麻邇の珠

いよいよここに現はれて

五つの御魂の功績は

ますます高く輝きぬ

三と五との玉の道

三五の月の御教は

二度目の天の岩屋戸を

完全に委細に押開き

常世の闇を打晴らし

天にます神八百萬

地にます神八百萬

百の人草草も木も

禽獸や蟲族の

生命のはしに至る迄

洩もらさずのこ残すくさず救あひ上げじやうげ上下ら歡むつぎて睦あび合あふ

誠まことの神かみよ世よを建たて給たまふうづ珍いしずの礎き定まりぬ

あゝかむながら惟かむながら神かみ々々ながら御み靈たま幸さちはへまませよ。

神かむ素す蓋さ鳴の大神おほがかみ宣のらせ給たまひし大神おほ勅かみ

唯ただ一言ひとことも洩もらさじと耳みみをそばだことて言より依わけ別の

瑞みづの命みことは只ひた管すらに今日けふを境さかひと改あらためて

世よ人びとを安やすきに救すくうため千ち座くらの置おき戸どを背せに負おひ

仁じん慈じ無む限げんの大神おほのかみ尊たふき御み心こころに神かむ習ならひ

仕つかへ奉まつらむ瑞みづ御み魂たま神かむ素す蓋さ鳴の大おほ御み神かみ

國くに武たけ彦ひこの御おん前まへにつし慎うやみ敬まひ眞ま心こころを

盡つくして誓ちかひ奉たてるまつ朝あ日さひは照てるとも曇くもるとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

皇大神に誓ひたる わが言靈は永久に

五六七の世迄も變らまじ あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

と自ら固き決心を歌ひ了つて悄然として座に歸つた。今後の言依別命の犠牲的活

動は果して如何に發展するであらうか。

神素盞鳴大神は秋山館の奥の間に隠れ給ひしより、何れへ出でませしか、その

消息を知るものは一人もなかつた。

國武彦命はその場に白煙となつて消え給ひ、四尾の山の奥深く神政成就の曉を

待たせ給ふ事になつた。

茲に言依別命は梅子姫、五十子姫その他の一同と共に、神寶を由良の港の川口

より美はしき神輿の中に納め、金銀を以て鏤めたる御船に安置し、金銀の眞帆に

秋風を孕ませ、由良川を遡りて聖地に勇ましく、船中歌ひ舞ひ、いろいろの音楽

を奏しながら歸り給ふ事となつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一一・七・一八 舊閏五・二四 外山豊二録）

第三篇 神都の秋

第一〇章 船歌〔七七五〕

由良の港の川口より新調の御船に神輿を乗せ、麻邇の寶珠を守護しながら、
樂の音も勇ましく、北風に眞帆を孕ませ、悠々として深き川瀬を聖地を指して上
り行く。

船の先にスツクと立上り、宣傳服を着したる國依別は、被面布を巻上げながら、

聲も涼しく節面白く歌ひ出した。其歌、

三千世界の梅の花 一度に開く時津風

天の八重雲掻き分けて 深く包みし天津日の

影もやうやう冴え渡り 月の光も皎々と

下界を照らす世となりぬ 此世を洗ふ瑞御靈

神徳輝く嚴御靈 經と緯との御經綸

茲に揃うて北の空 由良の港に名も高き

人子の司秋山彦の 神の命の御館

奥の一間に安置して 玉を納めし柳管

神素盞鳴大神や 國武彦大神の

御言畏み言依別の 瑞の命の神司

八人乙女の五十子姫 梅子の姫のいと清く

玉を守りて小波の 打ち寄せ来る川口を

ゆらりゆらりと上り来るのぼ 科戸しなどの風も爽さわかに

吹き拂はらひたる塵芥ちりあくた 曲まがの身魂みたまの影かげ失うせて

尊たふとき神世かみよは近ちかづきぬ 流れも清きよき由良ゆらの川かは

神かみの恵めぐみに上のぼり行く あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたまさち幸さいちはへましまして 尊たふとき神かみの仕組しぐみたる

誠まことの花はなは匂におひ初そめ 空前くうぜんぜつこ絶後ぜつごの神業かむわざに

仕つかへ奉まつりし國依くによりわけ別の 神かみの命みことの宣傳せんでん使し

何なにに譬たとへむ術すべもなく 喜よろこび勇いさみ傳つたへ行く

思おもへば遠とほき其昔そのむかし メソポタミヤけんおんきやうの顯恩けんおん郷やう

バラモンけう教けうに身みを任まかせ 教司をしへつかさとなりぬれど

神素かむすさの盞をの鳴おほかみ神かみが 高天原たかあまはらに上のぼりまし

天あまの岩戸いはとは閉とぎされて 世よは常闇とこやみとなりしより

年端としはも行ゆかぬ幼をさなこ兒この 親おやには別わかれ兄弟きやうだいに

生き別わかれたる悲かなしさに 奸ねぢけ曲まがりし吾身わが魂たま

曲まがの限かぎりを盡つくしつつ 親おやを探たづねて夫婦連ふうふうづれ

自轉倒島おのころじまを遠近をちこちと 憂うきを三年みとせの旅枕たびまくら

嶮けはしき山やまを乗のり越こえて 胸むねの動悸どうきも宇都山うづやまの

川邊かはべに進すすむ二人連ふたりづれ 日頃探ひごろたづぬる吾父わがちちに

知らず識しらずに廻めぐり會あひ 武志たけしの森もりの神司かむづかさ

松鷹彦まつたかひこは吾父わがちちと 覺さとりし時ときの嬉うれしさよ

それのみならず吾兄わがあにの 天あめの眞浦まうらにゆくりなく

廻めぐり會あうたる嬉うれしさに 胸轟むねとどろかす折をりもあれ

妻つまの命みことは兄妹おとどいと 知しらず識しらずに暮くらしたる

吾身わがみの罪つみの恐おそろしさ 神かみに祈いのりて許こ々こ多た久くの

罪つみや穢けがれを拂はらはむと 綾あやの聖地せいちに參まゐり

言依別ことよりわけの神司かむづかさ 貴うづの御前みまへに立出たちいでて

尊たふとき神かみの御教みをしへを いと懇ねもこに教をしへられ

罪赦つみゆるされし其上そのうへに 實げにも尊たふとき三五あななひの

神の教の宣傳使

國依別と名を賜ひ

玉治別や龍國別の

親しき友と諸共に

尊き聖地を後にして

名さへ目出度き龜山の

月宮殿に參詣で

月照る夜半の森の下

玉治別にからかはれ

肝を冷せし愚さよ

神の御稜威も高熊の

巖の岩窟に參拜し

神徳更に蒙りて

堺峠を打渉り

足に任せて法貴谷

道にさやれる小盗人

わが言靈に言向けて

進み行く折千匹の

聞くも恐ろし狼が

山路を渉る足音に

木の葉茂れる青山に

姿を隠し進み行く

玉治別の吾友に

湯谷ヶ谷なる空助が

館に目出度く廻り會ひ

心も勇む宣傳使

津田の湖水の水際に

袂を別ち六甲の

峰を傳ひて鷹依の

姫の命の岩窟に

一同漸く廻り會ひ

高姫さまや黒姫を

救ひ出して鷹依の

姫の命を三五の

誠の道に服はせ

それより進んで空助が

生田の森の神館

留守居の役を命ぜられ

秋彦、駒彦諸共に

教を開く折柄に

玉に心を奪られたる

日の出神と自稱せる

高姫さまを始めとし

高山彦や黒姫の

神の司に夕間暮

來訪されて奥の間に

秋彦諸共忍び居る

高姫、駒彦門口の

戸を隔てたる押問答

婆さまの聲や娘聲

言葉巧に操れば

高姫さまも一時は

迷はされたる可笑しさよ

漸う表戸引開けて

教司の駒彦と

暫時争ひ居たりしが

奥の一間に煙草吸ふ

煙管の音に心付き

高姫さまは忽ちに

襖押開け進み入る

南無三寶と仰向けに

グレンと覆つて四足の

憑依せし如装ひつ

憑依もせない大天狗

再度山の鼻高と

早速の頓智が仇となり

高姫さまや黒姫に

眞の天狗と誤られ

玉の在處を知らせよと

夢にも知らぬ國依別の

命に向つて攻めかくる

遁る由もなきままに

嘘言でもよいかと言ひ乍ら

三つの玉の隠し場所

近江の國は琵琶の湖

波に漂ふ竹生島

社の下に三角の

石の蓋して隠し在り

一時も早く片時も

急いで行かねば言依別の

瑞の命の使等が

又も掘出す虞あり

早く早くとせき立てて

三人共に竹生島

おなじ所に別々に 指圖をすれば三人が
 宙を驅つて走り行く 國依別や秋彦は
 虎口を逃れた心地して 生田の森の館をば
 後に眺めてスタスタと 心の駒の逸るまに
 足に鞭打つ膝栗毛 山野を涉り川を越え
 夜を日に次で綾の里 錦の宮に來て見れば
 言依別や空助の 神の司を始めとし
 聖地の役員一同は 由良の港に歸ります
 麻邇の寶珠を迎へむと 立出で給ふ眞最中
 喜び勇み秋彦を 伴ひ此處に來て見れば
 思ひ掛けなき瑞御靈 神素盞鳴大御神
 嚴の顔莞爾と 吾等を待たせ給ひけり
 あゝ惟神々々 恩頼の幸はひて
 今此船に身を委せ 聖地に歸る樂しさよ

さはさりながら高姫や

高山彦や黒姫の

三つの身魂は嘸やさぞ

案に相違の力抜け

國依別の曲神に

尻の毛までも抜かれたと

面をふくらし泡を吹き

随分怒つて居られませう

三つの寶珠は手に入らず

五つの玉の神業は

又もや人に勤められ

心のもめる事だらう

どうせ聖地へ歸りなば

國依別は高姫に

胸倉とられ一叱言

聞かして貰ふ事だらう

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

高姫さまの腹立ちを

なる事ならば穩かに

和め給へよと三五の

道を守らす大御神

玉照彦や玉照の

姫の命の御前に

先を案じて國依別の

神の司が願ぎ奉る

はや神徳を河守の

川邊に着いた嬉しさよ

波なみにせかれて川かはな中に高たか姫ひめならぬいと高たかく

腹はら立たち岩いはも漸やうやうに越こえて嬉うれしき八やくも雲がは川

落おち合あふ水みづに颯さつ々と涼すずしき風かぜも福ふく知ち山やま

嬉うれしき便たよりを白しら瀬せ川がは波なみを蹴けた立てて上のほり行ゆく

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々たまさち御み靈たま幸さちはへましませよ」

と歌うたひ終をはつた。

言こと依より別わけ命のみことを始はじめ一いち同どうは此この歌うたに吹ふ出だし腹はらを抱かかへて笑わらひこけた。

船ふねは清せい流りうを八や十そつ綱なもて索ひかるる如ごとく、順じゆん風ふうに真ま帆ほを膨ふくらせスルリスルリと迂すべり

行ゆく。

仰あふいで空そらを眺ながむれば天てん高たかく風かぜ澄すみ渡わたる秋あきの色いろ、忽たちち青あを、赤あか、白しろ、黄き、紫むらさの雲くも満まん

天てんを包つみ、得えも言いはれぬ芳ほう香かう四し邊へんに薰くんじ、微び妙めうの音おん樂がく聞きえ、天てん人にん天てん女にょの中ちゆう空くうに舞ま

ひ狂くるひて此この船ふねを祝しゆくしつつ送おくり給たまふ如ごとき爽さう快くわいの氣き分ぶんに一いち同どう漂ただはされ、歡くわん湧わき興きやう満まんち、

勇ゆう氣き凜りん々りんとして流さ石が長ちやう途との船ふな路ぢも瞬またく間うちに聖せい地ちに歸かへり着つく如ごとく思おもはれた。

第一章 言の波〔七七六〕

秋彦は漸く聖地に船の近付きしに元氣益々旺盛となり、
副守護神の發動氣分を發揮し歌ひ始めた。

四尾の山が見えて来た 和知の流れは永久に

清き教を白瀬川 生田の里も早越えて

何の便りも音無瀬の 流れも清き由良の川

由良の港に名も高き 秋山彦や紅葉姫

鹿と呼ばれし秋彦が 言依別に従ひて

麻邇の寶珠を迎へむと 流れを下り来て見れば

思ひ掛なき瑞御靈

八洲の河原に誓約して

清明無垢の御心を

現はし給ひし救世主

神素盞鳴大神の

聖顔殊に麗しく

慈愛の涙満面に

湛へいませる崇高さよ

四尾の山に奥深く

此世を忍び給ひつつ

神世をここに待ち給ふ

國武彦の御身魂

煙の如く現はれて

紅葉かがやく秋山の

館に隠れ給ひつつ

遠き昔の初より

黄金の島の秘密郷

諏訪の湖水の底深く

かくれて神世を待ち給ふ

玉依姫の嚴御魂

麻邇の寶珠は恙なく

八咫烏に送られて

天津御空を潔く

秀妻の國の中心地

外の圍ひと聞えたる

由良の港に鳩のごと

降り給ひて神の世の

礎固くつき給ふ

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈の幸を蒙りてみたま さち かうむ

流れも清き和知川なが きよ わちがはに 汚れし身魂を洗ひつつけが みたま あら

前代未聞の神業ぜんたい みもん かむわざに 参加さんかなしたる尊たふとさよ

思おもひまはせば其昔そのむかし 兄あにの駒彦諸共こまひこ もろともに

紫姫むらさきひめに従したがひて 花はなの都みやこを後あとになし

豊國とよくに姫ひめの常久とことはに 鎮しづまりいます比沼ひぬま眞ま奈な井ゐ

瑞みづの寶座はうぎに詣まうでむと 主しゅじう従みたり三人やま山をを越こえ

草くさを分わけつつ進すすみ行ゆく 普ふか甲ふたうげ峠の手前てまへまで

主しゅじう従みたり三人すす進をりむ折をり バラモン教けうに仕つかへたる

三み嶽たけの山やまの守護しゅごうじん神かみ 名なも恐おそろしき鬼鷹おにたかや

情容なさけ赦ゆるしも荒鷹あらたかの 曲津まがつの神かみに誘いざなはれ

紫姫むらさきひめと諸共もろともに 醜しこの岩窟いはやに捕とらへられ

進退しんたいここに谷きまりて 前途ぜんとを煩わづらふ折柄をりからに

三五あななひ教けうの宣傳せんでん使し 悦子よしこの姫ひめを始はじめとし

おとひこ 音彦、かめひこりやうじん 加米彦兩人が
 かみ けしん 丹州と 神の化身の丹州と
 こゝろ みたりに 三は 三五の 茲に三人は三五の
 ひら きたま 尊さよ 開き給ひし尊さよ
 みたけ 山の峰傳ひ 三嶽の山の峰傳ひ
 おにがじやう 城へと立向ひ 鬼ヶ城へと立向ひ
 けう つかさ 教の司等を バラモン教の司等を
 せいち かけむか 聖地に驅向ひ それより聖地に驅向ひ
 たかしろやま 松姫が 高城山の松姫が
 こゝろ しの 花咲きて 堪へ忍びの花咲きて
 な あきひこ 賜はりて 名も秋彦と賜はりて
 にし ひがし 北南 西や東や北南
 わかひめぎみのおほかみ 神の御教を傳へつつ 稚姫君大神を
 まつ いくた 祀りし生田の神館 祀りし生田の神館
 こまひこ 駒彦と 三つの御靈の御教を 國依別や駒彦と
 いはや なか 岩窟の中に驅入りて 息を合せて救ひ出し
 あは すく 心を合せて救ひ出し 心の岩戸をさらさらと
 あななひけう ひとびと 三五教の人々と 三五嶽の人の人々と
 ひめ こも 蜈蚣の姫の籠りたる 蜈蚣の姫の籠りたる
 かいし ことたません 言靈戦を開始して 言靈戦を開始して
 あなた おほぢ 雲の彼方に追ひ散らし 雲の彼方に追ひ散らし
 おほぢ つた 神の大道を傳へむと 神の大道を傳へむと
 すす ゆ 館をさして進み行く 館をさして進み行く
 おんめ かな 神の御目に叶ひしか 神の御目に叶ひしか
 たふと せんでんし いよいよ尊き宣傳使 いよいよ尊き宣傳使

道みちを求もとむる人々ひとびとに

明あかし傳つたふる折をりもあれ

玉たまを索もとめて南洋なんやうの

龍宮りうぐうじま島しままで彷徨さまよひし

高たか姫かひめさまの一行いつかうが

訪はうもん問もんされて國くにさまや

駒こま彦ひこ、秋あき彦ひこ三人さんにんは

又またも五う月る蠅さい玉たま詮せん議ぎ

さつと裁さばいて近あふ江路みぢの

竹ちく生ぶの島しまに寶ほう玉ぎよくは

社しゃ殿でんの下したに奥おく深ふかく

隠かくされありと出で放はう題だい

其その虚そら言ごとを真まに受うけて

高たか姫かひめさまを始はじめとし

高たか山やま彦ひこや黒くろ姫ひめは

時ときを移うつさず進すすみ行ゆく

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

國くに依より別わけや秋あき彦ひこが

心こころにもなき詐いつはりを

宣のり傳つたへたる曲まが業わざを

直なほ日ひに見み直なほし聞き直なほし

是ぜ非ひなきことと宣のり直なほし

赦ゆるさせ給たまへ三五あななひの

道みちを守まもらす大おほ御み神かみ

埴はに安やす彦ひこや埴はに安やす姫ひめの

貴うづの命みことの御おん前まへに

慎つしみ敬つやひ詫まびまつる

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

御靈幸はへましませよ』

と歌ひ終つた。

歡呼聲裡に玉の御船は漸くにして、吉美の濱邊の南岸に安着した。

言依別命を先頭に、五十子姫、梅子姫、初稚姫、玉能姫、玉治別や黄龍姫、蜈蚣

と順序を正し、錦の宮の八尋殿より迎へ來れる數多の信徒に神輿を昇がせ、

列を正してしづしづと、微妙の音樂に前後を守られつつ、肅々として錦の宮に歸

り行く。

腰の曲つた夏彦は、嬉しさの餘り足も地に着かず、千鳥の如く右左、大道狭し

と手を振り首を揺りつつ祝ひの歌を高らかに口ずさみながら歸り行く。

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

天地を清むる三五の 神の教の御光は

四方に輝く時來り 三つの寶珠を始めとし

今また五つの麻邇の玉 經と緯との御仕組の

錦の機を織りませる 眞の神を齋りたる

錦の宮に更めて 鎮まりますこそ尊けれ

心も赤き秋山彦の 神の命の眞心は

照り輝きて紅葉姫 大和心の嚴御靈

皇大神は詳細に 夫婦が心をみそなはし

空前絶後の神業を 依さし給ひて永久に

譽を四方に傳へむと 神素盞鳴大御神

國武彦の嚴御靈 再び館に現はれて

三五の月の大御教を 堅磐常磐に固めまし

神の大道に五十子姫 教の花は香ばしく

一度に開く梅子姫 花の苔の初稚の

姫の命や玉能姫 玉の光はいやちこに 神の御稜威もテールス姫の

玉治別と現れまして

神かみの司つかさや黄龍わうりょう姫ひめ
 鼻はなの先さきまで紅くれなゐの
 赤あかき心こころの宮みや仕づかへ
 暗やみ夜よを明あかし石いしの久きう助すけが
 海かい洋やう萬ばん里りの波なみを越こえ
 妻つまのお民たみと諸もろ共ともに
 空くう前ぜん絶ぜつ後ごの神かみ業わざに
 仕つかへまつりし健けん氣げさよ
 花はなさく春はるも早はや過すぎて
 あつき心こころの夏なつ彦ひこが
 今日けふの生いく日ひの足たる日ひをば
 喜よろこび祝いはひ奉たてまつり
 千ち代よも八や千ち代よも三あな五なひの
 神かみの教をしへの礎いしずえは
 いや固かたらかに揺ゆるぎなく
 茂しげり榮さかゆる八やく桑はえ枝えの
 日ひに夜よに開ひらきのぶること
 進すすませ給たまへ惟かむ神ながら
 神かみの御み前まへに慎つつしみて
 今日けふの喜よろこび祝ほぎまつる
 あゝ惟かむ神ながら々々
 御み靈たま幸さちはへましませよ
 御み靈たま幸さちはへましませよ

と歌うたひ了をはつた。

常彦は又夏彦の歌に促されて怪しき口調を以てうなり出した。

ウラナイ教の黒姫に 愛想をつかして三五の

誠の道に救はれし 沈香も焚かぬ屁も放らぬ

教も知らぬ常彦が 錦の宮の側近く

朝な夕なに仕へつつ 唯々諾々と日を送り

三五教の隆盛を 指折り數へ松の世の

來るを遅しと伺へば 三つの御靈の如意寶珠

綾の聖地に納まりて 教の光日に月に

四方に輝く目出度さよ 慶びを積み暉きを

重ねて廣き八尋殿 九つ花の咲き匂ふ

十の美世廻り來て 思ひもよらぬ龍宮の

五つの御靈の麻邇寶珠 初稚姫や玉治別の

神の使等一行の 清き身魂の働きに

諏訪の湖空高く

神の使に送られて

雲を壓して悠々と

輝き渡り歸ります

今日の生日の足日こそ

五六七神政成就して

天國淨土も目のあたり

出現したる思ひなり

あゝ諸人よ諸人よ

天津神等國津神

百の司の神等の

御前に赤き心もて

愼み感謝し奉れ

先に現れます三つ御玉

神の仕組を畏みて

隠させ給ふ言依別の

瑞の命の御指圖

仕へまつりし玉能姫

初稚姫の御前を

壽ぎ奉る信徒の

澤ある中に高姫や

高山彦や黒姫が

妬みの焰消えやらず

心焦ちて西東

南の洋の果てまでも

あてども知らぬ玉探し

出でます後に龍宮の

實にも尊き麻邇寶珠

現はれ給ひて言依別の

神の司の御許に

納まり給ふと聞くなれば

高姫如何に村肝の

心なやます事ならむ

今から思ひやられける

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

三五教の上下は

神に心を任せつつ

睦び親しみ末永く

歡ぎて伊都の大前に

心平に安らかに

心の空の雲霧を

尊き御水火に吹き拂ひ

堅磐常磐の礎を

築かせ給へ惟神

神の御前に願ぎ奉る

佐田彦は又もや歌ひ出した。

㊦

山の頂上に

に従ひて

空前絶後の神業に

仕へ奉りし佐田彦は

初稚姫や玉能姫
危き生命を救はむと

音高々とおちかかる
瀧の麓にて

バラモン教の神司
蜈蚣の姫と格闘し

初稚姫や玉能姫
二人の神使を救ひつつ

波留彦諸共
又もやに立歸り

の御前に
三つの御玉を

ここにいよいよ谷丸を
道の先頭の佐田彦と

宣り直されて瀧公は
夏の初と言ひながら

名も波留彦と與へられ
初稚姫や玉能姫

一行四人は慎みて
此の世彼の世の海の

波に浮べる
島に小舟を漕ぎつけて

を
神の厳しき戒めに

折角來るは來たものの
の隠し場所

知らずに再び漕ぎ歸る
さはさりながら
の

したる は 確かにここと明らめて

知つては居れど皇神の いとも厳しき戒めに

三十萬年未來まで にして置かう

高姫さまや黒姫が 心を焦ちて遠近と

三つの寶珠の在處をば 夜叉の如くに驅巡り

當所も知らぬ玉探し お氣の毒ぢやと知つた故

いろいろ様々理を分けて 申上ぐれど高姫は

日の出神を楯にとり 續いて黒姫龍宮の

乙姫さまを標榜し 三つの寶珠はどうしても

系統の身魂が預らにや 完全無缺の松の世の

五六七神政は成就せぬ 佐田彦言はぬと申すなら

言はでも宜しい高姫が 日の出神の神力で

探して見せうと雄猛びし 萬里の波濤を乗越えて

どこどこまでも探し行く 心の中の可憐らしさ

玉たまの在處あrikaはと知らして安心あんしんさせたいは

山々やまやまなれどのの教をしへはどうも反そむかれぬ

あゝ惟かむながらかむながら神々々また又もや神かみの御仕組おしぐみで

高たか姫ひめさまの居をらぬ間にまた龍宮島りうぐうじまの麻邇まにほ寶珠つしゆ

綾あやの高天たかまに納をさまりて梅子うめこの姫ひめを初はじめとし

初はつわかひめ稚姫や玉能たまのひめ姫ひめ再びふたたび尊たふとき神業かむわざに

仕つかへませしと聞きくならば日ひの出神でのかみも龍宮りうぐうの

乙おとひめ姫ひめさまも肝きもぬかれアあフンとするに違ちがひない

夜食やしよくにはづれた梟鳥ふくろどりむつかし顔かほを目まのあたり

今いま見るやうに思おもはれてお氣きの毒どくなる次第しだいなり

今いまに高たか姫ひめ歸かへりなば初はつわかひめ稚姫や玉能たまのひめ姫ひめ

向むかふにまはして一戰ひといくさおつ始はじまるに違ちがひない

平和へいわ克復こくふく一時いつときも聖地せいちの空そらに來きて欲ほしい

三みつの寶珠ほつしゆや五いつ寶珠ほつしゆ【ほしう】て探さがす高たか姫ひめの

心こころはいつか玉脱たまぬけの　ラムネのやう様なき氣ぬけ顔がほ
味あぢもしやしやりも無なきのみか　誰たれが吞のんでも水臭みづくさい
うすい憂目うきめにあはしたと　教主けうしゆの襟えり髪がみ引ひ掴つかみ
金切かなきり聲こゑを搾しぼり出だし　一ひと悶錯もんさくをなさるだろ
佐田彦さだひこそれが氣きにかかり　一ひと夜よさへも安々やすやすと
眠ねむりに就ついた事ことはない　三みつの御靈みたまに比くらぶれば
天地てんち霄壤せうじやうに違ちがひある　龍宮島りうぐうじまの麻邇まにの玉たま
一ひとつ位くらゐは高姫たかひめに　手て柄がらを分わけてやつたなら
無事ぶじに解決かいけつつくだらう　言依ことより別わけ神かみさまも
お年としが若わかいで氣きが利きかぬ　私わしが言依ことより別わけならば
今度こんどは高姫たかひめ、黒姫くろひめに　一ひとつ手て柄がらを指さしてやる
さうすりや高姫たかひめ、黒姫くろひめも　手ての舞まひ足あしの踏ふむ所ところ
知らず顔かほの紐ひもをととき　お多福たふくづら面めんになるだらう
どうしてあれ程ほど因縁いんねんが　悪わるい方はうへとまはるのか

これを思へば高姫の
自ら暗路に迷ひこみ
外れて行くに違ない
善の御用を命ぜられ
善悪正邪の二道に
三つの御玉は是非なくも
思ひ切つたにしたとこで
龍宮の島に遙々と
玉の在處を探らずに
五つの玉の現はれし
定めて舌を巻くだらう
どうして是が事もなく
心の底から勇むだる
あゝ惟神々々

執着心の雲晴れず
大切の大切の神業に
心一つの持様で
悪の御用も引受ける
迷ひ切つたる三人連れ
因縁づくぢやと諦めて
麻邇の寶珠のかくされし
渡りて長らく住みながら
歸り來れる其後で
皮肉な神の經綸に
思へば思へば可憐らしい
高姫さまが聞いたなら
今から思ひやられます
神が表に現れまして

言こと依より別わけや高たか姫ひめの 二ふたつ柱はしらが睨にらみ合あひ

どうぞ和なごめて下くださんせ 三五あななひけう教けうの佐さ田だ彦ひこが

眞ま心しんこめて願ねぎまつる 嚴いづの御み靈たまの大おほ御み神かみ

瑞みづの御み靈たまの大おほ御み神かみ あゝ惟かむ神な々がら々かむ

御み靈たま幸さちはへましませよ

瀧たき公こうの波は留る彦ひこは佐さ田だ彦ひこの歌うたに引ひ出きされ、始はじめて言こと靈たまの口くちを切きつた。

魔ま窟くつヶ原がはらに現あられし ウラナイ教けうの黒くろ姫ひめが

幕ばく下かとなつて日ひに夜よるに 口くち汚きたくも使つかはれし

體たい主しゆ靈れい從じうの瀧たき公こうも 普ふ甲か峠たうげの梅うめ公こうが

故こ智ちに倣ならつて船ふな岡をかの 山やまの麓ふもとの森しん林りんに

お節せつの後あとを追おひまくり 一寸ちよつと芝しば居ゐを打うつてみた

悪わるい時ときには悪わるいもの 紫むらさき姫ひめの一行いっかうが

暗の中より現はれて

折角仕組んだ此芝居

蛇尾にされたる其揚句

板公さまと諸共に

暗の谷間へ蹴落され

腰をしたたか打ちなやめ

やうやう其處を這ひあがり

歸つて見れば黒姫

大い目玉に睨まれて

居た堪らねば板公と

二人は尻に帆をかけて

漸う其場を抜け出し

どこへ行つてもふられ蛸

骨なし男と蔑すまれ

吸ひつく術もなくばかり

お尻を喰へ観音の

山の峠に佇みて

此世を果敢なむ折柄に

三五教の常彦が

情のこもつた握飯

押戴いて蘇生り

いよいよ心をため直し

神の恵に救はれて

錦の宮の門掃除

塵や芥を掃きちぎり

心の奥の奥庭を

清めて時を待ち居れば

尊き神の御恵は

電いなづまの如ごと身にくだ下り
言こと依より別わけの神かむつ司かき

近ちかく吾われをまねば招まねきつつ
再ふた度たび山やまの……こちがら違ちがうた

再ふたびとかむわなき神かむわ業わざを
依よさし給たまひし嬉うれしさよ

空もく助すけさまの愛まなむすめ娘め
初はつ稚わか姫ひめを始はじめとし

暗やみに紛まぎれて縛しばりたる
お節せつの方かたの玉たま能の姫ひめ

因いん縁ねん者ものの寄より合あひで
山やまのに

五ご人にんの男なん女によは巡めぐり會あひ
黄こが金ねの玉たまはの

峰みねにかくしまし
金こん剛がう不ふ壊えの如にい意い寶ほつ珠しゆ

紫むら色さきいろの御おん寶たから
初はつ稚わか姫ひめや玉たま能の姫ひめ

瀧たき公こうさまは波は留る彦ひこと
名なを賜たまはりて谷た丸まるの

佐さ田だ彦ひこさまと諸もろ共ともに
帯おびを二ふたつに引ひ裂きいて

俄にはに狂くるふ玉たま能の姫ひめ
髪かみふり亂みだしどんとんと

二ふたつの玉たまを肩かたにかけ
山やまの山さん頂ちやうを

一いち目もく散さんに驅かけ出いだし
谷たにを飛とび越こえ山やま傳づたひ

波打際に立竝ぶ
堅磐常磐の松林

蜈蚣の姫の手下等が
目を眩ませて譯もなく

四人は無事に通りぬけ
胸の動悸も高砂の

オツト違うた高まりて
息もせきせき又走る

濱に辿り着き
一艘の船に二百兩

初稚姫の御手より
渡せば船頭は仰天し

忽ち家に驅入りて
中より戸口を押へつつ

違約させじと力み居る
頃しも波は高まりて

船を出すべき由もなく
月五日の月低う

波は愈高くなり
大海原に永久に

浮びて立てるの島
神の恵に易々と

渡り終せて初稚姫や
玉能の姫の二人連れ

二つの玉を守りつつ
山の絶頂に

堅磐常磐に隠し置き
千代の印とを

植ゑて歸りし勇ましさ
吾等は まで送れども

は分らない
の海上を

夜を日に繼いで漕ぎ歸る
時間の程は分らねど

どうやら四十（始終）一日か
再度山の…又違うた

又と再び手に入らぬ
此御寶を恙なく

隠しまつりし神業は
空前絶後の大手柄

あゝ惟神々々
御靈幸はへましまして

悪に溺れし瀧公も
神の光に照らされて

轉迷開悟の花咲かせ
名も波留彦と宣り直し

今は聖地に名も高き
神の使の宣傳使

深き恵を尊みて
遙に感謝し奉る

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも
三五教の御寶

三つの御玉の寶をば
探さにやおかぬと高姫が

心の駒に鞭ちて 岩の根木の根踏みさくみ
疲れ果てたる膝栗毛 やがて高姫一行は
一先づ聖地に歸るだろ ア、其時は其時は
又も五つの麻邇寶珠 心に好かぬ玉能姫
初稚姫や玉治別の 神の司が龍宮の
玉依姫の御手づから 麻邇の寶珠を受取りて
歸りし後と聞くなれば さぞや御心揉めるだろ
國依別や秋彦の 早速の頓智再度の
山に坐します大天狗 小天狗までが現はれて
近江の國の竹生島 玉無し場所を知らしたる
其天罰は目のあたり 高姫さまが歸りなば
上を下へと喧しく 又々もめる事だらう
今から思ひやられます あゝ惟神々々
御靈幸はへましまして 今度計りは高姫や

黒姫さまの一行に

何とか一つ花持たせ

執着心の雲霧を

拂ひ清めて村肝の

心の空に日月の

澄み渡るごと爽かに

一切萬事相濟みて

和氣霽々と共々に

手を携へて三五の

神の教の御光を

四方の國々島々に

完全に委曲に布き教へ

五六七の神世の礎を

立てさせ給へ惟神

尊き神の御前に

慎み敬ひ願ぎ奉る

と歌ひ了り、日頃の述懐を宣べ終りて拍手し、錦の宮の方に向つて暗祈黙禱する
のであつた。

五個の神寶を乗せたる神輿は無事に聖地に到着し、言依別命を先頭に八尋殿に
設けられたる聖壇に安置され、聖地の神司を始め信徒等は立錐の餘地もなく集ま
り來りて、神威のいやちこなるに感謝の涙をふるひつつ、五六七神政の曙光を認

めたる如き歡喜の聲に充たされた。

九月九日の聖地の空は、金翼を一字に伸べて、空中に翱翔する八咫鳥の雄姿
悠々として右に左に飛び交ひ、妙音菩薩の微妙の音樂は、三重の高殿の空高く響
き渡つた。あゝ惟神々々御靈幸はへまませよ。

(大正一一・七・一九 舊閏五・二五 松村眞澄録)

第一二章 秋の色〔七七七〕

松の神世の礎は 目出度く立ちて足曳の

山と山との奥深く 紅葉踏み分け鳴く鹿の

聲爽かに佐保姫の 錦織りなす秋の空

雲井の空もいと高く 和知の流は涼々と

言靈鼓打ちながら

神世を祝ふ尊さよ

天地開けし始めより

金龍銀龍二柱

海月の如く漂へる

泥の海原練固め

海と陸とも立別けて

山川草木生ましつ

完全に委曲に現世を

開き給ひし國治立の

神の命に引添うて

豊國姫大御神

嚴と瑞との三五の

錦の機を織らせつ

いと安らげく平けく

神世を開き給ふ折

エデンの園に現はれし

天足の彦や胞場姫の

體主靈從の醜業に

魂は亂れて日に月に

弱り果てたる其隙を

八岐大蛇や醜狐

曲鬼共が忍び入り

常世の國の天地を

曇らせ亂す常世彦

常世の姫の二柱

鹽長彦を推戴し

豊葦原の瑞穂國

醜しこの魔まの手てに握にぎらむと 心こころを盡つくし身みを盡つくし
 權謀術けんぼうじゆつ數限すうかぎりなく 醜しこの荒すさびを不知しらぬ火ひの
 地上ちじやうに生あれし百神ももがみは 仁慈じんじ無限むげんの大御神おほみかみ
 國治立大神くにはるたちのおほかみの 開ひらき給たまひし神政しんせいに
 向むかつて醜しこの鋒ほこを向むけ 常世とこよの彦ひこを謀主ぼうしゆとし
 力限ちからかぎりに攻せめ來きたり 天地暗澹てんちあんたん曲津靈まがつつひの
 荒あらぶる世よとは成なり果はてぬ 國治立大神くにはるたちのおほかみは
 天津御空あまつみそらの神國かみくにの 日ひの若宮わかみやに登のぼりまし
 大海原おほうなばらに瀾はびこれる 醜しこの雄猛をとけび詳細まつぶさに
 詔のたまらせ給たまひて天あめの下した 百ももの罪咎つみとが残りなく
 償つぐなひ玉たまひて天教てんけうの 山やまの火口くわこうに身みを投なげて
 世人よびとの爲ために根ねの國くにや 底そこの國くにまで遍歷へんれきし
 野立のだちの彦ひこと名なを變かへて 忍しのび忍しのびに世よの中なかを
 守まもらせ給たまふ尊たふとさよ 豊國とよくに姫ひめも夫神つまがみの

後を慕うて波の上

阿波の鳴門の底深く

沈み給ひて根の國や

底の國まで到りまし

野立の姫と身を變じ

再び地上に現はれて

夫婦の水火を合せつつ

仁慈無限の御心に

百の神人救はむと

黄金山下に現はれて

埴安彦や埴安姫の

瑞の命の御經綸

種々雑多と身を變じ

珍の都を後にして

波に浮べる神の島

自轉倒島の中心地

青山四方に繞らせる

下津岩根の靈場に

尊き御姿隠しつつ

此世の曲を拂はむと

百千萬の苦みを

忍び給ひて松の世の

安けき神世を待ち給ふ

桶伏山の蓮華臺

橄欖山になぞらへし

四尾の峰の山麓に

國武彦と身を變じ

言依別と現はれて

綾あやの錦にしきの貴機うづはたを 織おらせ給たまへる時ときもあれ

青雲山せいうんざんより送り來こし 黄金こがねの玉たまを始はじめとし

國くに治立はる大神たちのおほかみの 沓くつになります沖おきの島しま

祕ひめ置おかれたる貴寶うづたから 金剛こんがうふゑ不壞ふゑの如意寶珠にょいほつしゆ

又またもや聖地せいちに現あらはれて 神德しんとく日ひ々びに榮さかえ行ゆく

高春山たかはるやまにアルプスの 教をしへを楯たてに籠こもりたる

鷹依姫たかよりひめが守まもれりし 紫色むらさきいろの寶玉ほうぎやくも

神かみのまにまに集あつまりて 高天原たかあまはらの御寶おんたから

靈力體れいりよくたいの三みつ御靈みたま 此處ここに揃そろひて神界しんかいの

尊たふとき經綸しぐみの開ひらけ口ぐち 天地てんちの神かみも勇いさみ立たち

百千萬ももちよろづの民草たみぐさも 嚴いづの惠めぐみに浴よくしつつ

神かみの立たてたる三五あななひの 教をしへは日ひ々びに榮さかえ行ゆく

錦にしきの宮みやはキラキラと 旭あさひに輝かがやく美うるはしさ

又またも龍宮りうぐうのひと一つ島しま 諏訪すはの湖底みづうち深こく

祕め置かれたる麻邇の玉
玉依姫の計らひに

目出度く聖地に納まりて
神徳輝く四尾の

峰も黄金の色添ひて
機の仕組も明かに

現はれたりと言依別の
瑞の命を始めとし

錦の宮に竝びたる
八尋の殿に集まれる

信徒達も勇み立ち
老若男女の別ちなく

綾の聖地に堵列して
玉を迎ふる勇ましき

あゝ惟神々々
尊き神の御計らひ

麻邇の寶珠は恙なく
清く正しき人々に

前後左右を守られて
八尋の殿に造られし

寶座にこそは入り給ふ
かかる例は久方の

天の岩戸の開けてゆ
今に至るもあら尊と

世界を治むる神國の
瑞兆とこそ知られけり

あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ。

錦にしきの宮みやの神司かむつかき 月日つきひも清きよく玉照彦たまてるひこの

嚴いづの命みことや玉照たまてる姫ひめの 瑞みづの命みことは欣いそいそ々と

お玉たまの方かたに導みちびかれ 八尋やひろの殿とのに出いでまして

梅子うめこの姫ひめや初稚はつわかひめ姫ひめの 貴うづの命みことの一行いっかうが

黄金こがねの島しまより遙々はるはると 麻邇まにの寶珠ほうしゆを奉迎ほうげいし

聖地せいちに送おくり來きたりたる 其功績そのいさをしを賞しやうせむと

聖顔せいがん殊ことに麗うるはしく 所狭ところせき迄まで立たち竝ならぶ

老若らうにやくなん男女にょを搔かき分わけて 一段いちだん高たかき段上だんじやうに

相竝あひならばして立たち給たまふ 其神姿そのみすがたの崇高けだかさよ

三みつの御玉みたまや五いつ御玉みたま 其寶玉そのほうぎよくと相竝あひならび

光爭ひかめらそふ玉照彦たまてるひこの 伊都いづの命みことや玉照たまてる姫ひめの

瑞みづの命みことの神司かむつかき お玉たまの方かたを差さし加くはへ

愈いよ此こ處こに三みつつ御み魂たま 玉たま治はる別わけや玉たま能の姫ひめ

加くはへて此こ處こに五いつ御み魂たま 三さん五ごの月つきの神み教をしへは

世せ界かい限くまなく冴さえ渡わたり 常とこよ世よの暗やみを晴はらすなる

尊たふとき嚴いつの神かむ業わざは 九く月わつ八やう日かの秋あきの空そら

澄すみ渡わたりたる明あきらかさ 手てに取とる如ごとく思おもはれぬ

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら 御み靈たま幸さちはへましまして

經たてと緯よことの機はた織おりの 錦にしきの宮みやの神かむ柱ばしら

玉たま照てる彦ひこの美うるはしく 玉たま照てる姫ひめのいと清きよき

嚴いつの御み靈たまは天あめ地つちに 輝かがき渡わたり紅もみぢ葉ばの

赤あかき心こころは葦あし原はらの 瑞みづほ穂ほの國くにに隈くまもなく

伊い照てり渡わたらす尊たふとさよ 二ふたり人りの玉たま照てる神かむ司かさ

送おくり來きたれる玉たまの輿こし サツと開ひらいて麻ま邇にの玉たま

深ふかく包つつめる柳やなぎ筥ばこ 彌いや次つぎ々つぎに取とり出いだし

言こと依より別わけの玉たまの手てに 渡わたし給たまへば謹つつしみて

いちいちたまばこおくでん
一々玉筥奥殿に 齋かせ給ふ尊さよ

てんちかみ いさ
天地の神は勇み立ち 百の信徒歡ぎ合ひ

みそら たか かぜきよ
御空は高く風清く 人の心は鬢々と

へいわ めがみ こと
平和の女神の如くなり 愈此處に納玉の

しき めで た しゅうれう
式も目出度く終了し 言依別の神言もて

たまてるひこ はじ
玉照彦を始めとし 麻邇の寶珠に仕へたる

かみ つかさ いい さら
神の司は云ふも更 三五教のピュリタンは

おい わか へた
老も若きも隔てなく 男女の差別なく

すめおほかみ そな
皇大神に供へたる 珍の神酒御食美味物

やまぬうみかは とりそろ
山野海河取揃へ 心も開く直會の

うたげ むしんまきは
宴の席賑しく 此瑞祥を祝ぎて

よろこ うた ま をど
歡び歌ひ舞ひ踊り 聖地の秋は天國の

ひら そ こと
開き初めたる如くなり あゝ惟神々々

みたまさち
御靈幸はへましまして 此歡びは永久に

外へはやらじと勇み立ち
金扇銀扇打開き

天の數歌うたひ上げ
金蝶銀蝶の春の野に

戯れ狂ふ其状は
繪にも描かれぬ景色なり。

由良の港の秋山彦の館より、御船に奉安し迎へ來りし、五個の麻邇寶珠は玉照

彦、玉照姫、お玉の方の介添へにて教主に渡し給へば、言依別命は恭しく推戴き、

錦の宮の奥殿に一つつづつ納め給ふ事となつた。それより神饌に供したる山野河海

の美味物を拜戴し、酒肴其他種々の馳走をこしらへ、一同之を頂き十二分の歡喜

を盡し、大神の御神徳を讚美しながら、各吾住家に引返すのであつた。

(大正一一・七・一九 舊閏五・二五 谷村眞友録)

第四篇

波瀾重疊

第一三章 三つ巴〔七七八〕

炎熱火房に坐す如く

恰も釜中に居る如し

酷暑の空に瑞月が

身を横たへて述べ立つる

廻すハンドル力なく

半破れしレコードも

針の疲れにキシキシと

鳴り出で兼ねしかすり聲

妙音菩薩の〔山上〕氏

傍に現はれまませど

泣き噎したる時鳥

八千八聲も盡き果てて

唇〔加藤〕〔明〕きかぬる

珍の言靈〔松村〕氏の

〔眞澄〕の空を眺めつつ

此處迄述べて〔北村〕の

錦の宮の〔隆光〕る

三五の月の神教を

守る神人言依別の

瑞の命を始めとし

玉照彦や玉照姫の

瑞の命の聖顔は

【外山】の霞搔き分けて 【豊二】昇る朝日子の

日の出神の如くなり 五六七太夫の【谷村】氏

【眞】の【友】と水火合せ 汗に眼鏡を曇らせつ

萬年筆と口の先の 素的滅法に尖らせて

松雲閣の中の間に 鼻高姫や黒姫が

御玉探しの大騒ぎ 神素盞鳴大神が

帯ばせ給ひし御佩刀の 三段に折りし誓約より

現はれませる三女神 市杵島姫、多紀理姫

多岐都の姫を祀りたる 御稜威輝く竹生島

社殿の下に瑞寶の 匿されありと國依別の

俄天狗にそそられて 此處に三人の玉抜けや

ヤツサモツサの經緯を 筆に寫して止め置く

あゝ惟神々々 御靈幸はへまませよ。

あななひけつ
三五教の宣傳使

へんじやうなんし
變性男子の系統を

ゆゑいつ
唯一の楯と頼みたる

ひ
日の出神の肉の宮

うそ
嘘か真か知らねども

てんぐ
天狗の鼻の高姫が

たふと
尊き御魂を持ちながら

かんじんかなめ
肝腎要の神業に

と
取り除かれし妬ましさ

ことよりわけ
言依別が匿したる

たま
玉の在處を何處迄も

たとへひ
假令火になり蛇になり

ほね
骨になるとも執拗に

さぐ
探り當てねば置かないと

しふちやくしん
執着心の鬼大蛇

しこ
醜の曲津に誘はれて

おのころじま
自轉倒島は云ふも更

あかし
明石の海や淡路島

えじま
家島を越えて小豆島

はたう
波濤に浮ぶ南洋の

そてつ
蘇鐵の茂る大島や

かほ
バナ、の薰り香ばしき

なんやういち
南洋一のアンボイナ

たにみづ
谷水清く苔青く

龍宮島と聞えたる
これの聖地を後にして

流れ流れて一つ島
黄金の島に上陸し

地恩の城に現はれて
黄龍姫に玉抜かれ

流石剛氣の高姫も
胸轟かし黒姫や

高山彦を伴ひて
潮の八百路の八潮路の

潮の八百會漕ぎ歸り
淡路の島の東助が

鐵門を守る虻蜂に
鼻を折られて再度の

山を目蒐けて漕ぎ歸り
生田の森に名も高き

玉能の姫の神館
執念深くも訪ぬれば

國依別や秋、駒の
思ひも寄らぬ三人連れ

やつさもつさと爭論ひ
揚句の果は竹生島

憑依もしない天狗の口に
鼻高姫は勇み立ち

今度は願望成就と
館の裏口走りぬけ

闇に紛れて細道を
進み行くこそ可憐らしき

上野、篠原乗り越えて
秋の御空も住吉の

郷に漸く辿り着き
東の空を眺むれば

金剛不壊の如意寶珠
光争ふ朝日子の

日の出神の御姿
両手を合せ伏し拜み

中野の郷もいつしかに
葭と蘆屋の忙しく

運ぶ歩みも立花や
小田郷、柴島、淀の川

漸く道も枚方や
いつしか廻り大塚の

此坂道も高槻や
山崎越えて美豆の郷

河の流れも淀の町
銀波漂ふ巨椋池

宇治の流れに下り立ちて
飲み干す水は醍醐味や

小山、大谷早越えて
逢坂山の眞葛

人に知らされ来る由も
嬉しき玉を三井の寺

ミロクの神世に大津邊の
幾多の船の其中に

殊更堅固な船を選び
高姫艫をば操りて

心こころは後あとに沖おきの島しま 波なみをすべにつて進すすみ行ゆく

向むかふに見みゆるは竹ちく生ぶ島じま 月つき西せい山ざんに傾かたむきて

闇やみの帳とばりは水みづの面おも 四あ邊たりを包つつむ大おほ空ぞらに

閃ひらめき渡わたる星ほしの影かげ 船ふね漕こぎ浪なみを碎くだきつ

淺あさぎ黄ぎに星ほしの紋もんつた 黒くろい婆ばさまがやつて來く

又またもや續つづいて來くる船ふねは 頭あたまの光ひかる福げ祿ぼく壽じうさま

辨べん天てんさまの此この島しまに 女をんな布なほ袋ほていや大だい黒こくが

黄こが金ねの槌つちはなけれども 土つちの中なかより瑞ずい寶ほうを

探さぐり當あてむと執しつ着ちやくの 心こころの暗やみに塞とぎされて

星ほしかげ映うつる湖うみの上うへ 互たがひに息いきを凝こらしつ

進すすみ寄よるこそ訝いぶかしき。

傳つたへらる。併しかし乍ながら此この湖こ中ちゆうに浮うかべる竹ちく生ぶ島しまに、神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみの佩はかせ給たまひし十とつ握つか

近あ江ふみの國くにの琵琶びはの湖こ水すいは、其その形かたち樂がく器きの琵琶びはに似にたるをもつて、此この名なありと巷こう間かん

の劍を、天の安河に於て誓約し給ひし時、瑞の御靈の表徴として、温順貞淑の譽
高き三女神現はれ給ひ、此處に其御靈を止めさせられ、時々龍神來りて、姫神の
御心を慰め奉るため、琵琶を弾じたるより琵琶の湖と稱ふるに至つたのである。
又名天の眞奈井とも言靈學者は稱へて居る。今の竹生島は湖水の極北にあれど
も、此時代は湖水の殆ど中央に松の島、竹の島、梅の島の三島嶼相浮び三つ巴と
なつて其雄姿を紺碧の波上に浮べて居たのである。松の島には多紀理姫神鎮座在
まし、竹の島には市杵島姫神鎮まり給ひ、梅の島には多岐都姫神鎮まらせ給ひ、
各島各百間許りの位置を保つて行儀よく配列されてあつた。高姫は先ず竹の島の
市杵島姫を祀りたる社を指して漕ぎつけた。
黒姫、高山彦も期せずして闇夜の悲しさ、同じ竹の島に船を寄せ、同じ社の床
下に玉探しの爲め頭を集めた。

神素盞鳴の貴の子と 生れ給ひし英子姫

萬世祝ふ龜彦は 神素盞鳴大神の

嚴いづの神業かむわざ詳細まつぶさに 遂とげさせ給たまへと朝夕あさゆふに

天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし 天あまの數歌かずうた潔きよく

一二三四五いふたみいよいつむつ六むつ 七なな八やつ九このつ十とうたたり

百千ももちよろ萬つと村肝むらきもの 心こころを籠こめて祈いのる折をり

磯いその彼方かなたに船ふね繫つなぎ しとしと來きたる黒くろい影かげ

氣きにも止とめずに一向ひたすらに 祈いのる最中もなかに神かみの前まへ

忽たちまち現あらはれ額ぬかづきて 天津祝詞あまつのりとを奏のり上あぐる

暗やみに確しかとは分わからねど 皸しわが唄うたれ聲こゑは高たか姫ひめか

執しつちやくしん着やく心しんに搦からまれて 當所あてども知しらぬ玉たま探さがし

見みるも無む殘ざんと英子ひでこ姫ひめ そつと此場このばを立たち出いでて

己おのが館やかたに静しづ々と 星ほしの光ひかりを力ちからとし

闇路やみぢを分わけて島影しまかげの 清きよき館やかたに歸かへりけり

後あとに龜彦かめひこ唯ただ一人ひとり 聲こゑを密ひそめて御扉みとびらを

そつと開ひらいて中なかに入いり 様子やうす如何いかにと窺うかがへば

神ならぬ身の高姫は

社の中に人ありと

知らぬが佛一心に

無事の安着感謝しつ

拍手の音も湿やかに

金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の

珍の寶珠を高姫の

兩手に授け給へよと

聲を震はせ祈り居る

暫くありて高姫は

珍の社の床下に

鼠の如く這ひ寄つて

黑白も分かぬ闇の中

小聲に神名唱へつつ

探り居るこそ可笑しけれ

又もや近づく足音は

社の前に手を拍つて

心の祕密を語りつつ

暗祈黙禱稍暫し

心いそいそ御社の

四邊を密かに窺ひつ

土龍の如く床下に

又もや姿を匿しける

月の光は無けれども

星の光に照らされて

長い頭の唯一つ

闇を掻き別け進み來る

入日の影か竿竹か
見越入道の大男

又もや社前に手を拍つて
感謝の聲も口の中

何か細々願ぎ終へて
忽ち社殿の床の下

長き頭を匿しける
あゝ惟神々々

迷ふ身魂の三つ巴
誠の仕組も白浪の

沖に浮べる神島に
胸に荒波打たせつつ

心の鬼に爪立てて
無暗矢鱈に掻き廻し

汗をたらたら三人が
時々頭を衝突し

ピカリピカリと火を出して
四邊の闇を照らせども

心の闇は晴れやらず
互に顔を不知火の

心碎くる思ひなり
高姫心に思ふやう

國依別の云うたには
言依別のハイカラが

二人の使を遣はして
肝腎要の神寶を

掘り出させてうまうまと
再びどこかに埋め置き

初稚姫や玉能姫

可愛や二人に鼻明かせ

折角立てた功績を

オジヤンにしようとの悪戯か

憎さも悪い言依別の

醜の命のドハイカラ

初稚姫や玉能姫

思へば思へばお氣の毒

吾子の功績を鼻にかけ

高天原に参上り

總務々と敬はれ

威張つて御座つた空助も

今度はアフォンと口あけて

吠面かわくも目のあたり

嗚呼面白い面白い

さはさりながら何者か

此場に二人もやつて来て

玉を掘り出し歸らうと

一生懸命探し居る

何處の奴かは知らねども

愈玉の出た時は

變性男子の系統や

日の出神を楯に取り

此高姫が恙なく

大きな顔で受け取らう

それにつけても黒姫や

高山彦は今何處

黄金の玉や紫の

寶はもはや分りしか

心もとなき吾思ひ

假令小爪は抜けるとも

金輪奈落土の底

土龍蚯蚓にあらねども

土搔き分けて探し出し

吾手に取らねば措くものか

あゝ惟神々々

叶はぬ時の神頼み

南洋諸島へ遙々と

危険を冒して玉探し

往た事思へば一丈や

二丈三丈掘つたとて

何の手閒暇要るものか

國依別の云うたには

三角石を取り除けて

下三尺の深さぞと

天狗に急かれて已むを得ず

白状致した面白さ

天狗の申した其如く

三角形の石はある

早三尺も掘り終へて

もはや四五尺掘りぬいた

されども玉は現はれぬ

是はてつきり三丈の

深さのきつと間違ひだ

三丈四丈はまだ愚

假令地獄の底迄も

掘つて掘つて掘り抜いて 探し當てねば措くものか

苦勞と苦勞の塊で 尊い花の咲くと云ふ

神の教を聞くからは 假令百年かかるとも

掘らねば措かぬ吾心 女の誠の一心は

岩をも射貫くためしあり きつと掘り出し見せてやる

目出度く玉が手に入らば 意氣揚々と立ち歸り

言依別を始めとし 空助お初やお節等の

顔の色迄變へさせて 改心さして救はねば

日の出神の生宮の どうして顔が立つものか

あゝ惟神々々 御靈幸はへましますよ。

と心の底に迷ひの雲を起しながら、一生懸命汗を流して火鼠か土龍のやうに砂混りの土を掻き上げて居る。

黒姫心くろひめこころに思おもふやう

再度山ふたたびやまの大天狗だいてんぐ

國依別くによりわけの口借くちかつて

黄金こがねの玉たまの匿かくし場所ばしよ

近江あふみの國くにの竹生島ちくぶじま

辨天社べんてんやしろの床下ゆかしたと

確たしかに確たしかに云いひよつた

國依別くによりわけが云いふのなら

些すこしは疑うたがふ餘地よちもある

天狗てんぐは心潔白こころけつぱくで

些ちつとも嘘うそは云いはぬもの

間違まちがふ氣遣きづかひあるものか

天狗てんぐの仰あふせの其その如ごとく

言依別ことよりわけのハイカラが

あらぬ智慧ちゑをば絞しぼり出だし

此處ここに匿かくして置おきながら

高姫たかひめさまや黒姫くろひめの

晝夜不斷ちうやふだんの活動くわつどうに

肝きもを潰つぶして狼狽らうばいし

見付みけられない其その中うちに

外ほかへこつそり匿かくさうと

猿智慧ざるちゑ絞しぼつて態人わざびとを

一足先ひとあしに此島このしまへ

掘ほらしに來こしたに違ちがひない

あの熱心ねつしんな探さがしやう

如何いかに剛氣がうきな黒姫くろひめも

呆あきれて物ものが云いはれない

寶探たからさがしの神業かむわざは

唯ただ一言ひとことも言こと靈たまを 使つかつちやならない神かみの告つけ

迂闊うつかり言葉ことばを出だすならば 折角せつかく見みつけた寶玉ほうぎよくも

煙けむりとなつて消きえ失うせむ 噫くしや一つ息いき一つ

ほんに碌ろくろく々で出來きはせぬ 苦くるしい時ときの神かみ頼だみ

祝詞のりとを唱となへて神かみ様さまに お願ねがひする事ことは知しつて居ゐる

云いふに云いはれぬ玉たま探さがし こんな苦くるしい事ことあらうか

言こと依より別わけの使つか等ひらが 黄金こがねの玉たまを發はつ見けんし

持もち歸かへらうとした所ところで 龍宮りうぐうに在ます乙姫おとひめの

鎮しづまりいます肉にくの宮みや 千騎せんき一騎いつきの此この場ばあ合ひ

黒姫くろひめ中々なかなか承知しょうちせぬ 假令たとへ地獄ぢごくの底そこまでも

掘ほつて掘ほつて掘ほつて掘ほり抜ぬいて 光ひか眩くらき金きん玉ぎよくを

再ふたび吾手わがてに納をさめつつ 綾あやの聖地せいちに持もち歸かへり

言こと依より別わけや空助もくすけを アフンとさせてやりませう

あゝ惟かむ神な々々なら 叶かなはぬ時ときの神かみ頼だみ

頼りもならぬ口無しくちなの 息をつまへるい鴛鴦をしどりの

番離れぬハズバンド 高山彦は今何處たかやまひこ いまいづこ

紫色の寶玉は 何處の島いづこ しまか知らねども

もはや手に入れ給ひしか 高姫たかひめさまは今何處いまいづこ

金剛不壞の如意寶珠 首尾しゆびよく御手おんてに返りかへしか

あちらこちらと氣が揉める あゝかむながらかむながら惟神々々

叶はぬ迄も探し出し 初心しよしんを貫徹くわんてつせにやおかぬ

苦勞と苦勞の塊かたまりの 花はなの咲くのはこんな時とき

又と出て來ぬ此時節 琵琶びはの湖水こすゐは深くとも

闇の帳は厚くとも 三五あななひけう教かむづかさの神司

高山彦や黒姫くろひめが 言依別ことよりわけに着きせられた

恥はぢの衣ころもを脱ぎ捨てて 神國魂みくにたましひをどこ迄までも

見せねばならぬ此立場 何處どこの奴やつかは知らねども

高山たかやまさまに好よく似にたる 茶瓶頭ちやびんあたまがやつて來きて

又もや がさがさ探し出す 欲と欲のかちあひで
玉の詮議に頭うち 火花を散らす苦しさよ
假令天地が覆るとも 黄金の玉は何處迄も
探し當てねば措くものか 岩をも射貫く一心は
女たる身の天性だ あゝ惟神々々
御靈幸倍ましましてよ。

とひそかに思ひ、ひそかに念じながら、汗をたらたら搾り出し、一生懸命に砂を
掻き上げて居る。

高山彦は訝かりつ 心の中に思ふやう
再度山の犬天狗 國依別の口借つて
竹生の島の神社 其床下に三角の

石を蓋せて紫の 寶玉深く荒金の

土中に埋没せしと聞く 三角石は此處にある

さはさりながら訝かしや 言依別の使とも

思へぬ節が一つある 闇の帳は下されて

さだかにそれとは分らねど 體の恰好動きやう

頭をぶりぶり振る所 高姫さまや黒姫に

どこやら似て居る氣配ぢやぞ 天狗は至つて正直と

昔の人も云うて居る 滅多に嘘は申すまい

高姫さまや黒姫に よく似た者は世の中に

一人や二人はあるだらう 何を云うても鴛鴦の

名乗もならぬ玉探し 實際俺は言依別の

神の命が神界の 仕組によりて匿されし

寶の在處を探そとは 夢にも思つた事はない

さはさりながら高姫や 黒姫までが焦ら立つて

玉よ玉よとやかましく
騒ぎ廻るが煩さに

己も何とか工夫して
玉の在處を探し出し

二人の婆に執着の
雲を晴らさしやらうかと

牛に牽かれて善光寺
心ならずも龍宮の

一つ島迄驅廻り
地恩の城にブランヂー

クロンバー迄も勤めつつ
數多の國人使役して

玉の在處を探したが
これ程廣い世の中を

土中に深く隠されし
玉の分らう筈がない

高山彦も今日限り
此處で失敗したならば

これきり思ひ切りませう
日の出神や龍宮の

乙姫さまかは知らねども
俺にはチツと腑に落ちぬ

眞日の出神なれば
玉の在處は何處其處と

ハツキリ知らして呉れるだらう
龍宮の乙姫さまならば

猶更玉の匿し場所
知らない道理がどこにある

同じ名のつく神様も
澤山あると見えるわい

高姫さまや黒姫に
憑つて御座る神さまは

神力足らぬ厄雑神
それでなければどうしても

俺の心にはまらない
六十路の坂を見ながらも

五十女に操られ
玉を探しに何處迄も

往かねばならぬか情ない
あゝ惟神々々

叶ひませぬから高姫や
黒姫二人の執着を

科戸の風に吹き拂ひ
生れ赤子に立てかへて

何卒助けて下しやんせ
竹生の島の御神に

心を籠めて願ぎまつる
あゝ惟神々々

御靈幸はへましてよ。

と心の中に呟きながら、高姫、黒姫の改心を専一と祈願し、紫の玉は殆ど念頭に置かぬものの如くであつた。

(大正一一・七・一九 舊閨五・二五 加藤明子録)

第一四章 大變歌〔七七九〕

折をりから吹ふき來くる夜嵐よあらしに
湖こすゐ水の面おもは波なみ高たかく
島しまの老木おいきの根本ねもとより
吹ふきも倒たふさむ勢いきほひに
神かむさび建たてる神かむやしろ社
風かぜにゆられてギクギクと
怪あやしき音おとを立たて初そめぬ
これ幸さいはひと龜彦かめひこは
社やしろの扉とびらを打うち開ひらき
そろそろ階段かいだん下くだり來きて
玉たまに魂たまをばぬかれたる
三みつ巴どもゑの玉奴たまやつこ
身しんべん邊ちか近すすく進よみ寄より
白びやくえ衣えの着き物ものを頭あたまより
フワリと被かぶり吹ふく風かぜに
長ながき袖そでをばなぶらせつ

聲も女神の淑かに 宣り出せるぞ面白き

天教山に現はれし われは木花姫神

その御心を汲みとりて 汝等三人の迷人に

玉の在處を説き示す あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして 三五教やバラモンの

どちらか知らぬが宣傳使 三人ここに現はれて

憑依もせない天狗の 宣示を誠と思ひつめ

長途の旅をエチエチと 暗かき分けて波の上

三つの御靈の鎮まれる 竹生の島に漕ぎつけて

隠してもない神寶を 下らぬ意地に絡まれて

探しに来る愚さよ 鼻高姫や村肝の

心の暗の黒姫や 頭の光る福祿壽面

揃ひも揃うた大馬鹿の 社殿の下の玉探し

たとへ百丈掘つたとて 金輪奈落その玉は

出て来る氣づかひあるまいぞ 日の出神や龍宮の

乙姫さまの生宮と 威張つて居たが何の態

女神の癖に荒い事 吐くと思ふか知らねども

決して女神が云ふでない 三人の心に憑りたる

副守の鬼が吐くのだ 要らぬ苦勞をするよりも

吾身の行ひ省みて 玉の詮索思ひ切り

一日も早く大神の 誠の道を世の中に

懺悔さらして仕へ行け 先に來たのは高姫ぢや

次に出て來た黒姫が 言依別の遣はせし

玉掘神と誤解して 吾劣らじと暗雲で

指の先まですりむきつ オチヨボのやうに砂を掘り

いよいよ味噌を摺鉢の 糠喜びの砂煙

何時迄お前が掘つたとて 隠してないもな出ては來ぬ

高山彦のハズバンド 婆さまのお尻をつけ狙ひ

六十面ろくじふづらを下さげながら
ようも天狗てんぐに欺だまされた

あゝ惟かむながらかむながら神々々
譯わけの解わからぬ奴やつばかり

こんなお方かたが三五あななひの
教をしへの幹部かんぶに坐すわるなら

それこそ勿たちまち聖場せいぢやうは
地異ちい天變てんべんの大騒動おほさうだう

龜彦かめひこドッコイ龜かめの背せに
乗のつて波間なみまに浮うかび來くる

木花姫このはなひめの御心みこころを
承うけたまはりて現あらはれた

玉たまの在處ありかを守り居ゐる
わしは誠まことの女神めがみぞや

三みつつの玉たまは神界しんがいの
御經綸おしぐみなれば高姫たかひめが

何程なにほど日の出神でのかみぢやとて
現あらはれ來きたる筈はずはない

そんな謀反むほんは諦あきらめて
一時いちじも早はやく三五あななひの

綾あやの聖地せいちに立歸たちかへり
神かみに御詫おわびをするがよい

九月くぐわつ八日やうかの秋あきの空そら
黄金花こがねはな咲さく龍宮りうぐうの

一つひと島じまなる諏訪すはの湖うみ
玉依姫たまよりひめの御寶おんたから

天火水地てんくわすみちと結むすびたる
麻邇まにの寶珠ほつしゆは由良港ゆらみなと

秋山彦の庭先にあきやまひこにはさき 鳩の如くに下りましはとのごとくだ
 言依別を始めとしことよりわけはじ 梅子の姫や五十子姫うめこのひめいそこひめ
 お前の嫌ひな玉能姫まへのきらたまのひめ 初稚姫も諸共にはつわかひめもるとも
 神輿に乗せて悠々とみこしののいういう 由良の川瀬を遡りゆらのかはせさかのぼ
 嬉しき便りを菊の月うれしきたよきくつき 今日けふは九日四尾のこのかよつをう
 山の麓の八尋殿やまのふもとやひろどの たしかに納まる日なるぞやをさひ
 お前もグツグツして居るとまへ 後の祭の十日菊あとまつりとをかぎく
 恥の上塗りせにやならぬはぢうはぬ 生田の森の館からいくたもりやかた
 直様聖地に歸りなばすぐさませいちかへ 前代未聞の盛典にぜんだいみもんせいてん
 首尾よく列して五色のしゆびれついついろ 麻邇の寶珠を拜觀しまにほつしゆはいくわん
 尊き神業の末端にたふとみわざはしくれ 奉仕出来たであらうのにほうしでき
 執着心に煽られてしふちやくしんあふ 憑依もせない天狗にひょうい たかがみ
 だまされぬいて遙々とだまされぬいてはるばる 探ねて来る盲神たづねてきためくらがみ
 氣の毒なりける次第なりきどくしだい あゝ惟神々々かむながらかむながら

それが叶はぬと思ふなら 一時も早く立歸れ

玉守姫が親切で 一寸誠を明し置く

そろそろ風も強なつた 嵐に吹かれて何時迄も

ここに居つては堪らない ウントコドツコイ高姫さま

ヤットコドツコイ黒姫さま 高山彦の福祿壽さま

そんならお暇申します ドツコイシヨのドツコイシヨ

ウントコドツコイドツコイシヨ ヤットコセイのヨイヤナ

アレはのせーコレはのせー ヤットコドツコイ玉探せ。

と歌ひ了り、暗に紛れてクツクツ噴出しながら英子姫の館を指して歸り行く。

ここに三人の玉探し 無言のまま一心に

汗をタラタラ流しつつ 側目もふらず土掘りの

眞最中に龜彦が 俄に女神の作り聲
 高姫、黒姫、高山彦の 福祿壽頭の三人と
 圖星を指されて高姫は ハツと驚き立上り
 よくよく見れば黒姫や 高山彦の二人連れ
 ア、残念や口惜しや 國依別の極道奴
 日の出神や高姫や 龍宮さまの生宮を
 マンマとよくも騙したな 馬鹿にするのも程がある
 十里二十里三十里 痛い足をば引ずつて
 いよいよ今度は如意寶珠 その外二つの寶をも
 うまく手に入れ年來の 願望成就と思ひきや
 又だまされて玉探し わしより若い奴輩に
 馬鹿にいられて口惜しい 黒姫さまもこれからは
 チツとしつかりするがよい 高山彦も餘りぢや
 朝から晩までニヤニヤと 黒姫さまの面計り

眺めて居るからこんな事
流石に尊い龍宮の

乙姫さまも腹を立て
遠くの昔に魂ぬけの

あとは盲の守護神
今までお前を生宮と

思うて居たのが情無い
思へば思へば腹が立つ

それぢやに依つて初から
神の誠の御道は

夫婦あつては勤まらぬ
わしがあれ程言うたのに

馬耳東風と聞き流し
肝腎要の龍宮の

乙姫さまにぬけられて
その面付は何の事

暗夜でお面は分らねど
定めて夜食に外れたる

梟のやうな面付で
アフィンとしてるに違ひない

私も愛想がつきました
何程日の出神ぢやとて

こんな分らぬ守護神
憑いた御身を伴にして

どうして神業が勤まらう
チツとは改心なされませ

性懲もなく又しても
油揚鳶にさらはれた

高山彦の親爺さま

六日の菖蒲十日菊

きくさへ胸が悪くなる

再度山の犬

身魂の曇つた國公に

サツと憑つて世迷言

吐いた言葉を眞にうけて

ここ迄來たのは情無や

あゝ惟神々々

神の御都合と諦めて

これから大きな面をして

正々堂々陣を張り

言依別のハイカラに

恨みを晴らす逆理屈

御二人しつかりしなされよ

神の教を次にして

親爺の事や女房の

身の上計り氣にかけて

現を吐すと此通り

これこそ神の御戒め

これで改心なさつたか

思へば思へば馬鹿らしい

お前のやうな没分曉漢

黄金の玉を盗まれて

在處探ねてはるばると

龍宮島に二三年

留まりながら何の態

お前の歸つたその後で

初稚姫はつわかひめや玉能姫たまのひめ
玉治別たまはるわけや友彦ともひこに

又もまたや麻邇まにの如意寶珠にょいほうしゆ
尊たふとい御用ごようを占領せんりやうされ

天地てんちの神かみの御前おんまへに
何どうして顔かほが立たちますか

胸むねに手てを當あてつくづく
考かんがへなさるがよからうぞ

何程なにほど泣ないて悔くやんでも
もう斯かうなれば是非ぜひは無ない

サアサア皆みなさま歸かへりませう
一いち度どに開ひらく梅うめの花はな

開ひらいて散ちりて實みを結むすぶ
平助へいすけお櫛ならの兩りやうにん人が

腹はらから生うまれたお節せつ等に
馬鹿ばかにしられて堪たまらうか

高姫たかひめぢやとて骨ほねがある
お前まへのやうなグニヤグニヤの

蒟蒻腰こんやくこしでは無ない程ほどに
見違みちがひなさるな高姫たかひめが

岩いはより堅かたい大和魂やまとたま
日ひの出神でのかみの生宮いきみやに

お前まへのやうな盲神めくらがみ
何どうしてついで來きたである

うまい果實このみにや蟲むしがつく
賢かしこい人ひとには魔まが來きたる

お前まへの忠告ちうこく眞まに受うけて
今迄いままで出でて來きた高姫たかひめも

餘り偉そにや言はれねど 大將は素より看板ぢや

側に付添ふ副柱 こいつに力の無い時は

何程偉い生宮も 策を施す餘地がない

持つべきものは家來ぢやが 持つて困るは馬鹿家來

こんな事なら初からお前を使ふぢや無かつたに

悔みて返らぬ今日の首尾 諦めようより仕様が無い

あゝ惟神々々 御靈幸はへましませよ。

と、流石の高姫も焼糞になつて、黒姫、高山彦に八當りの歌をうたひ、胸の焔を消さむとして居る。

星の明りに黒姫は 高慢強き高姫の

歌を聞くより腹を立て 暗をすかして眺むれば

前齒まへばのぬけた膨ふくれ面づら
汗あせをブルブルかきながら

蟹かにの様やうなる泡あわを吹ふき
眼めを怒いからして睨にらみ居ゐる

黒姫くろひめ見るより腹はらを立て
こちらこちらも劣おとらぬムツと顔がほ

聲こゑの色いろまで尖とがらして
日ひの出神でのかみの生宮いきみやと

當あてすつぼうな名なをとなへ
世界せかいが見みえ透すく見え透すくと

何時いつも仰おつしや有あるその癖くせに
たかの知しれたる再ふたたび度の

山やまに隠かくれた野天狗のてんぐに
うまく騙だまされ泡あわを吹ふき

何程なにほど腹はらが立たつたとて
私わたしに當あたるといふ事ことは

お前まへさまそれはチト無む理りぢや
口くちに税ぜいきん金い要いらぬとて

業ごう託たく言いふにも程ほどがある
私わたしも女をんなの端はしくれぢや

日ひの出神でのかみの生宮いきみやが
高姫たかひめさまなら黒姫くろひめは

矢張やっばり龍宮りゅうぐうの乙姫おとひめぢや
日ひの出神でのかみと引ひっ添そうて

龍宮りゅうぐうさまの御手傳おてつたひ
これこれで無なければ神界しんがいの

經綸しぐみは成就じやうじゆせぬぢや無ないか
あなたは何時いつも言いうただる

その言靈を夢の如
ケロリと忘れて黒姫に

熱を吹くとは餘りぢや
私もチツトは腹が立つ

私丈なら何うなりと
悔しい残念堪らうが

二世を契つたハズバンド
高山さままで引出して

悪口言ふとは蟲がよい
神のお道を世の中に

傳へて歩く高姫の
仰有る事とは受取れぬ

眞の日の出神さまは
餘り偉い慢神に

愛想をつかして御歸りの
あとに曲津が巢をくみて

お前の御口を自由にし
そんな悪口吐くのだろ

油斷も隙も無い御道
一寸慢神するや否

八岐の大蛇の醜魂に
のり憑られて眼はくらみ

魂は捻けて此の通り
國依別や秋彦の

身體に憑つた野天狗に
チヨロマカされてはるばると

夜を日についで三十里
琵琶の湖までやつて来て

よるへなきさ
寄邊渚の離れ島 隠してもない玉探し

お腹が立つのは尤もぢや さはさりながらお前さま

胸に手をあてトツクリと 考へなさが宜しかる

眞の日の出神ならば 玉の在處は居ながらに

判然分らにやなるまいに 海洋萬里の島々を

うるつき廻る玉探し それから可笑しと思て居た

何うしても斯うしても腑に落ちぬ 口先ばかり偉さうに

頬桁叩く【やくざ】神 早く歸すがよいわいな

これから心改めて 三五教の神司

言依別の命令に ハイハイハイと箱根山

瘦馬追うて登る様に 神妙に御用を聞きなされ

私はこれで三五の 神の御道は止めまする

聖地へ歸つて人々に 何うして面が合はされよう

鐵面皮なる黒姫も 今度計りは何うしても

面向け致す術が無い
變性男子の筆先に
慢神致すと面の皮
引きめくられて家の外
歩けぬやうに成り果てて
頭抱へて奥の間に
潛みて居らねばならないと
御示しなさつてあるものを
日の出神の生宮を
無性矢鱈に振り廻し
せつぱつまつた今日の空
思へば思へば御氣の毒
私は同情いたします
これから聖地へ立歸り
心の底から改めて
今迄とつたる横柄な
態度をすつかり止めにして
小猫のやうになりなされ
仁慈無限の神様の
尊き試練に遇ひました
あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ
叶はぬから歸りませう。

高山彦はムツとして 薬罐頭に湯氣を立て

ドス聲頻りに張りあげて 高姫さまよ黒姫よ

日の出神や龍宮の 乙姫さまを楯にとり

一丈二尺の禪を 締めた男を馬鹿にした

俺は元からお前等の 言うとる事が怪しいと

思うて居たがまさかにも こんな馬鹿とは知らなんだ

男の顔に泥を塗り 返しのつかぬ恥かかせ

日の出神もあるものか 尻が呆れて屁も出でぬ

お前の様な年寄を 女房に持つのは厭なれど

尊い龍宮の乙姫が 肉の宮ぢやと聞いた故

高姫さまの媒介で 波斯の國から遙々と

天の鳥船空高く 乗つて来たのは馬鹿らしい

白い頭に黒い汁 コテコテ塗つて誤魔化して

枯木に花の咲きほこり こんな事だと知つたなら

お前まへと添そふのぢや無なかつたに 日ひの出で神かみも龍宮りゅうぐうの

乙姫おとひめさまも此頃このころは ねつから當あてにはならないぞ

執着しふちやくしん心にそそられて 國々くにぐにしましま島々しましまかけめぐり

玉たまの在處あrikaを探さがし行く 二人ふたりの婆ばばの馬鹿ばか加減かかげん

俺おれは愛想あいそが盡つきたぞよ 國依くにより別わけや秋彦あきひこの

若い男わかをとこの憑靈ひようれいに 眉毛まゆげをよまれてこんな態さま

どうして聖地せいちへ歸かへられうか 女子供をんなこどもに到いたる迄まで

俺おれの顔見かほみりや馬鹿ばかにする かうなり行くも高姫たかひめや

黒姫くろひめ二人ふたりの爲なす業わざぞ あゝ惟かむながらかむながら神々かみかみ

玉たまの詮議せんぎは今日けふ限り すつぱり思おもひ諦あきらめて

誠心まことこころに立歸たちかへり 三五あななひけう教かむつかさの神司かむつかさ

玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの 貴うづの命みことの神人しんじんが

御言みことかしこ畏かしこみよく仕つかへ 必かならず自じ我がを出だすでない

高山彦たかやまひこが兩人りやうにんに 眞心まじこころこめて氣きを付つける

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神のまします此島にこのしま

何時迄居つても仕様がしやうない 恥をはぢばしのび面被りめんかぶ

兔も角聖地へ立歸りたちかへ 心の底からそこ今迄のいままで

誤解慢神ごかいまんしん悉く 神の御前にかみ みまへ御詫しておわび

赤恥あかはぢさらせばせめてもの 罪滅つみほろぼしとなるである

それが嫌いやなら高姫もたかひめ 女房の黒姫今日限りにようぼう ぐろひめ けふかぎ

三行半の離縁状みくだりはん りえんじやう すつぱり書いて渡さうかか わた

今迄男を馬鹿にしたいままでをとこ 天罰忽ち報てんぱつたちま むくい來てき

こんな憂目うきめに遇うたのだ 改心かいしんするのは結構だけつこう

高天原の門開きたかあまはら もんびら 慢心まんしんすると此通りこのとほ

世間の人に顔向けせけん ひと かほむの ならない様な事ことが來るく

今日からサツパリ心けふ こころをば 洗あらひ直なほして惟神かむながら

【うぶ】の心こころになるがよい サアサア歸いのうサア歸いのう

吹き來る風ふく かぜは強つよくとも 高波たかなみ如何いかに猛たけぶとも

仁慈無限の大神の
大御守を力とし
杖と頼みて歸らうぞ
あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ。

(大正一一・七・一九 舊閨五・二五 外山豊二録)

第一五章 諭詩の歌(七八〇)

高姫、黒姫兩人は
高山彦と諸共に
神の社を伏し拜み
顔赭らめてスゴスゴと
乗り來し船を繋ぎたる
磯邊に行きて眺むれば
東の空は茜して
浪に閃めく美はしさ

湖水の底に潛みたる

龍神様の爲す業か

水莖文字の此處彼處

アオウエイ カコクケキ

サソスセシと現はれぬ

三人は船に飛び乗りて

艚櫂を操りシツシツと

浪に浮んで歸り來る

湖水は二つに立別れ

現はれ出でし大龍の

姿は殊に嚴めしく

黄金の鱗に太刀の膚

雲を起して大空に

忽ち昇る凄じさ

三人は空を打ち仰ぎ

眺むる間に大龍の

姿は直に雲と消え

涼しき風の共響き

幽遠微妙の音楽は

何處ともなく聞え來る

四邊は忽ち芳香に

包まれ心は清々と

甦りたる思ひして

船を進むる折柄に

ヒラリヒラリと蓮花

雪の如くに降り來り

三人が船に堆高く

積り積ると見る間に

蓮はちすの花はなは何い時つしかに
姿すがた變へんじて美うるはしき

平へい和わの女め神がみとなり了をへぬ
三み人たりはここに合がつし掌やうし

欣こん求ぐ淨じやう土との彌み陀だ如に來らい
彌み勒ろく菩ぼ薩さつの來らい迎がうか

木この花はな姫ひめの出しゆつ現げんか
但ただしは龍りう宮ぐうの乙おと姫ひめか

崇けだ高か姿すがたと村むら肝きもの
心こころの底そこより恭きよう敬けいし

思おもはず頭かづへを下さげつれば
女めがみ神かみは言こと葉は淑しとやかに

三み人たりに向むかつてささやさやと
神みのり勅つたを傳たまへ給たまひけり。

天てん教けう山ざんに永とこ久しへに
千ち木ぎ高たか知しりて鎮しづまれる

我われは木この花はな姫ひめ神かみ
汝なんぢは高たか姫ひめ、黒くろ姫ひめか

高たか山やま彦ひこよよつく聞きけ
神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立たて別わける
此この世よを造つくりし神かみ直な日ほひ

心も廣き大直日 只何事も人の世は

直日に見直し聞直し 身の過ちは宣り直せ

神は汝と俱にあり 神の分靈を享けながら

小さき欲にからまれて 在處も知れぬ玉探し

玉を探すは良けれども 天地の神の賜ひたる

汝が靈魂を何時しかに 八十の枉津に抜きとられ

見るも穢き醜魂と スリ變へられて居ながらも

誠の靈を他所にして 形の玉に目も眩み

遠き海原乗りきりて 彷徨ひ廻る憐れさよ

汝高姫、黒姫よ 高山彦今よりは

生れ赤子の魂に 研き返して三五の

神の教をよく悟り 天地に轟く言靈の

貴の寶を身に持ちて 天地百の神等や

百千萬の民草を 安きに導き救はむと

神かみより出いでし神かむ靈たま

研みき澄すまして松まつの世よの

五み六ろ七くの神み業わざに盡つくせよや

嚴いづの御み魂たまの系ひつ統ぽうと

心こころ驕おごれば忽たちちに

又またもや今け日ふの玉たま騷さわぎ

繰くり返かへしつつ拭ぬぐはれぬ

恥はぢを搔かくのは目まのあたり

龍たつの宮みや居ゐの乙おと姫ひめと

曲まが津つの神かみの囁ささきを

大やま和と魂みたまの生き粹すゐと

思おもひ詰つめたる執し着ぢやくの

心こころの鬼おにに責せめられて

苦くるしみ悶もたゆる可い憐ぢらしさ

木この花はな姫ひめの神かみ言ことを

眞まことに受うけて聞きくならば

天あめヶ下がには仇あだもなく

枉まが津つの襲おそふ術すべもなし

神かみは汝なんぢと俱ともにあり

神かみの造つくりし神かみの宮みや

心こころを正ただしく清きよめなば

如い何かでか枉まが津つの潜ひそむべき

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ々ながら

神かみの御み言ことを畏かしこみて

一ひと日ひも早はやく片かた時ときも

誠まことの心こころに歸かへれかし

仕し組ぐみは深ふかし琵琶びはの湖うみ

浪なみに漂ただふ竹ちく生ぶ島しま

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の

にくの御宮より生れませる

しんとくたか
神徳高き英子姫

よろづよいは
萬代祝ふ龜彦の

あななひけつ
三五教の宣傳使

ちくぶ
竹生の島にましませど

ながみ
汝が身の心闇くして

そのみあらか
其御舎も得知らず

かへ
やみやみ歸る哀れさよ

かむながらかむながら
あゝ惟神々々

たふと
尊き神の御言もて

このはなひめ
木花姫が今此處に

なれ
汝が身の上憐れみつ

あめ
天と地との道理を

うまら
完全に詳細に説き諭す

あさひ
朝日は照るとも曇るとも

つき
月は盈つとも虧くるとも

たとへ
假令大地は沈むとも

わがこと
我言の葉は變らまじ

さんぜんせかい
三千世界の梅の花

いちど
一度に開く言靈の

きよ
清きは神の心なり

きよ
清きは神の心なり

みづ
瑞の御靈の永久に

しづ
鎮まりいます神島に

かみ
神の縁に繋がれて

まう
詣で來れる三人連れ

なれ
汝が望みし三つの玉

神の仕組で永久に 匿されあれば今よりは
心の底より諦めて 玉に魂をば抜かれなよ
汝が身の此處に來りしは 國依別や秋彦の
魂に憑りし天狗の 業にはあらし皇神の
尊き珍の御仕組 心を平らに安らかに
綾の高天にたち歸り 悔い改めて真心の
證をなせよ三身魂 三五の月の輝きて
錦の宮の棟高く きらめき渡る十曜の紋
神の光と拜みて 心を亂す事勿れ
あゝ惟神々々 御靈幸はへましませと
雲霧わけて大空に 何時しか貴の神姿は
消えさせ給ひし訝かしさ あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ。

轉迷開悟の蓮花

天教山をたち出でて

三人の心を照らさむと

木花姫の御神が

心を籠めし御教も

執着心の雲深く

容易に晴れぬ高姫は

木花姫が何偉い

日の出神や龍宮の

乙姫さまに比ぶれば

物の數にも當らない

お釋迦に經を説く様な

矛盾だらけの宣言を

他人は知らねど高姫は

如何して之が聞かれうか

馬鹿になさるも程がある

木花姫の御言葉を

今に至つて聞く様な

優しい身魂の高姫と

思召すかや情ない

變性男子の系統ぢや

日の出神を何處迄も

金輪奈落の底深く

信じ奉つた高姫は

そんなヘドロイ靈でない

金剛不壞の如意寶珠

何處に匿しありとても

探し當てずに措くものか

木花姫の男女郎

富士の山から飛んで来て

三人の者にツベコベと

譯の分らぬ事吐き

雲を霞と逃げ去つた

其醜態さはなかなか

見るも憐れな次第なり

黒姫さまよ高山彦の

長い頭の福祿壽さま

この様な事に肝潰し

心を變へちやならないぞ

トコトン迄も耐りつめ

變性男子の系統が

日の出神と諸共に

天晴れ表になる迄は

私の側を離れなよ

高姫司の「へらず」口

聞き度うないかは知らねども

袖振り合ふも多生の縁

躓く石も縁の端

同じ教の友舟に

乗つた以上は波も立つ

レコード破りの風も吹く

間にや暗礁に突きあたる

時ときには沈没逃ちんぼつのがれない
それが恐こはくて三五あななひの

神かみの教をしへが開ひらけよか
臆病風おくびやうかせに誘さそはれて

腰こしを抜ぬかしちやならないよ
心こころの弱よわい黒姫くろひめや

高山彦たかやまひこの友舟ともぶねは
なんだかちつとも氣き乗りのせぬ

比叡山ひえいざん嵐あらしに吹ふかれつつ
伊吹いぶきの山やまを仰あふぎ見みて

荒波あらなみ猛たける湖面うみづらを
渡わたつて歸かへる勇いさましさ

假令たとへ何事なにごとあらうとも
日ひの出神でのかみの生宮いきみやが

此世このよにあれます其限そのかぎり
鬼おにが出でようとも大丈夫だいぢやうぶ

鬼おにに鐵棒かなぼう大船おほぶねに
乘のり込こむ様やうな心地こころちして

跟ついて御座ござれよ何處どこ迄までも
今いまは言依別神ことよりわけのかみ

有象無象うきむねに抱かかへられ
翔たつ鳥とりさへも落おとす様やうな

偉えらい勢いきほひであるなれど
驕おこる平家へいけは久ひさしうない

櫻さくらの花はなは何時いつまでも
梢しゆに留とどまるもので無ない

一度嵐ひとつあらしが吹ふいたなら
落花狼藉らくくわらうぜき花はな莖むしろ

見上げた人の足許に
 踏み蹂られて亡び行く
 此處の道理を辨へて
 今は冬木の吾なれど
 臆て花咲く春が来る
 私の出世を樂しみに
 眞心盡して来るならば
 仇には捨てぬ高姫が
 肝腎要の片腕と
 屹度重く使ひます
 何と言うても系統ぢや
 高姫さまには叶はない
 是程見易い道理が
 賢いお前に何として
 分つて來ぬのか妾や不思議
 神の奥には奥がある
 其又奥には奥がある
 十五の空には片割れの
 月は如何して出るものか
 世間の亡者は種々と
 理屈ばかりを言ふけれど
 三五の月の神教は
 日の出神の生宮を
 抜いたら片割れ月ぢやぞえ
 雲に深くも包まれて
 其半分はここにある
 片割れ月を喜んで
 言依別を始めとし

空助親娘や玉能姫

國依別や秋彦の

譯の分らぬ幹部連

今に高姫歸りなば

ビツクリ仰天尻餅を

搗いてアフンとするであらう

必ず氣をば腐らさず

夫婦仲良く手を曳いて

龍宮さまの生宮と

それが違ふが違ふまいが

初めの言葉を立て通し

途中で屁太つちやなりませぬ

高山さまは立派なる

男の癖に又しても

弱音を吹いて高姫の

心を曇らす弱い人

黒姫さまも是からは

ヘイヘイハイハイ何事も

親爺の言葉に従はず

ちつとは意見をなさいませ

あまり男を大切に

思ひ過ごして神の道

チト疎かになりかけた

此高姫が見て居れば

眞に目倦い事ばかり

終にや齒痒うなつて来る

女房の決心一つにて

男は如何でもなるものだ

甘い顔うま かほして見みせる故ゆゑ

高山たかやまさまが駄だ々だ捏こねて

高姫たかひめまでも困こまらせる

チツトはお氣きを付つけなされ

チツトやソツトで神かみの道みち

さう易やす々やすと行ゆくものか

日ひの出で神かみが氣きを付つける

妾わしの意い見けんと茄なす子びの花はなは

千せんに一ひとつも「あだ」はない

「あだ」に聞きいてはなりませぬ

七重ななへや八重やへや九重ここのへと

花はなは匂におへど山吹やまぶきの

結實みりのりの致いたさぬ「あだ」

花はなに現うつを抜ぬかして言こと依より別わけの

ハイカラ命みことの花心はなこころ

盛さかり短みじかい「あだ」花はなに

心移こころうつしちやなりませぬ

苦勞くらうの長ながい梅うめの花はな

冬ふゆの寒さむさを能よく忍しのび

雪ゆきの農あしたや霜しもの宵よひ

堪こらへ忍しのんで春はるを待まち

萬よろづの花はなに魁さきがけて

匂におひ出いでたる花はなの香かは

天てんより高たかい高姫たかひめの

言葉ことばの花はなに如しくはない

黒姫くろひめさまよ高山たかやまの

峰みねに咲さいたる松まつの花はな

手た折をる由よしなき高望たかのぞみ

スツパリやめて高姫の 日の出神の生宮に

心を委ね身を任せ 昨夜の様な馬鹿な事

決して言ふちやなりませぬ 三歳児に説教する様な

気分が致して頼りない 頼りに思つた黒姫や

高山彦の弱腰に 妾も一寸泡吹いた

幸ひ此處は湖の上 四邊に人の居らざるを

見すまし誠を説いて置く あゝ惟神々々

御靈幸はへましてませよ。

漸やうやくにして船ふねは大津邊おほつべに安着あんちやくした。アール、エースの二人ふたりは高山彦たかやまひこの歸り來かへきたるを今いまや遅おそしと湖邊こへんを眺ながめて待ち倦あぐみつつあつた。

アール、エースの二人りやうにんは 永ながらく湖邊こへんに待たされて
高山彦たかやまひこのお歸りかへを 頸くびを伸のばして待ち居ゐたる

そこへ荒浪乗り切りつ

恐い顔した高姫が

漸う此處に歸り來る

アール、エースの兩人は

直ちに側に走り寄り

高姫様がお目出度う

金剛不壞の如意寶珠

何處に置いて御座りますか

根つから其處等に影もない

大方貴女はお寶を

丸呑みしたのに違ひない

道理でお腹が膨れてる

サアサア早く歸りませう

私も永らく待ち侘びた

黒姫さまは黄金の

尊い玉を手に入れて

何處へお匿し遊ばした

高山さまも紫の

玉を首尾よう手に入れて

お歸りましたであります

サアサア一同打ち揃ひ

逢坂山を乗り越えて

淀の川瀬を川上り

嵐の山や保津の谷

神の御稜威も大井川

観音峠を乗り越えて

聖地を指して歸りませう

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

こんな嬉しい事はない

高山さまのお供して

跟いて参つた其酬い

私の肩まで廣うなる

アール、エースの兩人は

綾の高天に馳せ上り

日の出神のお脇立

立派な神と謳はれて

聖地の花と咲き匂ふ

思へば思へば有難し

忝なしと伏し拜む

其有様の可憐しさ

高姫答ふる言葉なく

默然として居たりしが

黒姫忽ちシヤシヤり出で

お前はアール、エールさま

神の奥には奥がある

お前の知つた事ぢやない

構ひ立てをばして呉れな

由縁を言うては居られない

執拗う言へば腹が立つ

言はぬは言ふに彌勝る

物は言ふまい物言うた故に

父は長良の人柱

雉子も鳴かねば撃たれまい

お前はお黙り居りなさい

神が表に現はれて

善ぜんと悪あくとを立て別わかける
此この世よを造つくりし神かむなほひ直ほひ日ひ

心こころも廣ひろき大おほなほひ直ほひ日ひ
只ただ何なに事ことも黒くろ姫ひめが

羽は織おりの紐ひもぢや胸むねにある
何なんにも言いはずについで來こい

あゝ惟かむながらかむながら神かむながら々々
御み靈たま幸さちはへましませよ。

浪なみに浮うかべる竹ちくぶ生じま島ま
神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみの

隠かくれ給たまひし假かり館やかた
守まもり給たまへる英ひでこ子ひめ姫め

三あな五な教ひけつの神かむつ司かさ
龜かめ彦ひこ諸もろ共とも辨べん天てんの

神かみの社やしろに拜はい禮れいし
綾あやの聖せい地ちに向むかはむと

艫ろ櫂かいを操あやつる舟ふねの上うへ
伊い吹ぶき風おろしに吹ふかれつつ

心こころは高たか天か原まに沖おきの島しま
左ゆ手んでに眺ながめて漕こぎ渡わたる

琵琶びばの湖こ水すゐの浪なみ高たかく
風かぜは俄にはかに吹ふき荒すさび

御舟は將に覆らむと

する時忽ち天空を

照らして下る一團の

火光は美々しき神となり

二人が舟に現はれて

聲朗かに言靈を

宣らせ給へばアラ不思議

波は忽ち凧ぎ渡り

荒風俄に鎮まりて

鏡の如き湖の面

迂り行くこそ勇ましき

今現はれし神人は

日の出神の御化身

大津の濱に着くや否

煙の如く消え給ひ

何處ともなく歸ります

英子の姫は伏し拜み

神の恵を感謝しつ

龜彦伴ひ唐崎の

松に名残を惜みつつ

清き神代を三井の寺

五六七の神に逢坂の

關路を越えて大谷や

伏見、桃山何時しかに

後に眺めて進み行く

花の都の傍邊

浮名を流せし桂川

二人の身魂も堅木原

足あしに穿うがてる沓掛くつかけの關所せきしょを越こえて大枝山おほえやま

子安こやすの地藏ぢざうを右みぎに見みて罪つみも穢けがれも梨なしの木きの

峠たうげを下くだり三間坂さんげざか 夜よは明あけはなれ明あかけれど

名なは暗くらがりの宮みや越こえて 青あを草くさ茂しげる篠村しのむらや

廣道ひろみち、馬堀うまほり、柏原かしはら 高たか熊山くまやまの靈山れいざんを

左手ゆんでに眺ながめてシトシトと 大井おほゐの流ながれに沿そひながら

羽はは無なけれど鳥羽とばの驛えき 流ながれも清きよき室河原むろかはら

小山こやま、松原まつばら早はや越こえて 花はなの園部そのへや小麥山こむぎやま

三十三さんじふさんさう相名なに負おひし 觀音くわんのん峠たうげの頂上ちやうじやうに

息いきを休やすめて二人ふたり連づれ 須知しゆち、蒲生野こもののや檜山ひのきやま

神かみに由縁ゆかりの三さんの宮みや 榎えのき枯木こぼくの峠たうげ越こえ

大原おほはら、臺頭だいとう、須知山しゆちやまの 谷道たにみち下くだり漸やうやう々に

風光ふうくわう絶佳ぜつかの竝松なみまつに 二人ふたりは目出度めでたく着つきにけり

流れも清きよき小雲川こくもがは 竝木なみきの老松らうしう色深いろふかく

水に影をば映しつつ
松の梢に魚躍る
綾の大橋右に見て
愈聖地に着きにけり
あゝ惟神々々
御靈幸はへまませよ。

(大正一一・七・一九 舊閏五・二五 北村隆光録)

第一六章 三五玉(七八一)

金剛不壞の如意寶珠
黄金の玉や紫の
三つの御玉の御神業
あらまし此處に述べておく
天津御神の永久に
現幽神の三界を
永遠無窮に治めます
天壤無窮の神寶は

金剛不壞の寶珠なり

經濟學の根本を

岩より固くつきかため

地上の世界を圓滿に

融通按配治めゆく

金銀無爲の政策を

實行致すは黄金の

嚴の寶珠の永久に

變らぬ神の仕組なり

又紫の寶玉は

天下萬民悉く

神の御稜威に悦服し

神人和合の其基礎を

永遠無窮に守ります

神の定めし神寶ぞ

抑も三つの御寶は

天津御神や國津神

天國淨土の政治をば

豐葦原の瑞穂國

五つの島に隈もなく

神の助けと諸共に

伊照り透らし萬民を

安息せしむる神業に

最大必要の寶なり

あゝ惟神々々

深遠微妙の神界の

萬世不磨の御經綸

太き御稜威も高熊の

山に隠せし黄金の

晨を告ぐる鶏や

波間に浮ぶ神島の

常磐の松の根底に

かくし給ひし珍寶

金剛不壞の如意寶珠

天火水地と結びたる

紫色の神寶も

愈此世に現はれて

光を放つ神の世は

さまで遠くはあらざらめ

此世を造りし大神の

水も漏らさぬ御仕組

龍宮城の乙姫が

玉の御手より賜ひたる

浦島太郎の玉手函

それに優りて尊きは

三つの御玉の光なり

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

一日も早く片時も

とく速けく世の爲に

現はれまして良の

果てに隠れし元津神

坤なる姫神の

經と緯との水火合せ

神世安らけく平らけく

治め給はむ時はいつ

待つ間の永き鶴の首かめの齡よはひの神かみの世よを

渴仰翹望かつかうげうばうなしながら静かに待つぞ樂しけれしづ

波なみに漂ただよふ一つ島ひと黄金こがね花はな咲さく龍宮りうぐうの

祕密ひみつの郷さとと聞きえたる果物豊ゆたかな玉野原たまのはら

一眸いちぼう千里せんりの其中そのなかに青垣山を三方さんぱうに

いと美うるはしく繞めぐらせる金波漂ただよふ諏訪すはの湖うみ

玉たま依より姫ひめの永とこ久しへに水底深ふかく鎮しづまりて

守まもり給たまひし麻ま邇にの玉たま天てん火くわ水すゐ地ちと結むすびたる

青赤あおあかしろ白き黄むら紫さきの玉たまの功績いさをを述のべつれば

世界せかい統治とうぢの礎いしずを堅磐常磐かきはときにつきかため

天あめの下したをば安やす國くにと治むる王者わうじやの身魂みたまこそ

紫玉むらさきだまの功績いさをしぞ王者に仕つかへ民治たみをさめ

中なか執とり臣おみと勤いそしみて世界を治をさむる大臣おほおみの

稜威いづの活動くわつどう其そのものは心も赤あかき赤玉あかだまの

天地自然の功績ぞ

國魂神と現はれて

百の民草治めゆく

小さき臣の活動は

臣の位の水御玉

上を敬ひ下を撫で

臣の位を能く盡し

上は無窮の大君に

下は天下の民草に

心の限り身を盡し

誠を盡す活動は

水の位の白玉の

天地確定の功績ぞ

神を敬ひ大君を

尊び奉り耕しの

道に勤しみ工業や

世界物質の流通に

只管仕ふる商人の

誠の道を固め行く

天地自然の功績は

土に因みし黄金の

稜威の御玉の天職ぞ

さはさり乍ら今の世は

心の赤き赤玉も

それに次ぐべき白玉も

黄色の玉も悉く

光なきまで曇り果て

何の用なき團子玉

天火水地を按配し

此神玉の活用を

圓満清朗自由自在

照らして守るは紫の

神の結の玉ぞかし

紫色の麻邇の玉

今や微光を放ちつつ

心の色も丹波の

綾の聖地にチクチクと

其片光を現はして

常世の暗を隈もなく

照らさせ給ふ光彩は

嚴の御靈の神司

瑞の御靈の神柱

經と緯との御玉もて

世界十字に踏みならし

一二三四五つ六つ

七八つ九つ十たらり

百千萬の神人の

救ひの爲に千萬の

悩みを忍び出で給ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はへましまして

誠の神の御教に

服従ひ來る信徒よ

綾の高天に古くより

仕へ奉りし神司

變性女子の瑞御靈

又もや副守が發動して

譯の分らぬ氣焰吐く

皆々一同注意して

審神をせなくちやならないぞ

近くに侍る盲信者

甲乙丙丁戊の様

迎合盲従はならないぞ

氣を付け召されと鼻高が

少しの學識鼻にかけ

いろいろ雑多の小理屈を

竝べて神の經綸を

紛亂せむと企みつつ

副守の惡靈に驅使されて

空前絶後の神業に

外れる人も偶にある

同じ教の信徒は

神の心を汲み取りて

互に氣を付け助け合ひ

慢心鐵道の終點に

行詰りたるアフォン驛

何のエキ無き醜態を

暴露させない其間に

世人を思ふ眞心の

凝り固まりし瑞月が

ここに一言述べておく

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも
 誠の力は世を救ふ 誠を知らぬ智惠學者
 此物語見るならば 輕侮の念を起すあり
 脱線文章と笑ふあり 卑近の俗語を列ねたる
 半狂亂の惡戯と 初からこなす人もある
 冷笑惡罵は初から 百も承知の瑞月が
 神の御言を畏みて 三五教の眞相を
 學と知識の評釋で 取違ひたる過ちを
 直日に見直し聞直し 宣り直させて神界の
 誠の道をしらすむと 惡罵熱嘲顧みず
 口の車の轉ぶまに 筆者の筆のつづくだけ
 繰返し行く小田巻の いと長々と記しておく。

(大正一一・七・二〇)

舊閏五・二六 松村眞澄録)

第一七章 歸り路（七八二）

執着心に煽られて

玉の在處を執拗に

發見せむと再度の

山の天狗の囁言に

心を焦ちて高姫が

黒姫、高山彦を伴れ

思ひ思ひに竹生島

古き社の床下に

三角石を取り除けて

掘つても掘つても玉無しの

無駄働きに眼まで

三角形に尖らせて

肩を四角に揺りつつ

暗の帳を押し分けて

いよいよ茲に斷念し

屋根無し小舟に身を任せ

琵琶の湖水を横切りて

大津の濱に安着し

高山彦や黒姫の

魂ぬけ男女と諸共に

アール、エールを引連れて

力の抜けた旅の空

路傍ろばうに立たてる柿かきの木きに

澁しぶい顔かほして村鴉むらからす

高姫たかひめ一行いっかうを頭上づじやうより

瞰かん下かしながら聲こゑ限り

アホーアホーと鳴なき立たてる

高姫たかひめ小癩こしやくにさへながら

空そらふり向むいて獨ひとり言こと

あゝ馬ば鹿からしい馬ば鹿からしい

烏からすの奴やつまで笑わらひやがる

これもヤツパリ黒くろ姫ひめが

氣きが利きき過すぎて閒まがぬけた

神策しんさく實じつ行かうの報ほう酬しうぢや

偉えらい家けらい來らいは欲ほしいもの

ほしは星ほしぢやが夜よ這ひ星ほし

何處いづくの空そらか暗やみ雲くもに

脱だつ線せんするか分わからない

高山たかやま低山ひきやま數かず越こえて

足許あしもと危あやふき老おいの坂さか

何なんの力ちからも梨なしの木きの

愛想あいさつつかした胸むねの暗やみ

王子わうじ暗くらがり宮みやの下した

明あかして通とほる恥はづかしさ

向むかふに見みえるは龜山かめやまか

雲くもに聳そびえた森しんりん林の

中なかにキラキラ十曜とえうの紋もん

あれこそ確たしかに月宮げつきうでん殿の

あこには梅照彦つめてるひこのかみ司の

鹿爪しかつめらしい顔かほをして

扣へて居るに違ひない

一寸立寄り高姫が

日の出神と現はれて

三千世界の御仕組の

變性男子の御教旨を

聞かして改心さしてやる

道に迷うた亡者をば

見すてて素通り出来はせぬ

これも神業の一端だ

黒姫さまはどう思ふ

高山彦の福祿壽さま

御意見あらば今此處で

遠慮會釋は要りませぬ

包まず隠さずサツパリと

意見をお吐きなされませ

言へば黒姫肯いて

實に尤もぢや尤もぢや

高姫さまのお言葉に

迎合盲從致します

高山彦のハズバンド

貴方も一緒に参りませう

三人世の元結構ぢや

アール、エースは供の役

これは身魂の數でない

三人寄れば昔から

文殊の智慧が出ると聞く

辨天さまの床下で

馬鹿にされたる腹いせに

文殊菩薩もんじゆぼさつとなりすまし 普賢勢至ふげんせいしの三人さんにんが

只一厘ただいちりんの御經綸ごけいりん 眞向上段まつかうじやうだんに振りかざし

言依別ことよりわけに盲従もうじつする 梅照彦うめてるひこを言向ことむけて

聖地せいちへ歸かへる案内あんないの 猿田彦神さだひこかみとしてやらう

あゝ惟神かむながらかむながら々々 御靈幸みたまさちはへまませと

徳利膝頭とつくりこぶらに大地だいちをば ドンドンと威喝あかつさせ

大道だいたう狭せましと横柄面わうへいづら 月宮殿げつきうでんの片かたほとり

梅照彦うめてるひこの神館かむやかた 目指めざして進むすす可笑をかしさよ。

梅照彦うめてるひこの神館かむやかた 門かどに佇たたずみ高姫たかひめは

もしもし此處ここを開あけとくれ 日ひの出神でのかみの御入來ごじゆらい

龍宮海りうぐうかいの乙姫おとひめが 憑うつつりなされた肉にくの宮みや

梅照彦は在宅か　こんな結構な神人が

來訪あるのを知らずして　奥に居るとは情ない

天眼通も此頃は　曇つて來たと見えるわい

執着心に搦まれて　吾身よかれの信心者

言依別にハイハイと　迎合盲従した罰で

折角覺えた天眼通　ゼロになつたか情ない

一時も早く村肝の　胸の岩戸を押し開けて

日の出神を迎へ入れ　空前絶後の神界の

誠の花咲くお仕組を　聞かして貰はうとせないので

ホンに身魂の因縁は　争はれないものぢやなア

梅照姫も亦さうぢや　よくよく揃うた盲共

爺も爺嬢も嬢　早う開けぬか開けぬかと

皺唄れ聲を張りあげて　力限りに訪へば

佛頂面した門番は　不承不性に現はれて

主人しゅじんの不在るすの此家このいへに 門戸もんこを叩たたくは何人なんびとか

トツトと歸かへつて下くださんせ 聞きくより高姫たかひめ聲こゑをかけ

お前まへは此家このやの門番もんばんか 梅照彦うめてるひこは何處どこへ行いた

日ひに日ひに神界しんかい切迫せつぱくし 千騎せんき一騎いつきの此場このばあひ合あひ

世界せかいの難儀なんぎを他所よそに見みて 夫婦ふうふ二人ふたりが氣樂相きらくさうに

紅葉もみぢ見遊山みゆざんに往いたのだる 親おやの心こころは子こし知らずだ

神かみの心こころは人ひと知らず それも俗人ぞくじんならばよい

宣傳使せんでんしたる身みを以もつて 館やかたを空からにとび歩あるく

これもヤツパリ言依別ことよりわけの 醜しこの命みことのドハイカラ

深ふかき感化かんくわの映像えいざうか 不在るすなら不在るすで仕方しかたない

早はやく此門このもん開あけてくれ 一度いちど館やかたを檢あらめて

善ぜんか悪あくかを調しらべあげ 神かみに報告ほうこくせにやならぬ

グツグツしてると日ひが暮くれる 日ひの暮神くれがみではない程ほどに

早はやく開あけたが宜よからうぞ 開あけよ開あけよと急せり立たてる

中より門番尖り聲 どこの奴かは知らねども
無理に此門開けよとは 禮儀を知らぬ馬鹿女
梅照彦の御夫婦は お前の言ふよな人でない
言依別神さまが 龍宮の島の麻邇寶珠
立派な立派な五色の お寶物が納まつて
其お迎へやお祝を 兼ねて一同參れよと
實にも目出度い御知らせに 千騎一騎の神業に
仕へ奉るは此時と 勇み進んで行かれたぞ
それに就いても高姫や 黒姫さまや高山彦の
長い福祿壽の神司 三つの玉に魂抜かれ
阿呆が足らいで近江路の 琵琶の湖水の竹生島
影も形もない玉を 掴みに往つた其後で
肝腎要の神業が 綾の聖地で行はれ
萬事是にて梟がつき アフォンとするのは高姫や

黒姫さまぢやと云ふ事だ お前は誰かは知らねども
長い道中する間に 高姫さまに出會うたら
分りもせない玉探し 心の底から思ひ切り
早く聖地へ歸れよと 梅照彦の門番が
言づけしたと言うてくれ あゝ惟神々々
私は叶はぬ秋の空 飯が焦げつく氣が紅葉
どれどれ早う奥へ行き 梅照彦の不在事に
ゆつくり御馳走食べませう あゝ惟神々々
叶はぬなれば立歸れ これで御免と門番は
いそいそ奥へ隠れゆく。

梅照彦の門番が

話を聞いて高姫は

電光石火雷の

轟く如く胸躍り

心に荒浪立ち騒ぐ

猪喰た犬の高姫は

さあらぬ態に胸押へ

言葉もいとど淑やかに

打つて變つた猫撫での

いやらし微笑を浮べつつ

ホんに浮世は儘ならぬ

ヤツパリ龍宮の御寶

時節参りて綾錦

高天原に納まつて

神政成就待ち給ふ

それに就いては龍宮の

乙姫さまの肉の宮

ここでしつかりなされませ

天火水地と結びたる

麻邇の寶珠は龍宮の

乙姫さまの御寶

初稚姫や玉能姫

國依別が喜んで

上を下へと立ちさわぎ

勇むはヤツパリ黒姫の

身魂の御蔭である程に

日の出神は神として

これからお前が片肌を

脱いで掛らにやなりませぬ

肝腎要の性念場

あななひけう
三五教の黒姫の
肉の宮にと納まつて

しうげふ
修業なされた玉依姫の
貴の命はわしぢやぞえ

なが
永らく龍宮の一つ島に
住みて居たのは外でない

けふ
今日の慶事を前知して
わしの身魂が活動し

いつ
五つの玉を授けたと
甘く言ふのは今ぢやぞえ

かんじんかなめ
肝腎要の性念場
空前絶後の神業だ

かなら
必ず抜かつちやなりませぬ
高山さまも其心算

しかく
四角い肩をなめらかに
丸い目玉を細うして

けん
険を隠した地藏顔
そこは體よくやるがよい

このたかひめ
此高姫も一か八
此手で行かねばあれの手で

さそく
早速の頓智やつて行く
これが全く朝日子の

ひ
日の出神の御働き
只何事も神直日

こころ
心も廣く大直日
直日に見直し宣り直し

み
身の過ちは打消して
正々堂々神の爲

よびと 世人の爲に少々の

かきん 瑕瑾はうまく葬つて

くうぜんぜつこ 空前絶後の神業を

くわんせい 完成したる曉は

それこそ誠の神柱

よも 四方に薫れる梅の花

かう宣り直し見直せば

いままでな 今迄嘗めた失敗も

びは 琵琶の湖水の泡と消え

いぶき 伊吹の山の白雲と

なつて煙散霧消する

こころ 心一つの持ちやうで

いつも氣樂に暮される

わら 笑うて暮すも一生ぢや

くや 悔んで暮すも亦一生

ひと 人の手柄を横取し

ずるい奴ぢやと言はれうが

かま 構うて居れない今の首尾

勝てば善なり負ければ悪ぢや

か 勝つて甲の緒をしめりや

あとは天下は泰平ぢや

ほんたう あゝ本當に本當に面白い

けつこう 結構な智慧が湧いて來た

まつた これも全く龍宮の

おとひめ 乙姫さまの御手傳ひ

ひ 日の出神の御働き

あつば 天晴れ表に現はれた

しんぱう ヤツパリ辛抱はせにやならぬ

誠まことの力ちからのある神かみは トコトン迄までも氣きを引ひくと

變性へんじやうなんし男子ふでさきの筆先ふでさきに 立派りつぱに立派りつぱに書かいてある

筆先ふでさき活いかして使つかふのも 心こころ一つひとの使つかひ方かた

筆先ふでさき殺ころして使つかふのは あつたら寶たからの山やまに入いり

裸跣はだかはだしで怪我けがをして 吠面ほえづらかわいてメソメソと

歸かへつて來きたる馬鹿ばかの所作しよさ ヤツパリ表おもての筆先ふでさきを

眞解しんかいするのはわしぢやぞえ 變性へんじやうによし女子おんなのハイカラが

どうしてお筆ふでが解とけますか 日ひの出での守護しゆごと云いふ事ことは

日ひの出で神かみの生宮いきみやが 天晴あつぱれ高天たかまに現あらはれて

何なにから何なにまで落おちもなく 筆先ふでさき通とほりに氣きを配くばり

指揮さしづをせいと云いふ事ことぢや ここの道理だうりをよく腹はらへ

締め込こみおいて下くだされや 聖地せいちへ歸かへつてこんな事こと

ゆつくり話はなす暇ひまはない 道々みちみち誠まことの御仕組おしぐみを

お前まへの腹はらに詰つめておく あゝ惟神かむながらかむながら々々

日の出の曙光が見えて来た
いよいよ今日から高姫は

千人力の經の役
瑞の御靈を頭から

ウンと一口噛みつけて
經のお筆をふりかざし

言向け和して神界の
誠の御用をせにやならぬ

是を思へば何となく
重たい足も軽うなり

沈んだ心も欣々と
俄に浮いて来た様だ

あゝ潔し潔し
千軍萬馬の功を經し

高姫司のある限り
三五教は千代八千代

磐石の如動かない
誠のお方が現はれて

誠の事を説いたなら
體主靈從の身魂等が

アフォンと致して後へより
指を脚へて見てをると

經のお筆に出してある
尊きお筆が實現し

瑞の御靈が屁古垂れて
日の出神の生宮が

天晴れ表に現はれる
之を思へば頼もしい

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はへましませと

高姫一行勇み立ちたかひめいつかういさ 足音高く大地をばあしおとたか だいち

威喝させつつ歸り行くあかつ 萬代祝ふ龜山のよろづよいは かめやま

貴の館を後にしてうづ やかた あと 船井へ渡る千代川のふなみ わた ちよかは

流れも清き川關やなが きよ かはせき 音に名高き鳴石のおと なたか なきいし

舊趾を左手に眺めつつきつし ゆんで なが 猫を被つて虎天のねこ かぶ トラてん

堰所を越えて松竝木せきしよ こ まつなみき 高城山に立寄りてたかしるやま たちよ

ウラナイ教の松姫がけう まつひめ 幅を利かした表門はば き おもてもん

馬と鹿との兩人がうま しか りやうにん 身魂の性來現はれてみたま しやうらいあら

四つ這姿で這ひ込んだよ ばひすがた は こ 此處が名高い古戦場ここ なたか こせんじやう

平助、お櫓の兩人がへいすけ なら りやうにん 腹から生れたお節奴がはら うま せつめ

玉能の姫と偉相にたまの ひめ えらさう 松姫さまの後をとりまつひめ あと

坐つて居たのは憎らしいすわ ゐ にく あゝ惟神々々かむながらかむながら

思へば胸が悪くなるおも むね わる サアサア早く歸りませうはや かへ

八十八字の郷を過ぎ

道の廣瀬の川傳ひ

翼なれば鳥羽の宿

小山松原縫ひながら

花の園部の大橋を

スタスタ渡り桐の庄

観音峠の急坂を

爪先上りの高姫が

一行五人汗垂らし

錦染めなす四方の山

眺めもあかぬ此景色

日の出神の生宮の

清き心は目のあたり

山は錦の衣を着て

錦の宮に歸り行く

吾等一行歓迎する

御空は清く澄み渡り

大地は錦の山屏風

これぞ晴天白日の

高姫さまの眞心が

現はれました兆候ぞや

黒姫續けと先に立ち

須知山峠をスタスタと

下りて来る綾の口

小雲の川の松影に

釣する男に目をつけて

これこれお前は何處の人

三五教に仕へたる

神かみの司つかさぢやあるまいか

千騎せんき一騎いつきの此この場合ばあひ

日ひの出で神のかみの御お歸かへりを

餘よ所そに眺ながめて氣き樂らく相さうに

魚う釣をり三さん昧まい何なんの事こと

そんな殺せつ生しやうはやめなさい

諸しよ行ぎやう無む常じやう是ぜ生しやう滅めつ法ぽふ

生滅しやうめつ已つひの理ことわりを

知しらずに魚さかなの命いのち取とり

樂たのしみ暮くらす惡あく神がみの

憑つつた惡わるい守しゆ護ご神じん

其その肉にく體たいは何なん人びとぞ

あゝ忌いまはしやと側そばに寄より釣つりする男をとこの笠かさを取とり

顔かほを眺ながめて仰ぎやう天てんし

國くに依より別わけか國くに州しゆうか

宗むね彦ひこ、お勝かつの其その昔むかし

巡じゆん禮れい姿すがたとなり終をふせ

宇う都づ山まが郷がの川かはの邊べで

太たい公こう望ぼう氣き取どりの松まつ鷹たか彦ひこに

意い見けんした事こと忘わすれたか

曲まがつた針はりに餌えをつけて

世せ界かいの亡まう者じやを釣つらうとは

餘あんり蟲むしがよすぎるぞ

改かい心しんなされ國くにさまよ

再ふた度たび山やまの山さん麓ろくで

身み魂たまの曇くもり切きつたる野の天てん狗ぐに憑つかれた時ときの面つら付つきは

まだ消えやらぬ ありありと どころかの端に残つてる

吾等三人うまうまと 欺して近江へ追ひ下し

エライ憂目に遇はしたな 此高姫をうまうまと

竹生の島へ追ひやれば 萬劫末代歸らぬと

思うて居たのが運の盡き 高姫ぢやとて足がある

石の地藏なら知らぬこと 時節がくれば歸り來る

サアサア早う歸りやんせ お前に向つていろいと

言はねばならぬ事がある サアサア歸のうと促せば

國依別は微笑して 頭を軽く下げながら

お前は高姫黒姫か 高山彦か よう無事で

早く歸つて下さつた あなたが御歸り遊ばすと

國依別の天眼通 早くも悟つて御馳走の

用意をしようと思ひ立ち 小雲の川に竿たれて

勢鋭き眞鯉をば せめて四五尾釣りあげて

刺身つくりにしたり煮にしめあげ
お前等まへら一行いっかう三人さんにんを

招待せうたいせむとの魚釣さかなつり
悪わるくは思おもうて下くださるな

國くに依別よりわけはお前まへから
惡あくの身魂みたまと見みえるだる

心こころの奥おくの其奥そのおくに
誠まことの血潮ちしほが流ながれてる

そこをば買かつて貰もらはねば
國くにさま立たつ瀬せがないわいな

あゝ惟かむながらかむながら神々々
御靈みたま幸さちはへましまして

頑迷くわんめい不靈いふれいの高姫たかひめが
スツパリ轉迷てんめいかいご開悟かいごして

誠まことを悟さとり今日けふよりは
憎にくまれ口ぐちを叩たたかずに

神前しんぜん奉仕ほうしをさせてたべ
東あづまの空そらを眺ながむれば

瑞雲ずいん棚たな引き澄すみわたる
今日けふは菊月きくづき十五夜じふごやの

瑞月ずいげつ空そらに皎かう々と
下界げかいを照てらす瑞光ずいくわうは

綾あやの聖地せいちの瑞祥ずいしやうを
壽ことほぎ給たまふ如ごとくなり

嚴いづの御靈みたまや瑞御靈みづみたま
三五さんごの月つきの神教みをしへは

豐葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに
島しまの八十やそし島ま八十やその國くに

おほつなばら
大海原の果てまでも
みたまさち
御靈幸はへましてよ。

かがや
輝き渡れ
かむながら
惟神

跋ばつ

にちりんさま
日輪様の御親切

なさけ
あついに包まれて

いなぎ
小田の稲木はむくむくと

お
生ひ立ち茂る三伏の

あつ
暑さに弱りむぐらもち

ひみ
日見ずの今日も家の内

蚤のみには刺さされ蚊かに喰くはれ
汗あせをたらたら拭ぬぐひつつ
横よこに立たちつつ二十餘はたちまり
六むつ目の卷まきの物語ものがたり
瑞月ずゐげつ現代流行げんだいりゅうかうの
怠業たいげふきぶん氣分きぶんに襲おそはれて
口述こうじゆつ代用だいようの歌うた口調くちやう
吐はき出だす絲いとは蜘蛛くもの如ごと
尻しりからブウブウ口くちからも
ブツブツ繰くり出す花詩歌はなしかの
止とめ度ども知しらぬ口車くちぐるま
全卷ぜんくわんのこ残のこらずウタウタと
夢ゆめかうつつか寢言ねごとの餘あまり
暑中しよちゆう休暇きゆうかの覺悟かくごして

三つの神寶や五つ神寶

高天原に納まりて

言依別の神司

千々に心を砕きつつ

日の出神の生宮と

自稱自認の高姫が

執着心の雲深く

迷うて進む竹生島

元より玉なき神殿の

床下深く掘り上げて

性凝りもなき玉探し

述ぶるも悲惨の極みなれど

そのの経緯の大略を

月照彦の御守りに

寫うつす神かみ代のよの語かたり草ぐさ

花はなも實みもある三あ五な教ひの

尊たふとき神かみの大だい精せい神しん

うまらに具つばらに汲くみあげて

水みづの御み魂たまの神かむ業わざに

仕つかへ奉まつらむ信まめ徒ひとの

一ひとり人も多おほく生あれかしと

祈いのるは瑞ずゐ月げつのみならず

國くに常とこ立たちの大おほ御み神かみ

豊とよ國くに主ぬしの大おほ神かみの

仁じん慈じ無む量りやうの御み心こころぞ

卑ひ近きんな文もん句く言ことの葉はも

婦ふ女ぢよ子し小せう兒にに成なるべくは

徹てつ底ていさせたき眞ま心こころぞ

如何いかに名文卓説めいぶんたくせつも

數多あまたの人に解わからねば

夏木なつきに嘯さへつる蝉せみの聲こゑ

何なんの效果かうくわもあらざらむ

あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたま幸さちはへましまして

瑞月ずゐげつ靈界物語れいかいものがたり

嚴いづの御靈みたまの御諭みさとしを

竝ならべて一々いちいち讀よみ行ゆけば

忽たちまち迷夢めいむは醒さめ渡わたり

瑞みづの御靈みたまの世よを救すくふ

清きよき神慮しんりよを悟さとるべし

團扇うちわ片手かたてに採とりながら

膝ひざをたたいてバタバタと

巻まきの終をはりに喋しゃべ舌おり置おく。

(大正一一・七・二〇 舊閏五・二六 松村眞澄録)

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

靈界物語 第二六卷 海洋萬里 丑の卷

終り